

普正寺遺跡

健民海浜公園野鳥飼育園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

1984

石川県立埋蔵文化財センター

普 正 寺 遺 跡

健民海浜公園野鳥飼育園整備事
業に伴なう緊急発掘調査報告書

1 9 8 4

石川県立埋蔵文化財センター



遺跡周辺の航空写真(東から)



調査区俯瞰(東から)



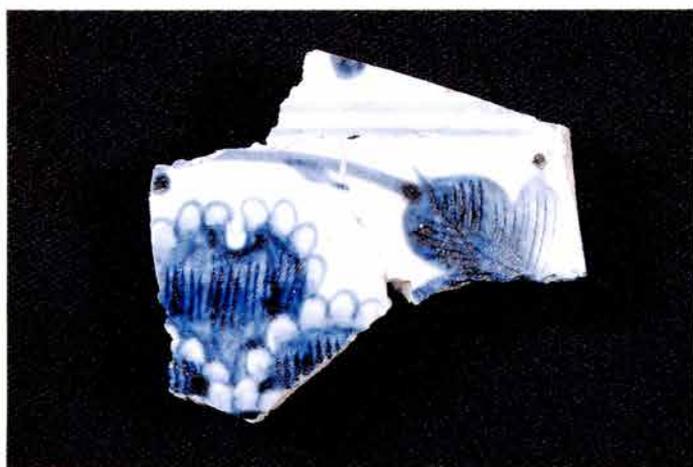
青磁碗



白磁・天目



青磁



青花磁



柿經

目 次

	頁
第 I 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	3
第 II 章 調査に至る経緯と経過	
第 1 節 遺跡の発見と第一次調査	4
第 2 節 調査経過	5
第 3 節 調査日誌（抄）	8
第 III 章 調査概要	
第 1 節 層 序	9
第 2 節 遺構検出状況	10
(1) 上層面 (2) 中層面 (3) 地山面	
第 IV 章 遺構と遺物	
第 1 節 上層面の遺構と遺物	16
(1) 第 1 号土坑 (2) 植木鉢 (3) 段状遺構 (4) 鍛冶台	
第 2 節 中層面の遺構と遺物	17
(1) 第 2 号土坑 (2) 第 3 号溝 (3) 粘土面下出土土器	
第 3 節 地山面の遺跡と遺物	21
(1) 土 坑 (2) 遺構出土遺物	
第 V 章 遺 物	
第 1 節 原始・古代の遺物	27
第 2 節 舶載陶磁器	27
(1) 青 磁 (2) 白 磁 (3) 天 目 (4) 青花磁	
第 3 節 国産陶磁器	36
(1) 瀬戸系陶器 (2) 珠洲焼 (3) 越前焼・加賀焼	
(4) 土師質・瓦質土器 (5) 円盤状陶製品	
第 4 節 石製品	50
(1) 硯 (2) 砥 石 (3) 滑石製品 (4) 行 火・火打石	
第 5 節 土製品	55
第 6 節 金属製品	57
(1) 銅 銭 (2) 鉄製品	
第 7 節 鍛冶関係の遺物	61
(1) 韃の羽口 (2) るつぼ	
第 8 節 骨角製品	63

第9節 木製品	63
(1) 下駄 (2) ハシ状木器 (3) その他	
第10節 漆器	66
第11節 柿経	67
第VI章 調査の成果と課題	
(1) 砂丘と遺構 (2) 遺跡と遺構の性格	
第1節 遺跡と遺構	70
第2節 陶磁器の組成と機能分担	74
(1) 陶磁器の組成と機能分担 (2) 陶磁器の用途と機能	
(3) 陶磁器の特質と変遷	
第3節 遺跡の性格	85

挿 図 目 次

	頁
第1図 位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	2
第2図 第1次調査範囲	4
第3図 周辺の地形と調査区 (1/5,000)	6
第4図 調査区の位置 (1/3,000)	7
第5図 調査区区割図 (1/400)	9
第6図 土層断面および地山面地形図 (1/60、1/150)	11・12
第7図 上層面遺構実測図 (1/100)	13
第8図 中層面遺構実測図 (1/100)	14
第9図 地山面遺構実測図 (1/100)	15
第10図 上層面検出遺構実測図 (1/10、1/40)	16
第11図 上・中層面検出遺構出土土器実測図 (1/3)	17
第12図 第2号土坑・第3号溝実測図 (1/40)	18
第13図 第3号溝出土土器実測図 (1/3)	19
第14図 粘土面下出土土器実測図 (1/3)	20
第15図 第3・6・7号土坑実測図 (1/40)	21
第16図 地山面検出遺構出土土器実測図(1) (1/3)	23
第17図 地山面検出遺構出土土器実測図(2) (1/3)	25
第18図 原始・古代の遺物実測図 (1/3)	27
第19図 青磁実測図(1) (1/3)	29
第20図 青磁実測図(2) (1/3)	31
第21図 白磁・天目実測図 (1/3)	35
第22図 青花磁実測図 (1/3)	36

第23図	瀬戸系陶器実測図(1) (1 / 3)	37
第24図	瀬戸系陶器実測図(2) (1 / 3)	39
第25図	瀬戸系陶器実測図(3) (1 / 3)	41
第26図	珠洲焼実測図(1) (1 / 3)	43
第27図	珠洲焼実測図(2) (1 / 3)	44
第28図	越前焼・加賀焼実測図 (1 / 3)	46
第29図	土師質土器実測図 (1 / 3)	47
第30図	瓦質土器実測図 (1 / 3)	48
第31図	円板状陶製品実測図 (1 / 3)	49
第32図	硯実測図 (1 / 3)	50
第33図	砥石実測図 (1 / 3)	52
第34図	滑石製品実測図 (1 / 3)	53
第35図	行火・火打石実測図 (1 / 3)	54
第36図	土錘実測図 (1 / 3)	56
第37図	銅銭出土位置図 (1 / 200)	57
第38図	銅銭拓影 (2 / 3)	59
第39図	鉄製品実測図 (1 / 3)	61
第40図	鍛冶関係遺物実測図 (1 / 3)	62
第41図	骨角製品実測図 (1 / 2)	63
第42図	木製品実測図(1) (1 / 3)	65
第43図	木製品実測図(2) (1 / 3)	66
第44図	漆器実測図 (1 / 3)	67
第45図	出土土器の組成	77
第46図	層位別出土主要陶磁器一覧	89・90

表 目 次

		頁
第1表	砥石の石質一覧表	52
第2表	土錘計測値一覧表と土錘の分類	56
第3表	銅銭出土一覧表	58
第4表	柿経釈文表	68
第5表	出土土器総破片数	75

図 版 目 次

巻頭図版 1 遺跡周辺の航空写真（東から）、調査区俯瞰（東から）

巻頭図版 2 青磁、白磁、天目

巻頭図版 3 青磁碗、青花磁、柿経

本文対照頁

図版 1	遺跡周辺の航空写真（昭和22年撮影）	1～3
図版 2	調査区俯瞰（東から）、遺跡近景（調査前、北東から）	4～7
図版 3	調査区近景（上―北から、下―東から）	9
図版 4	上・中層面検出状況（上―北から、下―西から）	10～14
図版 5	鍛冶場検出状況、段状遺構検出状況	16～17
図版 6	第2号土坑検出状況、鉄滓群検出状況	17～18
図版 7	鍛冶台・溝状遺構検出状況、第3号溝遺物出土状況	18
図版 8	遺物出土状況（上―青磁碗、中―下駄、下―漆器椀）	16～18
図版 9	遺物出土状況（上―漆器皿、中―瀬戸平碗、下―植木鉢）	16～18
図版10	上・中層面検出状況、地山面検出状況（東から）	13～15
図版11	地山面検出状況（上―北から、下―西から）	14～15
図版12	地山面ピット群近景（西から）、地山面土坑・ピット群近景（南から）	14～15
図版13	地山面土坑・ピット群近景・地山面ピット群近景（北西から）	14～15
図版14	第3号土坑検出状況、第6号土坑検出状況	21～22
図版15	第7号土坑検出状況、地山面発掘調査風景	22
図版16	南壁断面、同（旧河道部分）	9・10
図版17	上・中層面遺構出土土器（第11図）、第3号溝出土土器（第13図）(1/3)	16～19
図版18	粘土面下出土土器（第14図）、地山面検出遺構出土土器（第16図）(1/3)	20～23
図版19	地山面検出遺構出土土器（第16・17図）、原始・古代の遺物（第18図）(1/3)	26～26
図版20	青磁（上―第19図、下―第20図）(1/3)	27～33
図版21	白磁、天目（第21図）、青花磁（第22図）、瀬戸系陶器（第23図）(1/3)	33～37
図版22	瀬戸系陶器（上―第23図、中―第24図、右下―第25図）(1/3)	37～42
図版23	珠洲焼（上―第26図、下―第27図）(1/3)	42～44
図版24	越前焼・加賀焼（第28図）、瓦質土器（第30図）(1/3)	45～46
図版25	土師質土器（上―第29図）、円板状陶製品（中―第31図）、硯（下―第32図）(1/3)	47～50
図版26	砥石（上―第33図）、滑石製品（中―第34図）、行火・火打石（下―第35図）(1/3)	51～52
図版27	土錘（第36図）、鞆の羽口・るつぼ（第40図）、人骨（左上腕骨）(1/3)	55～56
図版28	銅銭（第3表・第38図）(1/2)、鉄製品（第39図）(1/3)	57～61
図版29	木製品（第42・43図）、漆器（第44図）(1/3)	63～67
図版30	柿経（第4表）、骨角製品（第41図）(1/2)	63・66・67

例 言

- 1 本書は石川県金沢市^{かほしじ}普正寺町地内に所在する普正寺遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、健民海浜公園野鳥飼育園整備事業に伴う緊急発掘調査で、調査費は石川県健民公社が予算措置を行ない。分布範囲確認調査費および遺物整理費、報告書刊行費は石川県土木部公園緑地課が予算措置を行った。
- 3 本遺跡の分布範囲確認調査は、土木部公園緑地課の依頼を受け石川県立埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査は石川県健民公社の委託で当センターが実施した。
- 4 本遺跡の分布範囲確認調査は、1981年10月19日から同月21日にかけて実施し、発掘調査は1982年6月7日から同年8月10日まで行った。
- 5 本遺跡の発掘調査は、三浦純夫、垣内光次郎（石川県立埋蔵文化財センター主事）が担当し、桜井甚一、荒木繁行、福田弘光、滋井 真、広多清一の各氏の指導と協力を受けた。
- 6 遺物の整理作業にあたっては、次の各氏の指導・助言を受けた。
三上次男（東京大学名誉教授）、亀井明德（九州歴史資料館）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、上田秀夫（和歌山県文化財課）、吉岡康暢（県立郷土資料館資料課長）、四柳嘉章（県立中島高校教諭）
- 7 本遺跡出土の整理作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託して行った。（担当一川端敦子、波佐間節子）
- 8 石製品の石質同定は、藤 則雄氏（金沢大学教授）にお願いした。
- 9 本書の編集・執筆は橋本澄夫（石川県立埋蔵文化財センター次長）、平田天秋（同保存技術係長）、の指導・助言を受け芝田 悟（同技師）、垣内が行った。なお、第Ⅴ章第6節(1)の銅銭を芝田が執筆した他は、垣内が行った。
- 10 本遺跡の遺構・遺物実測図、写真、出土遺物等の資料は、当センターにて一括して保存管理にあっている。
- 11 本報告書の遺構・遺物挿図の指示は下記の通りである。
 - (1) 方位はすべて磁北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高で表示する。（単位m）
 - (3) 挿図の縮尺は図内に明示した。
 - (4) 写真図版の遺物番号は、挿図番号－遺物番号で表示する。
 - (5) 遺物の計測値は、cm、gである。

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的環境

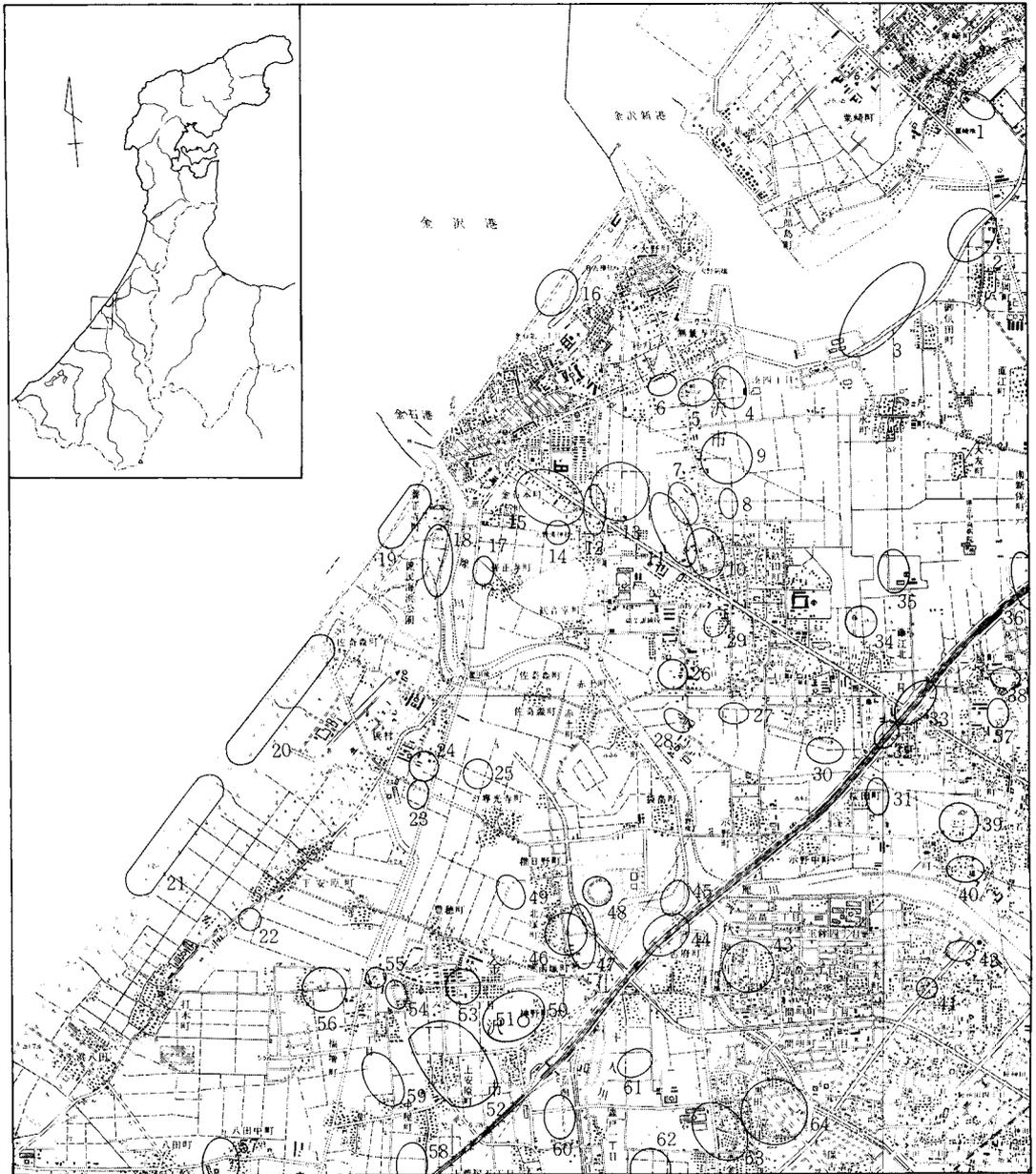
北陸の霊峰白山（標高2,702m）は、加賀・越前・飛騨地方の境に位置して、石川県下最大の河川である手取川の源となっている。流程は約70kmに及び、下流域では標式的な扇状地である手取扇状地（曲率半径12km、扇形の開角度110度）を形成している。この白山から北へ派生した山脈は、金沢市の東方の医王山を経て、能登半島の宝達山から石動山へと続き、石川・富山両県の県境となっている。その白山山系の奈良岳（標高1,644m）に源を発する犀川は、西北へ流下して倉谷川、内川、伏見川、安原川と合流しつつ、金沢市の西端の金石地区で日本海に注ぐ。流程は約42kmで、手取川に次ぐものである。犀川の河口右岸は金石港として利用されているが、左岸には内灘砂丘の南端に当たる安原海岸砂丘が被覆している。この安原海岸砂丘に犀川が接流する所に普正寺遺跡が所在する。本遺跡から河口までは約500m、海までは直線で約200m強である。この臨海的な立地は、遺跡が繁栄した一大要因ともなったが、反面遺跡の廃絶の原因ともなった。それは、砂丘の発達とその内陸部への拡大である。現在、本遺跡の全面が砂丘に覆われて、健民海浜公園の敷地として整備されている。

犀川は比較的急流であるが、下流の古府町地内で手取扇状地の東辺を流下してきた伏見川と合流してからは流れも緩やかになり、金沢城が築かれている小立野台地から派生し金石地区に至る微高地帯と、南に広がる手取扇状地に挟まれた沖積平野を蛇行している。かつては、伏見川との合流地点から河口までの約3.5kmを七曲程の蛇行をしていた。現在の犀川は長年の河川改修により蛇行も少なく、周辺の水田は宅地化が進んでいる。また、犀川から南の手取川まで広がる加賀平野は、石川県下最大の穀倉地帯であり早場米の産地として知られている。

この加賀平野を中心とした北加賀の水系は、大きく三分される。それは手取川水系の末流で、手取扇状地から派生した十人川、安原川、倉部川で、現在七ヶ用水と総称される手取扇状地の用水網の小河川の水系と犀川を中心として伏見川などを含めた犀川水系がある。もう一つの水系は、小立野台地より北に位置して開析した丘陵から流下して河北潟に注ぐ浅野川、金腐川、森下川で、河北潟に流下したあとは大野川となって日本海へ注ぐ水系である。この三水系の流域に広がる耕地は、重要な生産基盤であると同時にそこに散在する農村は、経済面では一大市場であった。それは、金沢とその近郊が都市化する以前まで続いていた。

犀川河口に位置する本遺跡は、犀川水系と犀川に合流している手取扇状地の水系の北半部と水利で結ばれ、北の河北潟水系の出口である大野川河口も約2.5kmと近接している。この水利による結び付きは、経済的・政治的な広がり要因として捉えることができる。また、本遺跡の対岸に位置する金石港は、河口に占地した港であり、単調な海岸線を描く加賀地方の砂浜海岸では、天然の良港として古くから利用されている。

そして、上記の地理的要因が結合して、本遺跡の立地要因となっていたと考えられる。



- | | | | |
|-------------|--------------|---------------|---------------|
| 1 大野川遺跡(仮称) | 17 普正寺高阜遺跡 | 33 藤江B遺跡 | 49 稚日野遺跡 |
| 2 近岡遺跡 | 18 普正寺遺跡 | 34 藤江C遺跡 | 50 南塚遺跡 |
| 3 戸水C遺跡 | 19 普正寺番屋遺跡 | 35 戸水B遺跡 | 51 びわ塚古墳 |
| 4 無量寺遺跡 | 20 専光寺遺跡 | 36 新保A遺跡 | 52 上安原遺跡 |
| 5 無量寺B遺跡 | 21 下安原海岸遺跡 | 37 ニロクチョウA遺跡 | 53 上安原緑団地遺跡 |
| 6 柱遺跡 | 22 下安原遺跡 | 38 ニロクチョウB遺跡 | 54 緑団地公園遺跡 |
| 7 畝田遺跡 | 23 専光寺養魚場遺跡 | 39 薬師堂遺跡 | 55 緑団地地下処理場遺跡 |
| 8 畝田B遺跡 | 24 専光寺染色団地遺跡 | 40 若宮遺跡 | 56 安原工業団地 |
| 9 畝田無量寺遺跡 | 25 佐寄森遺跡 | 41 玉鉾遺跡 | 57 八田中雁田川遺跡 |
| 10 畝田大徳川遺跡 | 26 松村A遺跡 | 42 玉鉾B遺跡 | 58 中屋遺跡 |
| 11 畝田寺中遺跡 | 27 松村B遺跡 | 43 高阜遺跡 | 59 中屋ヘシタ遺跡 |
| 12 寺中遺跡 | 28 松村どいま遺跡 | 44 古府クルビ遺跡 | 60 森戸バイパス遺跡 |
| 13 寺中B遺跡 | 29 松村西の城遺跡 | 45 古府本町カタグリ遺跡 | 61 松島ナカオサ遺跡 |
| 14 寺中御台場遺跡 | 30 松村高見遺跡 | 46 北塚A遺跡 | 62 新保本町チカモリ遺跡 |
| 15 金石本町遺跡 | 31 出雲じいさまだ遺跡 | 47 北塚B遺跡 | 63 古府遺跡 |
| 16 金石北遺跡 | 32 藤江A遺跡 | 48 北塚C遺跡 | 64 黒田遺跡 |

第1図 位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の沖積平野は、金沢平野の中でも遺跡密度の高い地域であるが、その大半は平安時代以前の遺跡であり、本遺跡の営続期間に営なまれた中世集落址に関する遺構や遺物は少ない。

本項では、本遺跡を含む犀川河口周辺部の歴史像を概観することで、本遺跡の歴史的環境としたい。

本遺跡周辺部は、弘仁十四年(823)の加賀立国後の石川郡大野郷に含まれる。郷域は、現在の犀川及び大野川河口を中心とする金沢市域北西部の臨海地区と両河川の後背平地に比定される。中世では、大野荘として立荘されているが、その初見は長寛元年(1163)に原型が成立したとされる。「白山之記」に、白山宮加賀馬場の末社であった佐那武社の所在地の記述「大野庄在之」である。大野荘は、鎌倉時代末以降は臨川寺領となりるが、明応四・九年(1495・1500)の二通の臨川寺領大野荘年貢算状には、各種の自然災害による年貢の負担免除がなされているが、特に本遺跡の営続期間中に多額の年貢が免除されている。

佐那武社は、現在本遺跡の東方約800mの寺中町に所在する式内社の大野湊神社であり、かつて大野の海岸の真砂山に鎮座していたものが、建長年間に現在地に移ったとされている。大野湊神社の社名となった大野湊は、平安時代から見られる港名で、中世には「大野庄湊」と呼称される以外に荘政所があったと考えられる宮腰の地名を冠して「宮腰津」とも呼称されていた。その位置は、近接する犀川と大野川の両河口が考えられるが、本遺跡が位置する犀川河口の金石港は、近世末まで宮腰港と言われ、加賀藩の城下町金沢の外港として栄えていたことから本遺跡を含む犀川河口に比定されている。また、寛治三年(1089)の「加賀国司庁宣案」により大野郷の郷域を一部割いて醍醐寺領となった荘園の得蔵保の四至は、「東限津屋寺西繩手、南限河、西限浜、北限湊」とされており、得蔵保の東に位置する津屋寺は大野湊神社関係の寺院、北に位置する湊は大野湊と考えられるところから、得蔵保は犀川河口に位置していた臨海の荘園と捉えられている。

本遺跡の東側を流下する犀川は、中世大野荘の荘域が中流の後背地まで広がる店からも、当然幹線水路として利用され、平野部を走る北陸道と守護所が位置していた野々市と河口の港湾を結ぶ流通路となりえる河川で、「皇国地誌」には、「産するところ鮎、鮭、鱒、鰻、鯰、鮠等なり。」と記されているが、その河道は大きく蛇行していた。犀川の改修は、寛永十六年(1639)には普正寺地内、嘉永二年(1849)には赤土地内で、河道の切り替えが行なわれ現在に至る。

なお、犀川流域の後背地では、中世の遺跡は松村遺跡、畝田・寺中遺跡、寺中遺跡、北塚C遺跡、松島ナカオサ遺跡と比較的多く確認されているが、その資料は井戸や少量の陶磁器と断片的なものである。

一方、河北潟から流下する大野川の左岸では、柱遺跡、無量寺遺跡、畝田遺跡、戸水C遺跡が発掘調査され、量の差はあるものの各種の遺構や陶磁器が出土し、中世集落址の一端が明らかにされている。特に、戸水C遺跡は、平安時代前期には加賀郡津、中世では富積保の中心地に比定される遺跡で、長年の調査で多くの建物址や井戸、土器や陶磁器を検出し、中世の陶磁器では、本遺跡に次ぐ出土量がある。

また、大野川遺跡（仮称）とした地点から漆箱に納められた柿経が出土したとされるが、詳細に関しては明らかでない。

以上、本遺跡の歴史的環境を概観してみたが、その歴史像の復元にはより緻密な考古学資料の蓄積が求められる。

参考文献

- 手取川七ヶ用水史編纂委員会『手取川七ヶ用水史』 上巻 手取川七ヶ用水土地改良区 1982 松任。
 福田弘光『大徳郷土史』 大徳公民館 1970 金沢。
 浅香年木・田川捷一他『角川日本地名大辞典』 17 石川県 角川書店 1981 東京。

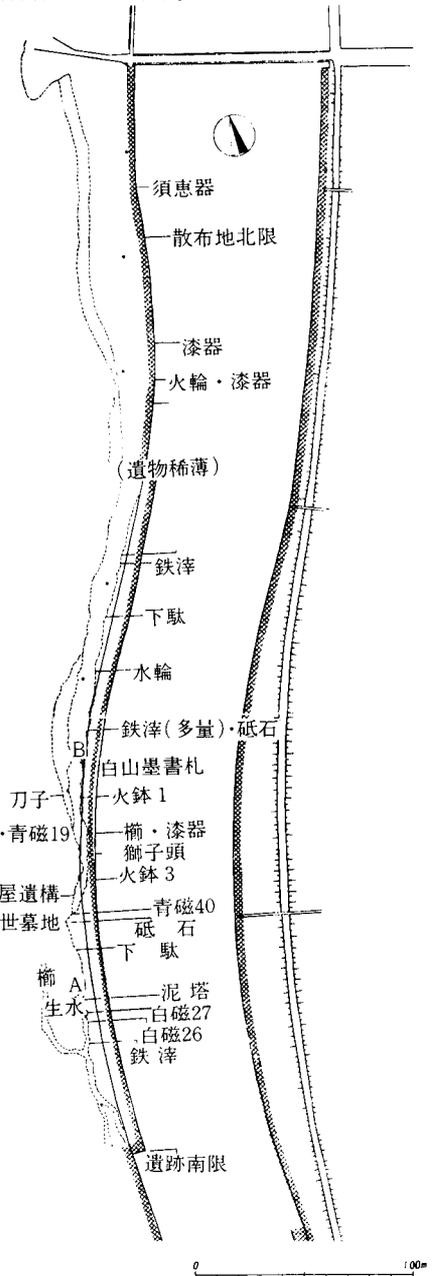
第II章 調査に至る経緯と経過

第1節 遺跡の発見と第一次調査

本遺跡を被覆している安原海岸砂丘に遺跡が存在することは、明治20年代後半に現在の普正寺番屋遺跡から打製石斧、石匙、石剣等が採集報告されて、知られるようになった。しかし、最高19mに及ぶ砂丘のために遺跡の実体は把握されず、昭和37年に作成された石川県埋蔵文化財包蔵地台帳にも記載されなかった。その後、本遺跡の一端が明らかにされたのは、犀川災害復旧助成事業（昭和36年着工、昭和41年完工）が、昭和40年には犀川の下流の犀川橋から河口部にかけて実施されたことによる。工事は犀川兩岸の護岸のために遺跡を覆っていた砂丘を掘削したことで、遺物包含層である黒灰色砂層が露出したのである。このことは、時を経ずして地元の石川考古学研究会々員の知る所となり、夏までには中世陶磁器を中心に多数の遺物が採集された。

そして、同年11月下旬には石川考古学研究会により局部的な発掘調査が実施され、建物の柱や杭列址、廃屋遺構が確認されている。しかし、調査の中心は同会々員であった荒木繁行・福田弘光両氏による表面採集に依るものであった。その後も表面採集が続けられる中で、12月上旬には中世墓地が発見され、発掘調査が12月14日から同月29日まで実施された。この調査により各種の石造遺物が出土し、中世墓地の全様が明らかにした調査例として注目された。

これら一連の調査成果は、昭和45年9月に石川考古



第2図 第1次調査範囲

学研究会により『普正寺』に纏められた。この報告書では本遺跡から出土した各種の遺物に関して、詳細なる検討が行われた。特に考古学的面からだけでなく、石造美術面や文献史学の面からも本遺跡の性格解明に取り組み、成果を上げている点は考古学史上に残る業績であった。そして、各分野の研究などから本遺跡は、大野荘の一角をなしていた港湾集落である推測されたが、その後も砂丘に阻まれて調査の手は入らなかった。

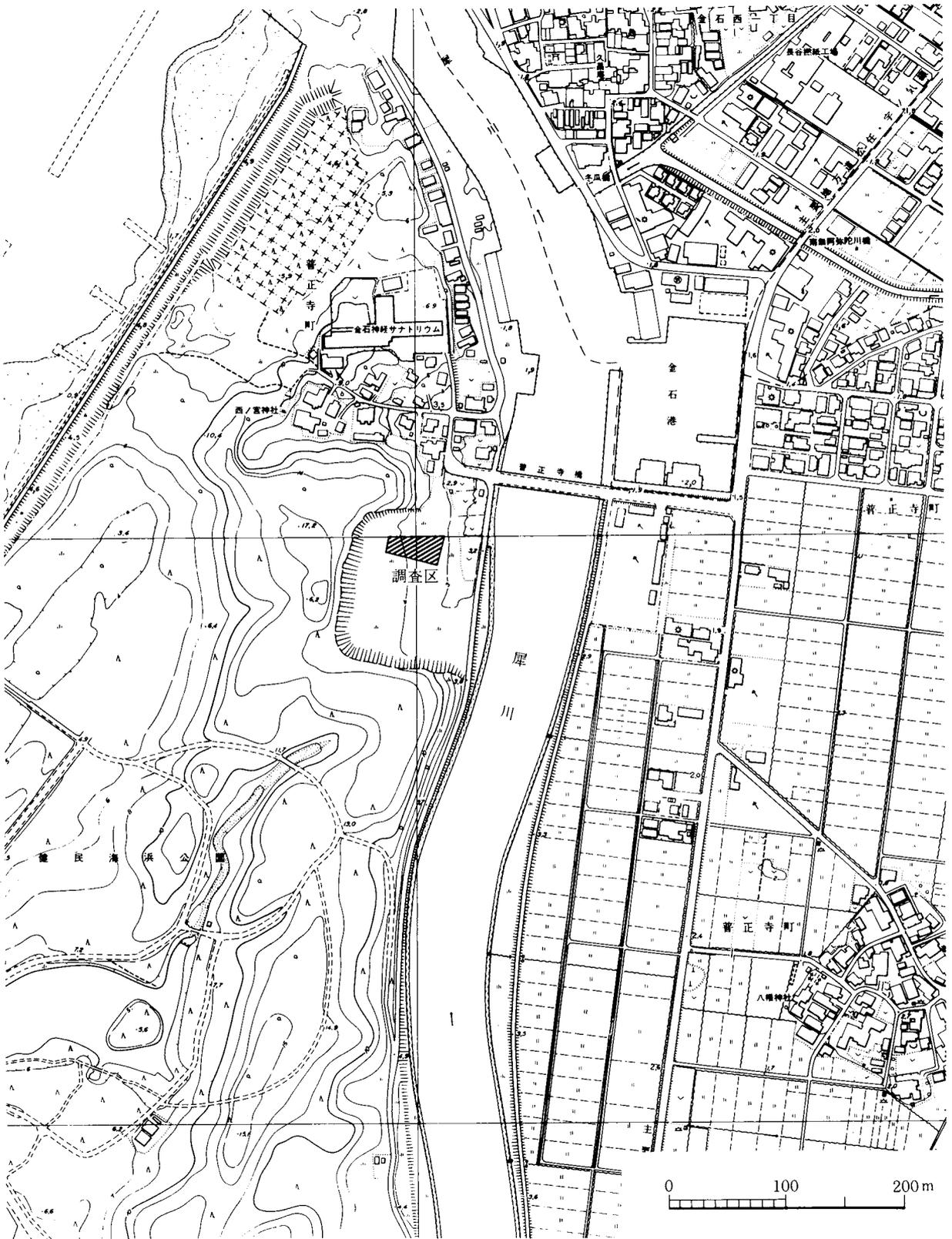
第2節 調査経過

昭和55年11月に県教育委員会文化課より各部局に対して、昭和56年度の事業照会が行われた。これに対して、土木部公園緑地課より昭和56年度事業に係る埋蔵文化財一覧が提出された。その中で健民海浜公園改良事業として野鳥飼育園の建設、プールの改良、歩道舗装等が計画されている事が明らかとなった。特に犀川沿の野鳥飼育園の予定地は、昭和40年の調査により遺物包含層の北端と近接しているために協議が必要と判断された。この野鳥飼育園は金沢市内の出羽町にある施設を新美術館の建設に伴ない移転させるものであった。

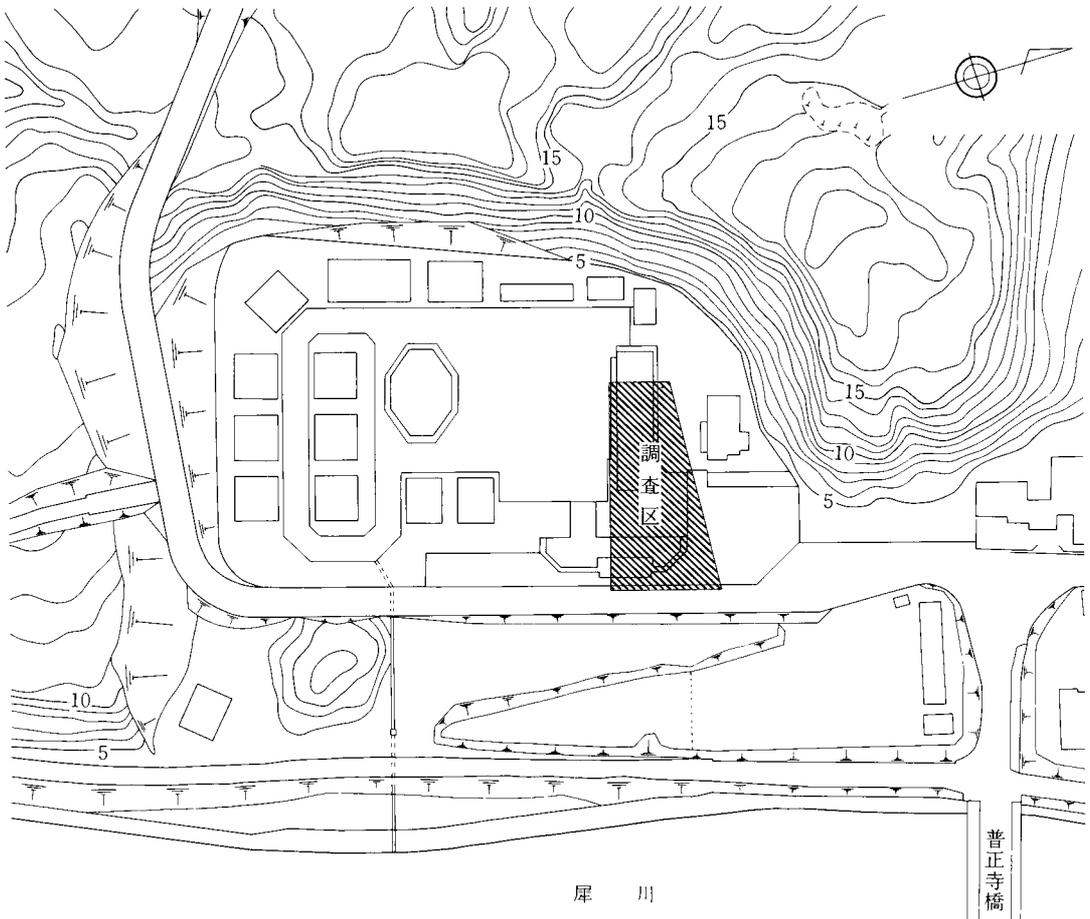
そして、昭和56年8月21日に当センターで、公園緑地課と分布調査に関して協議がなされた。その中で、分布調査は犀川沿の野鳥飼育園の予定地について行うことに決した。同月26日付で分布調査の依頼が出され、分布調査は同年10月19日から同月21日にかけて実施した。調査方法は重機（バックホー）を用いて、遺物包含層の確認を主に行った。結果は、事業予定地の全域に遺物包含層が広がる事が推定された。また、遺物包含層まで約3mの砂が堆積していた。この結果を得て10月24日に当センターにて公園緑地課と再度の協議がなされ、発掘調査は昭和57年度早々に着手して、調査範囲は進入路や管理棟等の施設部分とすることになった。これは、施設の大半が禽舎である点と遺物包含層上に堆積した約3mの砂の二点による。

昭和57年4月2日に当センターで、公園緑地課と発掘調査に関する具体的な協議が始められ、次の3点について話し合いが進められた。1. 調査範囲 2. 遺物包含層上に堆積している砂の削除 3. 排水の問題 以後、この3点について同年4月13日と5月22日と協議を重ねられた。そして、調査範囲は管理棟と駐車場の一部とする。その面積は648㎡であった。遺物包含層上に堆積した砂の削除は、公園緑地課にて行い、鋼矢板で調査区を設定する。排水方法は調査の状況に応じて対応することに決した。野鳥飼育園建設はその後に公園緑地課から財団法人石川県健民公社に移り、同公社から健民海浜公園野鳥飼育園整備事業に係る緊急発掘調査の依頼があった。同年6月7日付で同公社と当センターとの普正寺遺跡発掘調査業務に係る委託契約が締結された。

発掘調査は昭和57年6月12日に着手して同年8月10日に完了した。始めは重機により調査区内の表土砂層の掘削を行ったところ激しい湧水にみまわれた。この湧水は、横を流れる犀川の伏流と考えられるもので、常に一定水位（標高約0.8m）を保っていた。そのために排水方法に関して再度の現地協議を行い、ウエルポイントを設置して24時間の排水を行うことに決した。このウエルポイントの設置により標高-2.20mまで水位を下げて、調査することができた。これで旧犀川の河岸と考えられる部分も調査が可能となり、柿経の出土等の成果を上げることができた。発



第3図 周辺の地形と調査区 (1/5,000)



第4図 調査区の位置 (1/3,000)

掘調査はその後順調に進んだが、事業関係者から突発的に発掘調査の早期終了の声が上がり、教育委員会文化課よりその旨が伝えられた。これに関して、公園緑地課と当センターの間で、再々協議を行い調査期間を当初より約2週間短縮して、同年8月7日までとすることとなり。この決定後は、天候に関係なく調査が進められた。調査は8月7日に現場作業を終了したが、8日には地元の人達を対象とした現地説明会を行った。そして、同10日には調査器材の撤収を完了した。

調査を進めるにあたっては、公園緑地課、(株)戸田組、金石歴史談話会、石川考古学研究会々員等の協力を受けた他、次の各氏の協力があった。(順不同)

村田与一郎、村田三治郎、高島三吉、照田千代、村田 操、照田てる子、福田節子、高島長子、福田明美、高島恵利子、高島のぶ、照田達夫、福田登喜代(普正寺町)、竹村清一、松村 了、池田賢司、倉 直志、増山 仁、松枝玲子、栃木英道、本田秀生、石浦めぐみ、山川佳子

第3節 調査日誌(抄)

- 6月12日(土) 晴 本日より発掘調査を開始する。調査区内の表土砂層を重機(バックホー)により掘削する。
- 6月15日(火) 晴 重機による表土砂層の掘削作業を継続する。調査区内の区割杭を野鳥園造成の基準杭に基づき設定し、仮ベンチマーク(L=3,724m)からレベルの移動を行なう。
- 6月17日(木) 晴 廃土砂の除去作業に新たにブルドザーを導入する。調査区内の湧水は激しく常に一定水位を保っている。そのため排水方法に関して公園緑地課の担当技師と現地協議によりウェルポイントによる排水を行なうことに決する。
- 6月18日(金) 雨のち晴 本日より地元作業員8名が調査に参加し、包含層上部の灰色砂層を発掘する。
- 6月21日(月) 晴 包含層の上層面にて第1号土坑や粘土面を検出する。ベルトコンベアの搬入により作業が進む。ウェルポイントの設置により調査区内の水位が標高-2.20mまで下がる。
- 6月25日(金) 晴 A-1区の南側を発掘し、第2号土坑などを検出する。青磁碗や珠洲焼の播鉢(植木鉢?)など多数の遺物が出土する。
- 6月29日(火) 晴 包含層の中層面にて第3号溝と鉄滓群を検出する。鉄滓群の周辺には鞆の羽口片が多く検出された。
- 6月30日(水) 晴のち曇 上層面の遺構と出土物の写真撮影。鍛冶台脇から青磁碗の底部が出土した。
- 7月2日(金) 晴 B-2区の旧河道上に堆石した砂層を削除する。河底より硯が出土した。
- 7月8日(木) 晴 第3号溝と溝状遺構を調査する。青磁碗など多数の遺物が出土した。
- 7月9日(金) 晴 包含層北側に検出された粘土面を調査する。粘土面の下には礫や土器片が敷き詰められていた。昼に知事と事業関係者が来跡。
- 7月10日(土) 晴 第3号溝中より青磁碗など多数の遺物が出土。出土遺物の写真撮影。
- 7月14日(木) 晴のち曇 第2号土坑と第3号溝の調査を続ける。各遺構から漆器が出土。午後、県教委より当センターへ調査の早期完了する旨の連絡あり。
- 7月16日(金) 曇のち雨 旧河道部分の調査により柿経片が多数出土。
- 7月21日(水) 晴 包含層の削除により下層面を検出する。また、公園緑地課との再度の協議により8月7日を調査完了日とすることで合意を見る。以後8月7日まで天候に関わらず連日調査を行なう。
- 7月25日(日) 雨時々曇 実測作業を行なうが雨により度々中断する。午後に金石歴史談話会の一行が見学に来れる。
- 7月27日(火) 晴 梅雨の晴れ間に実測作業が大いに進む。午後に当センター運営委員の一行が来跡。
- 7月28日(木) 曇のち雨 地山面にて遺構の検出を行なう。地山面まで包含層を削除することで遺構の検出を見る。
- 7月31日(日) 晴のち曇 地山面の遺構調査と調査区内の地形測量を行なう。また、本遺跡と七尾市古府タブノキタ遺跡の文教記者発表を行なう。
- 8月2日(月) 雨のち曇 台風10号の通過により午前中は出土遺物の整理を行ない、午後は実測作業を行なう。
- 8月4日(水) 晴 戸水C遺跡を発掘中の調査員一同の応援により遺構実測作業の大半が完了する。
- 8月5日(木) 晴 遺構実測作業が完了し清掃作業を行なった後に写真撮影を行なう。
- 8月7日(土) 晴 地形測量の補足と南北セクションの土層図を作成。遺構内出土の遺物を取り上げを行ない、延50日の発掘調査を完了する。
- 8月8日(日) 晴 午前中に遺跡の現地説明会を開く。午後、器材の整理を一部行なう。

第三章 調査概要

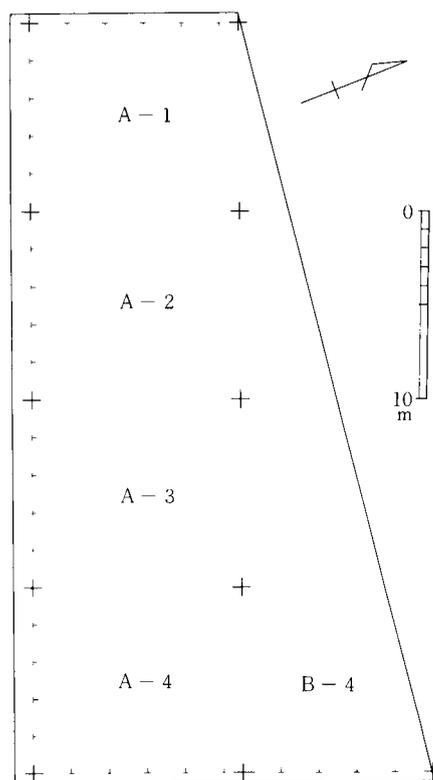
第1節 層序

本遺跡の発掘調査区は、野鳥飼育園の管理棟の予定地を中心として設定した。設定にはまず約3mの砂を削除した後で、鋼矢板にて囲んだ。この工事は、公園緑地課の主管事業として行った。また、これには発掘調査完了後の埋戻しと、敷地の造成も含まれていた。設定した調査区は648㎡であった。発掘調査にあたっては、野鳥飼育園建設の基本杭を基軸にしてグリッドの設定を行った。グリッドは2mを基本として、これらを東西方向10m、南北方向11mの大枠に組んだ。そして、南側をA例、北側をB例とした。

鋼矢板にて囲まれた調査区には、約0.5mの砂層が残っていた。これを削除する為に再度重機を導入して、包含層上面に認められた灰色砂層の検出を行った。この時点で、調査区の西側のA-1区周辺だけが、砂の表面が乾燥せず水分を常に保っていた。これは、包含層が浅いことの表れとして捉えていた。そして、表土の砂層を重機で削除したところ、水気が有った部分は包含層の上面が検出されたが、それよりも東側は急激に落ち込んでいた。この落ち込みからは、犀川の伏流水と考えられる湧水に見舞われた。ウエルポイントの設置により水位は、標高-2.20mまで下がり、重機により標高約-3.5mまで掘削を試みたが地山は検出されなかった。この事などから、この落ち込みは犀川の旧河道部分の一端と考えられた。したがって包含層が検出された範囲は、調査区西側のA-1区の約100㎡で、それより東側は、旧河道部の河岸と考えられる斜面の約50㎡であった。これは、分布調査の時にこの場所に試掘坑が設定されなかったものによる。しかし、予想外の土砂と湧水に悩まされた調査状況からするとやむえないのかもしれない。今後は、砂丘地に立地する遺跡の分布調査の方法の確立が必要であろう。

調査区内の土層の断面観察は、調査区の南側と西側に壁を残して観察した。東西の断面は、A-1・2区の南側で、南北の断面は、A-1区の西側でそれぞれ観察・実測した。

東西の土層断面では、包含層はやや東方向へ傾斜して、包含層が絶えた所から淡青灰色粘土の斜面へと変わる。1の明黄褐色砂層は、この上に堆積していた砂丘の砂である。東側の斜面の部分では、淡青灰色粘



第5図 調査区区割図 (1/400)

土層の上に砂層が堆積している。2の明灰色砂層は、包含層の上面に当り、滞水層となっていた層でもある。3の暗灰色砂質土層は、上層面の遺構を検出した面である。第1号土坑、粘土面、鍛冶台等を検出している。3～6の各層は、中層面の覆土であり、数多くの遺物を含んでいた。7の明灰色粘土層は、包含層の東端に張られていたもので、下には焼土や炭粒を混ぜたような小礫群が出土した。これより下層は、断面には柱穴状の落ち込みが認められたが、黒色砂質土層を基本とする土層が広がり、平面での遺構検出が難しくなった。そのために、地山面に当る灰色砂層まで掘り下げることとした。地山面では、遺構が黒色砂質土や暗灰色砂を覆土として、多数検出された。

南北の土層断面では、上層面から粘土面等の遺構が認められて、東西の断面より複雑であった。また、北側の上層面は、表土砂を掘削する際に攪乱を受けていた。しかし、層位的には南北とほぼ同一であった。中層面の暗灰色粘質土層では、遺構の切り込みは浅くて、溝状遺構程であった。そして、地山面では黒色砂質土層や暗灰色砂質土層を覆土として、礎石を入れた柱穴や大型の土坑の落ち込みが観察された。

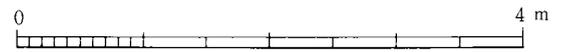
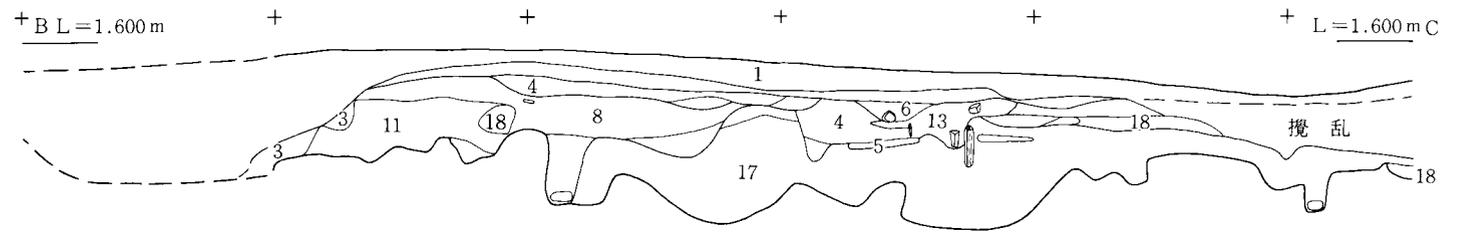
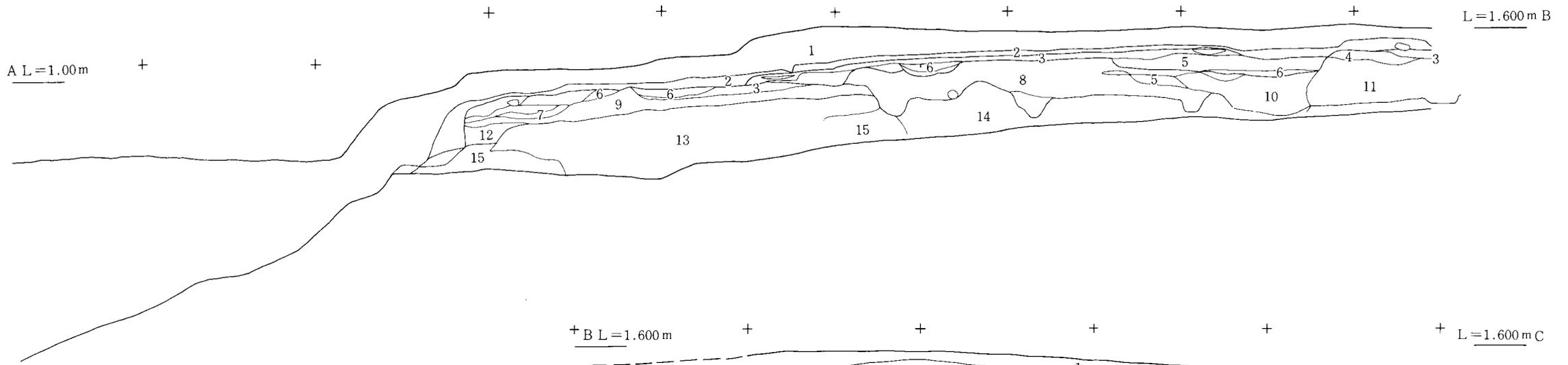
第2節 遺構検出状況

前記したように、今回の調査では大きく 層に分けて調査したが、部分的には四層の遺構が確認された。遺構面は上から上層面、中層面、地山面として整理してみた。上層面の遺構は包含層上面の明灰色砂層を削除して、暗灰色砂質土層から検出された。中層面では、第2号土坑等を検出したが、第3号溝等を含めて、地山面までの中間的な遺構をまとめてみた。また、地山面は下層の灰色砂層面にて検出されたが、一部は上層面や中層面から切り込まれたものであった。

(1) 上層面 (第7図 図版—4～10)

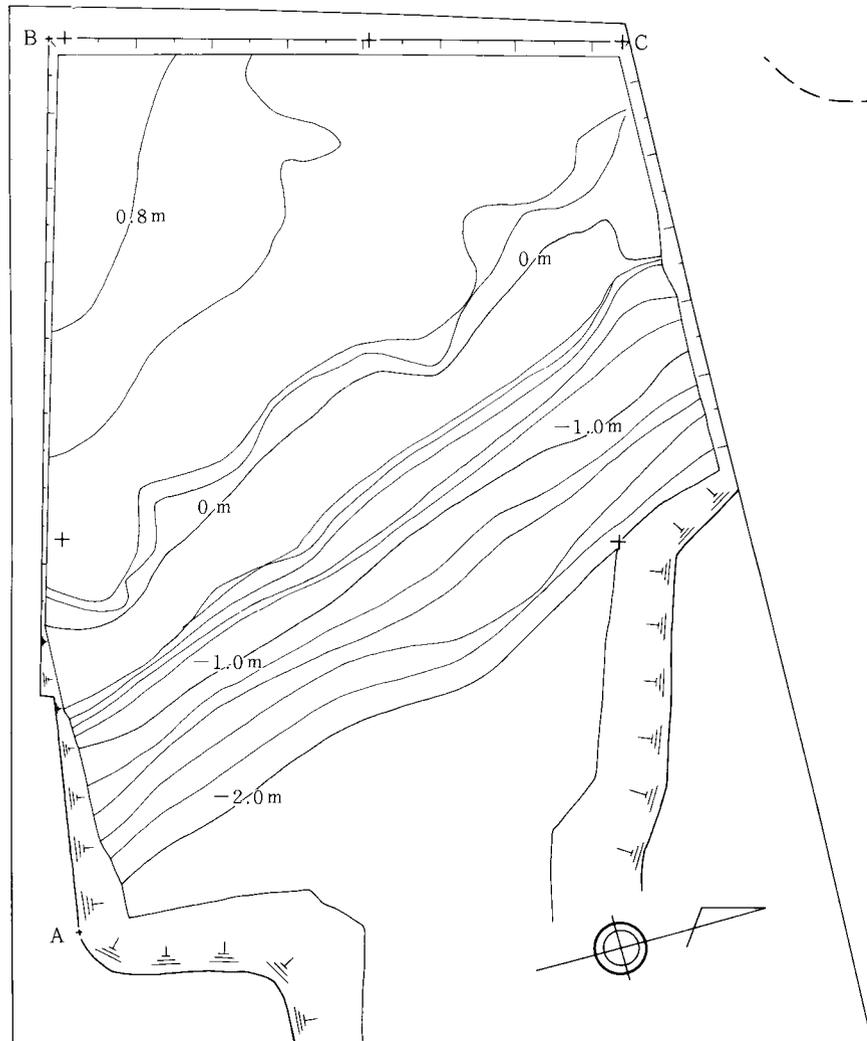
上層面にて検出された遺構は、第1号土坑に始まり小礫群、焼土、第1号溝、鍛冶台、粘土面、段状遺構、鉄滓群、植木鉢等を検出した。以下、各遺構の概略を記述する。

上層面の南西端に検出された第1号土坑は、明黄褐色砂を覆土として、地山面まで達していた。常に湧水があったことから井戸の掘方の一部と考えられた。暗灰色砂質土層からは、小礫群が3ヶ所検出された。これら礫群には、1～5cm程の砂利と5～10cm程の小礫の二種があった。この小礫群は、中層面では数多く検出された。その中でも1～5cm程の砂利が、20～40cm程の楕円形を呈するものは、掘立柱建物の柱穴底を固めるために敷かれたと考えられた。それは、この小礫群が、ほぼ同一地点で2・3ヶ所検出され、一定間隔を置いて並んだりしたことによる。焼土と第1号溝と鍛冶台は、一体のものと考えられ、段状遺構、植木鉢と共に別項で説明を可える。なお、第1号溝は焼土と鍛冶台を区分けすると同時に、排水を兼ねたものと推定される。そして、植木鉢の中は木灰を思わせる灰色の粘質土(第10図参照)が残っていた。粘土面は鍛冶台以北に広がり、北端に検出された段状遺構へと続いていた。粘土は主に灰色系のものが使われて、表面はやや波打つが、平滑に仕上げられていた。また、粘土面下には多くの土器片と礫が埋め込まれていた。上層面の東端に検出された鉄滓群は、周辺に焼けた円礫等が取り囲むように出土したので、かつての鍛冶場とも考えたが、中層面での第3号溝の検出状況等から鍛冶台周辺等から廃棄されたも



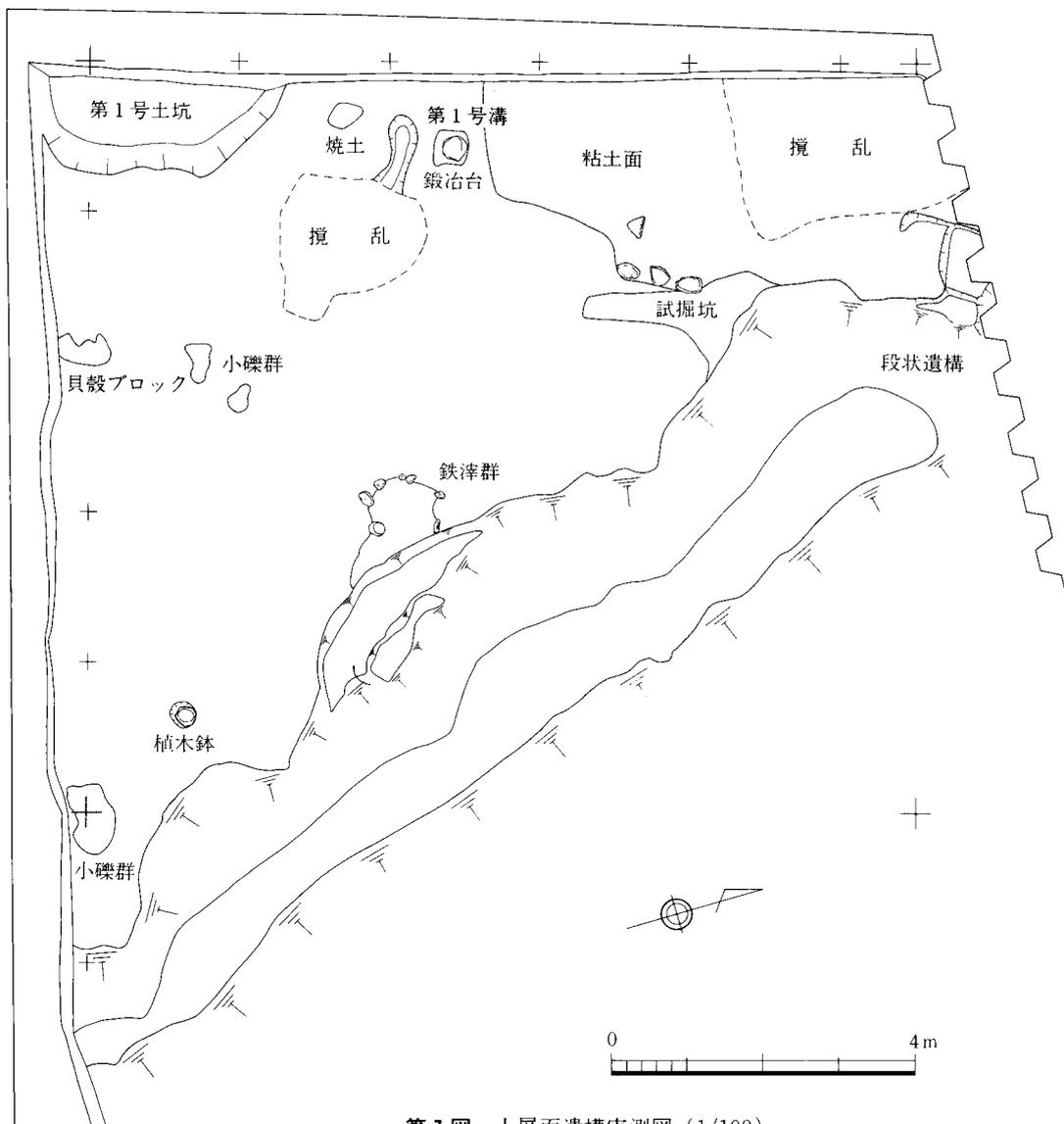
凡 例

- | | |
|------------|-----------------|
| 1. 明黄褐色砂層 | 10. 暗灰色砂層 |
| 2. 明灰色砂層 | 11. 暗灰色砂層暗黄灰色砂層 |
| 3. 暗灰色砂質土層 | 12. 暗黄灰色砂層 |
| 4. 暗灰色粘質土層 | 13. 濁灰色砂層 |
| 5. 明黄灰色砂層 | 14. 濁黄灰色砂層 |
| 6. 暗灰色粘土層 | 15. 灰色砂層 |
| 7. 明黄灰色粘土層 | 16. 濁灰色粘土層 |
| 8. 暗灰色砂質土層 | 17. 暗灰色砂質土層 |
| 9. 灰色砂質土層 | 18. 灰色粘土層 |



地山面地形図 (1/150)

第6図 土層断面図および地山面地形図 (1/60, 1/150)



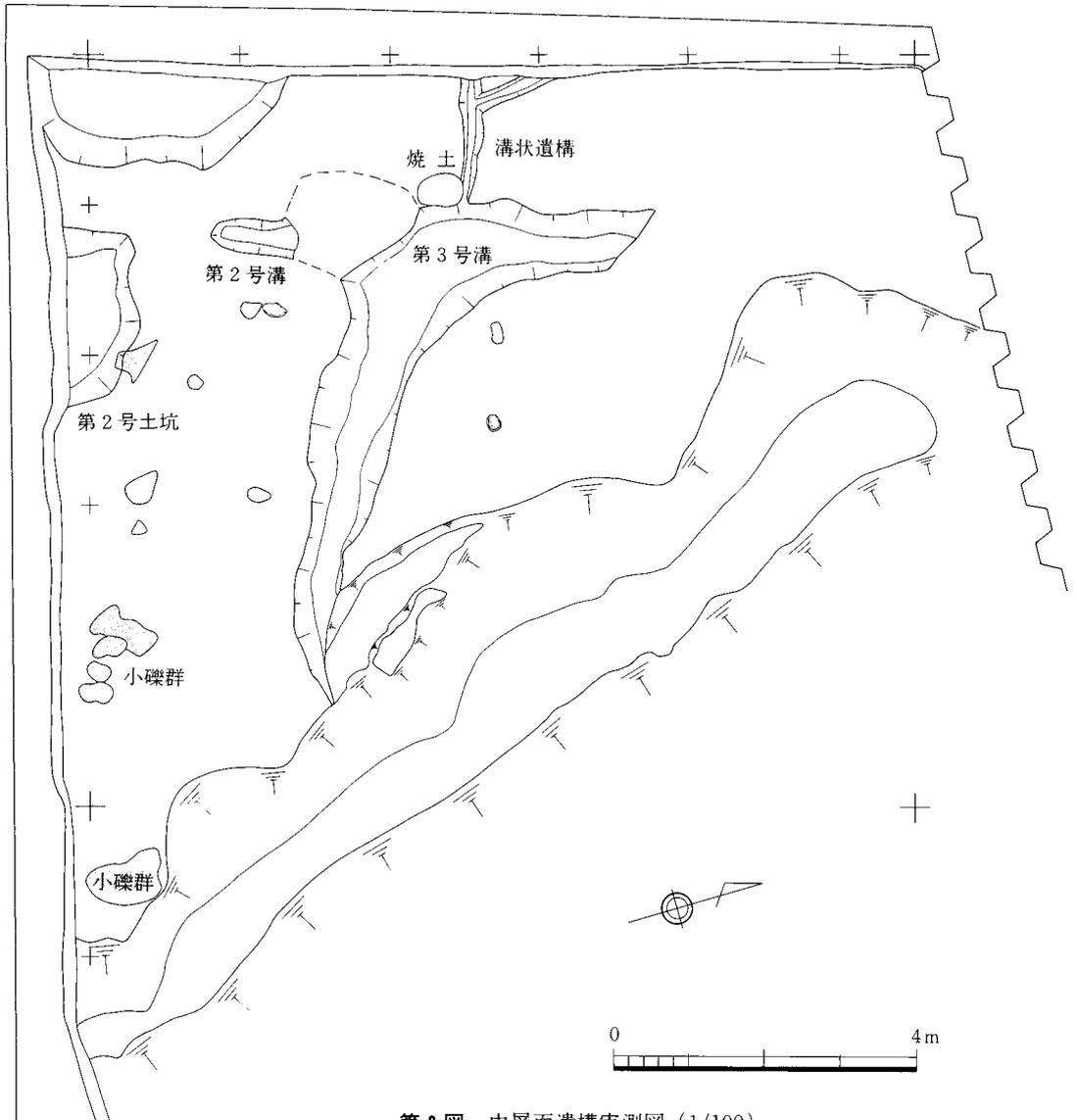
第7図 上層面遺構実測図 (1/100)

のと推定された。なお、粘土面脇の試掘坑は、分布調査時のものである。

(2) 中層面 (第8図)

中層面にて検出された遺構は、第2号土坑、第2・3号溝、小礫群、焼土、溝状遺構等である。以下、各遺構の概略を記述する。

上層面の南西端に検出された第2号土坑は、北半部分が調査された。詳細は第3号溝と共に別項で説明を加える。第2・3号溝は、その接合部分が分布調査時の攪乱により不明であるが、第2号溝は第3号溝へ流下していたと推定された。そして、上層面の第1号溝も第3号溝に流下していた可能性が高い。それは、第3号溝の上面の凹地が、上層面にて認められたことによる。小礫群は、上層面よりも数多く検出されたが、ほとんどが第3号溝より南側からであった。第3号溝の西側より検出された焼土と溝状遺構であるが、焼土はその脇に鍛冶台が位置したことから、鍛冶場のものである可能性が高い。また、溝状遺構はその上幅が約20~30cmで、深さが4~9cm



第8図 中層面遺構実測図 (1/100)

と浅くて、途中で枝分かれしている。この溝状遺構は、粘土面の南端に位置することから、粘土面と鍛冶台周辺の排水溝と推定される。

(3) 地山面 (第9図 図版10~15)

地山面にて検出された遺構は、第3~7号土坑と柱穴等で、溝は検出されなかった。土坑の中で第3・6・7号土坑は、別項で説明を加える。以下、各遺構の概略を記述する。

土坑の中で第4号土坑は、土層断面の観察で、複数の遺構が重複していることが明らかとなった。規模は第3号土坑よりやや小さい。また、第5号土坑は、柱穴等の切り込みが多く、出土物が極めて少ないことから、遺構よりも鞍部のような落ち込みの可能性が高い。なお、土坑の中で、大型のものが北側に集中して、南側に位置する土坑には土器片や石が出土している。柱穴等は多数検出されたが、調査期間の関係上十分な観察が行えなかった。したがって、底に礎石や柱根等が出土したものは、柱穴として考えられるが、その他の遺構は不明である。しかし、数多く



第9図 地山面遺構実測図 (1/100)

検出された径30~40cm程の遺構は、その大半が柱穴であったと推定される。それは、柱穴内に礎石や柱根が検出されたものが、一ヶ所に集中するのではなく、地山面全域に検出されたことから言える。このように多数の柱穴等が検出されたのに、掘立柱建物が図示されて無いのは、約80㎡の地山面の中で、完掘された建物が認められなかったことによる。だが、柱穴の状況から、地山面の南側で数棟の掘立柱建物が、存在したと推定される。

最後に旧河道部分と考えられる斜面に関して説明を加える。斜面の途中に細長く伸びた平坦面は、標高約-0.2m程である。犀川河口の水位が現在標高で、約0.1~0.3mのことからすると、かつては水面下に位置していたと考えられる。それは、包含層が浸食を受けて、標高-2m程に直径40cm程の包含層の塊が崩落し、周辺からは柿経・硯・人骨等が出土した。そして、この斜面は犀川の旧河道部の一部であり、旧河口左岸と推定される。このことは、本遺跡の性格の根幹である、港湾的性格の裏付の一つとなる。

第IV章 遺構と遺物

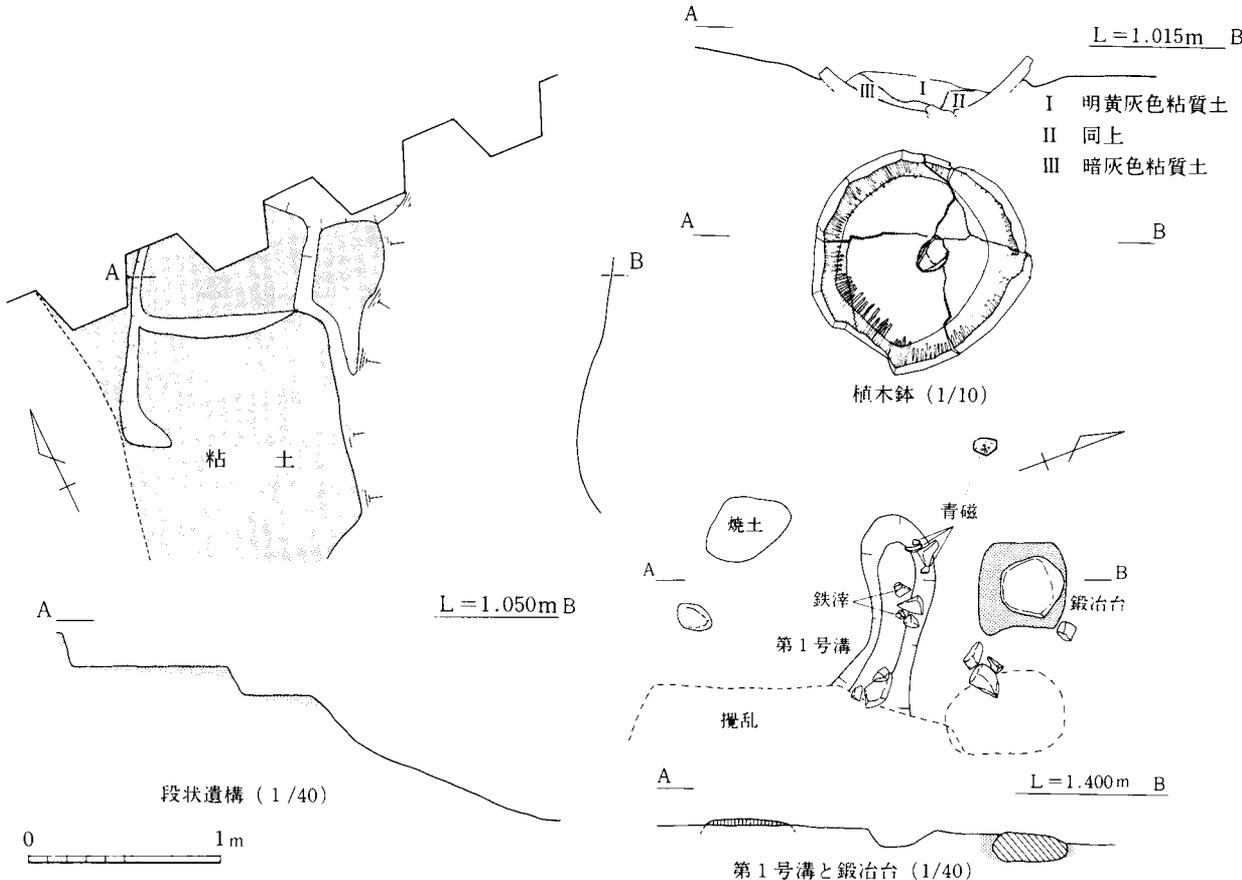
第1節 上層面の遺構と遺物

(1) 第1号土坑

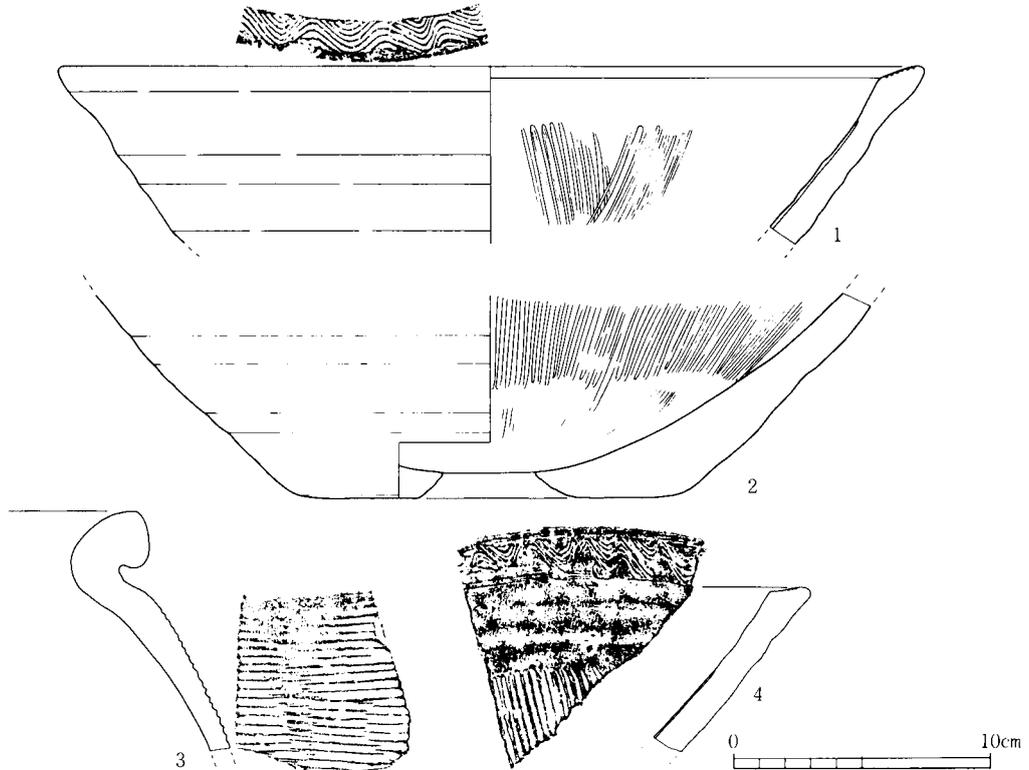
上層面の南西端に位置して、東側の半分が検出された。規模は検出面の最長径約 330cmで、底の最長径約 210cm、深さ約47cmと大型である。覆土は最上層の灰色砂層で、底は地山面にまで達している。西側が不明であるが、湧水が常に有り井戸の可能性もある。出土遺物は土坑の南側から越前焼、珠洲焼(第11図-1・3)、銅銭があった。1は口径32.8cmの播鉢である。口縁部はやや嘴状を呈して、内面に波状文が入る。おろし目は 3.3cm幅の10本である。胎土は明灰色を呈して、比較的密である。焼成は良い。断面に補修痕が残っている。3の甕は口縁外面が面取され、内面は丁寧に横ナデされている。叩きは 3cm当り10本と比較的密である。胎土は青灰色を呈して、焼成は並である。

(2) 植木鉢 (第10・11図、図版-9)

上層面の南東端にて検出された。片口鉢は珠洲焼の播鉢で、底部の穿孔には花崗岩の小石をあてて、鉢より一回り大きい窪みに置かれていた。内部の粘質土は周辺の砂質土とは違い、“木灰”を思わせる



第10図 上層面検出遺構実測図 (1/10、1/40)



第11図 上・中層面検出遺構出土土器実測図(1/3)

るものであった。播鉢(第11図-2)は内面の摩滅が著しく、おろし目はほとんど失なわれている。底径は15cmで、穿孔は長径約6cmの楕円形である。胎土は青灰色で、焼成は並である。おろし目は2.7cm幅の9本と認められる。

(3) 段状遺構(第10図、図版-5)

上層面の北半に広がる濁黄褐色の粘土面は、北端部では段状を呈していた。段は4段検出され、段差は8~16cmであった。特に北側の3段は段差が共に16cmで、粘土は下の方には厚く、上の方には薄く張られていたが、表面は水平に仕上げられていた。

(4) 鍛冶台(第10図、図版-5)

上層面の西側で、粘土面と第1号溝の間に位置する。台石は平面形が五角形に近く、長さ33cm、厚さ15cmの自然石で、周囲は濁黄褐色の粘土で堅められていた。石質は花崗岩であった。また、上面は平滑であった。南100cmと東横の二ヶ所に焼土と炭の塊りが検出され、第1号溝とその周辺からは、鉄滓や鞆の羽口が出土した。前記の事からこの石は建物の礎石と考えるよりは、鍛冶場の台石とし、焼土は火床の跡と考えた方が妥当であろう。

第2節 中層面の遺構と遺物

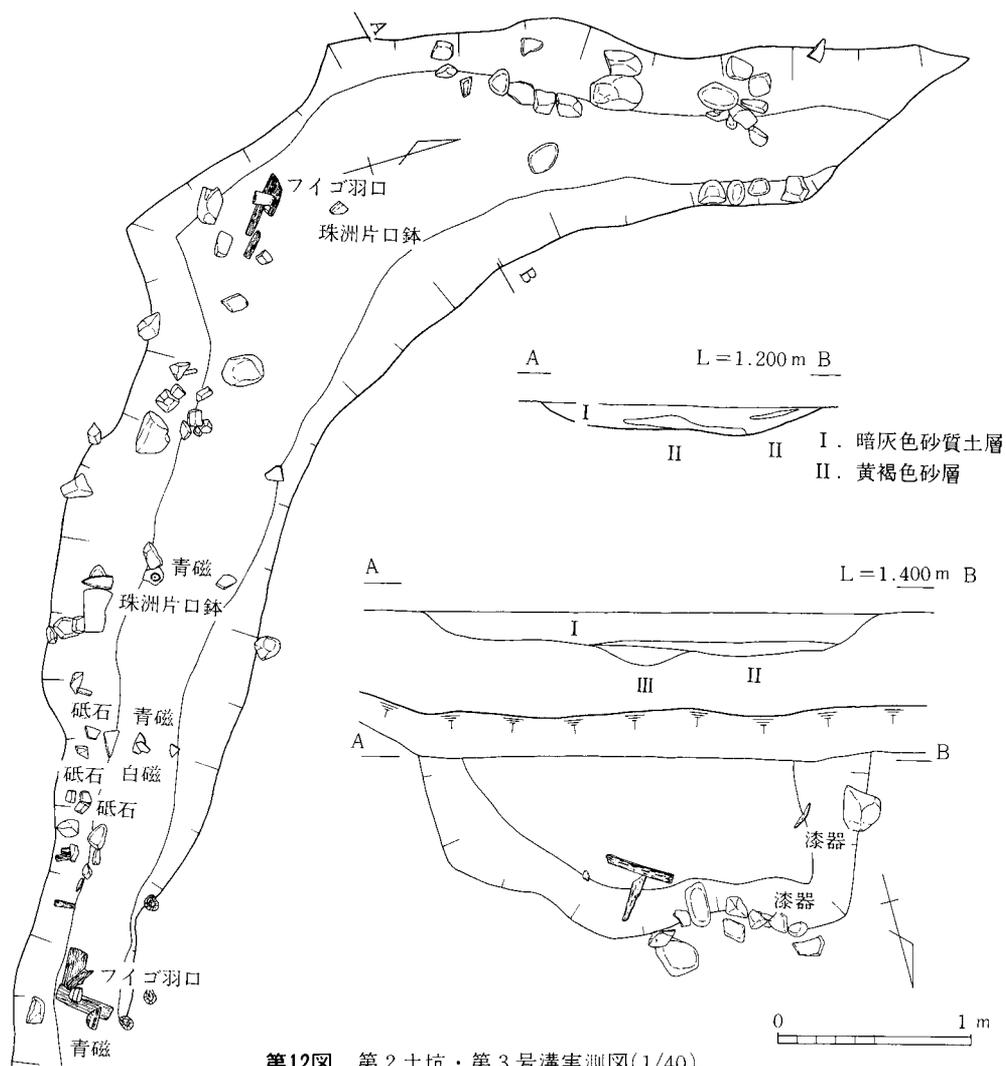
(1) 第2号土坑(第12図、図版-6)

上層面の第1号土坑の東側で、北半部が検出された。その規模は最長径238cm、深さ34cmとや

や浅いが、第1号土坑に次ぐ規模である。北側の肩には礫と土器片が連なり、土坑内からは木片と漆器碗の底部片が出土した。出土土器中で図示出来るものは、珠洲焼の播鉢(第11図-4)と土師質土器であった。播鉢は口縁内面が水平に近く、波状文が密に入る。胎土は灰色で、少し粗い。焼成は良い。おろし目は10本程と見られるが、その幅は明らかでない。

(2) 第3号溝 (第12図、図版-7)

中層面の中央部に位置して、その形は逆L字形を呈している。北端は試掘坑で不明であるが、長さは約810cmで、幅は北側で約82cm、屈曲部で約146cm、東側では約62cmを測る。深さは屈曲部分で約12cm、東側で約18cmを測る。溝の底は北側から屈曲部にかけてはほぼ水平であるが、屈曲部から東側は約15cmの高差があり、東方向に流下していた。覆土は暗灰色砂質土である。出土遺物は主に南側の壁に連なる礫の周辺から検出されたが、青磁碗の破片と砥石の出土が目立っている。出土遺物は他に白磁、瀬戸系陶器、珠洲焼、漆器、鞆の羽口、鉄釘、行火、ハシ状木器など多種に及び、今回の調査で検出した遺構の中では最も出土遺物が豊富であった。



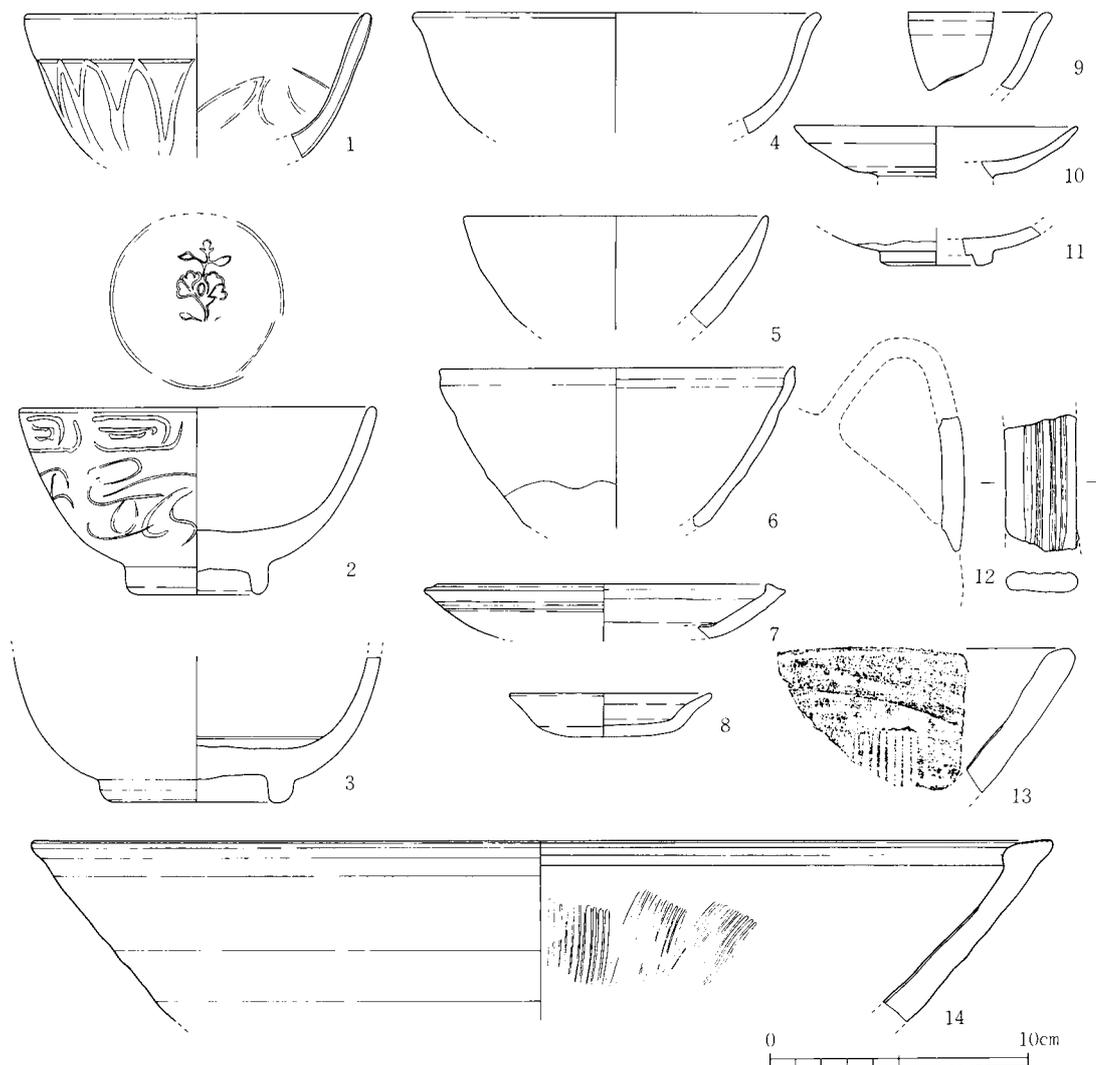
第12図 第2土坑・第3号溝実測図(1/40)

出土土器（第13図、図版-17）

第3号溝からは陶磁器を中心に砥石、木器、鉄製品などが出土した。砥石、木器、鉄製品は、別項で説明するので除いた。

青磁（第13図-1～4・9）

1は口径13.5cmで、青磁碗Ⅰ-bのタイプである。外面の口縁下1.7cmに沈線を巡らして、下にへら描の蓮弁文を刻む。内面は唐草文である。釉は明るい灰オリーブ色を呈して、透明感に欠ける。素地は灰白色で、堅緻である。2は口径13.8cm、器高7.4cmで、青磁碗Ⅱ-aタイプである。外面は雷文帯と唐草文で飾り、内底面には円圏と印花文がある。釉透明感に欠けた明るいオリーブ灰色を呈して、貫入は1と同様でない。素地は灰白色である。外底面の釉は、輪状に軽く削り取られている。3は口縁直立の無文碗で、青磁碗Ⅱ-bタイプに属する。内面立ち上がり部分に径10cmの円圏が巡る。釉は灰オリーブ色で、素地は明るい灰色である。貫入は全体に細かく入る。



第13図 第3号溝出土土器実測図（1/3）

外底面の釉は、輪状に削り取られている。4は口径15.8cmで、青磁碗Ⅳ－bのタイプである。

白磁（第13図－10・11）

10・11とも高台付小皿である。10は口径11cmで、釉は青味をおびた白色で、透明感がある。貫入は全体に入る。素地は茶色味をおびた白色である。11は釉調・素地とも10と同一である。

瀬戸系陶器（第13図－5～7・12）

5・6は天目茶碗である。5は口径12cmで、器壁は厚い。素地は灰白色で、やや粗い。釉は褐色を呈する。6は口径13.8cmで、口唇部が外反する。素地は明灰白色で、緻密である。釉は黒褐色を呈して、断面に補修痕がある。7は口径14.2cmのおろし皿である。素地は灰色で、やや粗い。釉は口縁部だけで、オリーブ灰色を呈する。おろし目は細くて密である。12は水注の把手で、幅2.8cm、厚さ0.7cmで、外面に4条の沈線が入る。素地は灰白色で、比較的緻密である。

土師質土器・珠洲焼（第13図－8・13・14）

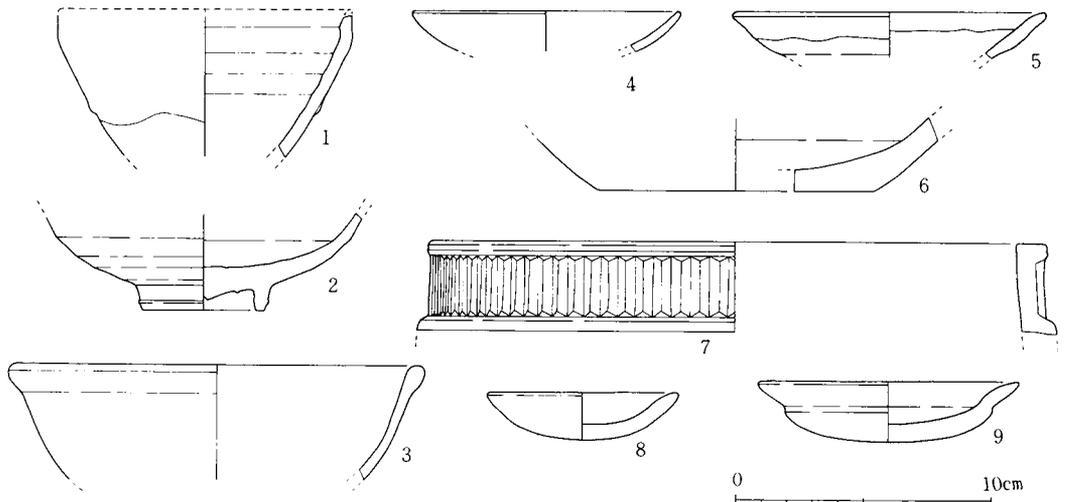
土師質土器も小片は多く出土したが、全形を知り得るものは少ない。8は口径7.9cm、器高1.7cmで、土師質土器Ⅲのタイプに該当するものである。胎土は浅黄色で、焼はあまい。

珠洲焼には甕や壺の破片は無く、片口鉢が数点出土しただけであった。13の播鉢は暗青灰色で、胎土は砂粒が少ないが、焼はあまい。おろし目は幅2.4cmの8本で、間隔を置いて施される。14は口径40cmで、灰色を呈する。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。口縁部は嘴状となり大きな波状文が入る。おろし目は幅2.4cmの10本で、間隔を置きながら位置をそろえて施されている。13は溝の底から出土したが、14は砥石と共に溝の南側からの覆土から出土した。

(3) 粘土面下出土土器（第14図、図版－18）

上層面にて検出した粘土面の南側では、粘土面下の整地に際して2m×1.4mの楕円形に礫や土器片を敷き詰めて、その上に粘土を張っている事が確認された。この礫の間に埋め込まれた土器片の多くは、越前焼の大甕の破片であった。その土器の中で実測可能なものを図示した。

1は天目茶碗で、“河南天目”と称される製品である。口径が約10.5cmで、釉は茶褐色を呈して、内外面に禾目がある。素地は白灰色で、堅緻である。内面には水挽き整形時の稜が認めら



第14図 粘土面下出土土器実測図 (1/3)

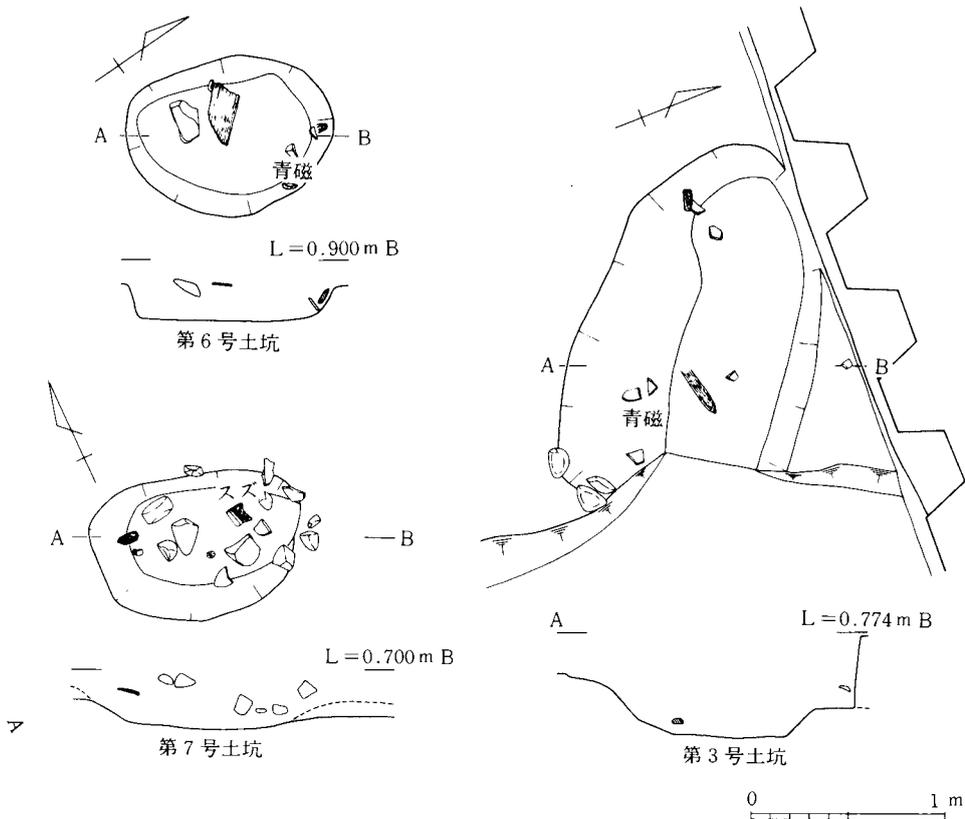
られる。2・3は青磁の碗である。2は外面がへら削りで、シャープな造りの青磁碗Ⅳ-aタイプに属する。釉は透明感のある灰オリーブ色で、高台外面にて止まる。素地は灰色である。高台径は4.8cmを計る。3は口径16cmで、口縁が玉縁状の無文碗である。青磁碗のⅢタイプに属する。釉はオリーブ灰色を呈して、貫入はない。素地は暗灰色で、比較的堅緻である。4の白磁は口径10.6cmの高台付小皿である。釉はやや黄色味をおびて、素地は気泡を多く含んでいる。

5・6は瀬戸系陶器の皿と小型の盤である。5は口径12cmで、口縁を付け塗りしたタイプである。釉は二次加熱により変色して、素地は淡灰色を呈する。6の盤は無足のタイプで、底径22cmを測る。釉は内面に薄くかけられて、明茶褐色を呈する。素地は灰白色で、やや粗い。7は瓦質の火炉で、口径22cmを測る。器面は光沢のある暗青灰色を呈して、胎土は灰色で粗いが、砂粒の含みは少ない。調整は内面へら削りで、他はナデである。栲子文はスタンプによるが、単位は不明である。8・9は土師質土器で、共に土師質土器Ⅲに属する。8は口径7.4cmで、口縁部のナデは弱い。胎土は黄褐色を呈し砂粒の含みは少ない。9と同様に灯芯油痕が認められる。9は口径10cmで、器壁は厚い。胎土は淡黄褐色を呈して、砂粒の含みは少ない。

第3節 地山面の遺構と遺物

(1) 土坑(第15図 図版-14・15)

地山面にて検出した土坑は、大小5基であった。第3～5号土坑の三基は大型で、遺構面の北



第15図 第3・6・7号土坑実測図(1/40)

半に連なって検出されたが、第4・5号土坑は単一の遺構ではなかったので除いた。

第3号土坑（第15図、図版-14）

地山面の北端に位置して、西側は第4号土坑と隣接している。東側は斜面となり旧河川による浸食を受けている。平面プランは不整形な楕円形を呈して、規模は検出面で長径約175cm、短径約150cmを測る。深さは約40cmで、底は北側が二段になっている。土坑覆土は青黒色砂層で、粘土ブロックと炭化物を全体に含む。出土遺物は土坑の東側に集中し、青磁、白磁、珠洲焼、瀬戸系陶器などがあり、他に土坑上面から石製の行火と長辺18cmの方形の粘土塊が検出された。

第6号土坑（第15図、図版-14）

南側の中央部近くに位置して、周辺には柱穴が広がっている。平面プランは不整形な楕円形を呈して、規模は検出面で長径約108cm、短径約85cmを測る。深さは約20cmで、底は平坦である。土坑覆土は暗青灰色砂層であり、出土遺物は青磁と越前焼で、東側の壁面から出土した。土坑の西側から出土した板と礫は、上面に位置し本遺構のものかは明らかでない。

第7号土坑（第15図、図版-15）

地山面の南東側に位置して、周辺には小型の土坑状の遺構がみられる。平面プランは不整形な楕円形を呈している。土坑の上面に位置する礫は5～20cmで、全てが覆土の暗青灰色砂層に包まれて検出されたので、これらが本土坑に伴なうものとみられることから、当時の掘り込み面はもっと上面にあったと考えられる。その規模は長径約135cm、短径約90cm、深さ30cmであったと推定される。出土遺物は礫に混って、珠洲焼、瀬戸系陶器が出土した。

(2) 遺構出土遺物（第16・17図、図版-18・19）

地山面の各遺構から出土した遺物には、青磁、白磁、瀬戸系陶器、珠洲焼、越前焼、加賀焼、土師質土器などの陶磁器類の他に、土錘、硯、砥石などが出土した。しかし、ここでは青磁以下の陶磁器類に関して説明を加える。他の物は別項にて製品別に整理した。

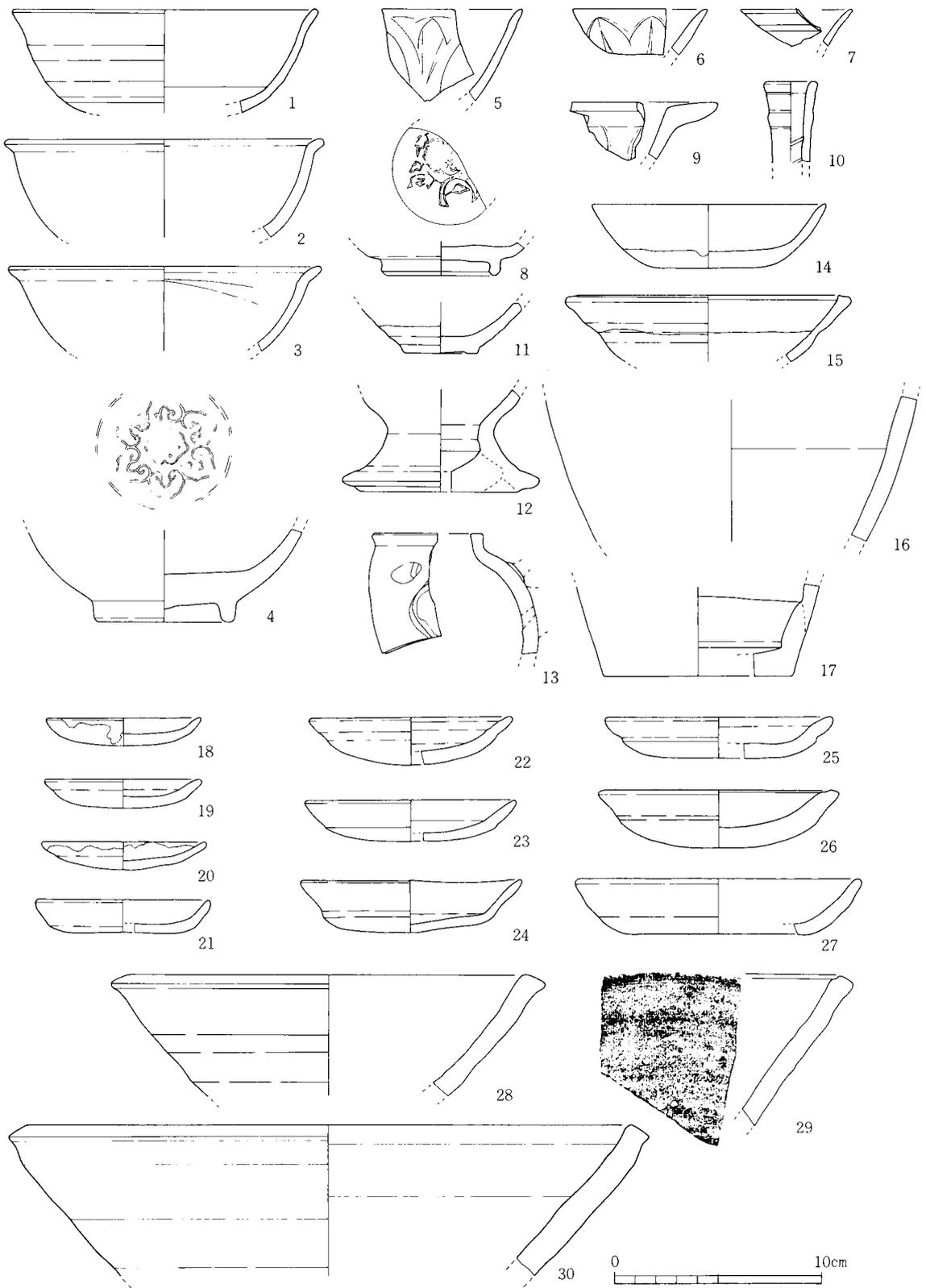
青磁（第16図-1～6、8～10）

1は口径14.8cmで、青磁碗Ⅳ-aタイプに属する。体部外面のヘラ削りは明瞭である。釉は緑灰色を呈して、透明感が高く貫入はない。素地は灰色で、比較的堅緻である。体部下半の内外には、沈線が一条ずつ巡る。2は口径15.2cmで、青磁碗Ⅳ-bタイプに含まれる。口縁の外反は強く、釉は二次加熱により白色に変色している。貫入はない。素地は灰白色で、気泡の含みが目立つ。1・2とも第3号土坑より出土した。

3は口径15.2cmで、2と同様に青磁碗Ⅳ-bタイプに含まれる。口縁内面に隆帯がみられる。釉は明緑灰色を呈して、透明感に欠ける。素地は灰色で、堅緻である。4は高台径6.5cmで、外底面の釉を輪状に削り取るが、砂が付着している。釉はオリーブ灰色を呈して、気泡を含むが透明感があり、貫入が全面に細かく入る。素地は少し黄色味をおびた明灰色で粗い。

5・6は鎬蓮弁文タイプの青磁碗の破片で、Ⅳ-aタイプに含まれる。共に鎬が低い。5の釉は、透明感のあるオリーブ灰色を呈する。素地は灰色である。6の釉は、不透明な灰オリーブ色を呈する。素地は灰褐色で、緻密である。

8は高台径5.4cmで、底部は薄手である。内底面には釉が削り取られるが、印花文が残ってい



第16図 地山面検出遺構出土土器実測図(1) (1/3)

る。外底は高台内面まで、釉が丁寧に削り取られている。第6号土坑より出土した。9は外面に鎚蓮弁文をもつタイプの盤の口縁片である。釉は透明度の低い青緑色を呈する。10は細口の長頸瓶の口縁片である。口径2.6cm、頸部最小径1.8cmで、口縁はわずかに外反する。外面には幅0.5cmと0.8cmの隆帯を2本削り出して、内面にはカキ上げ痕が残っている。釉はオリブ灰色を呈して、貫入はない。素地は灰白色で、気泡が少し目立つ。

白磁（第16図-7）

白磁の出土は少なく9の坏の口縁片だけである。釉はやや青味をおびた白色で、貫入はない。素地は白色で、緻密である。断面には補修痕がみられる。第3号土坑より出土した。

瀬戸系陶器（第16図-11~17）

11は天目茶碗の底部である。素地は灰色で、釉は漆黒色を呈する。高台畳付に回転糸切り痕を留めている。第7号土坑より出土。12は尊式花瓶の台脚部である。台脚径9.6cmで、水挽き整形した後で、内部を充填している。底には回転糸切り痕が残り、黒漆が付着している。素地は灰色で、緻密であり。釉は緑灰色を呈する。13は胴部が球形を呈する水注で、口縁は直立して、水平に面取りされている。素地は明灰色で、比較的緻密である。釉は黄緑色を呈して、ハケ塗りされている。14の皿は、口径11.3cm、底径6cm、器高3.6cmである。素地はやや黄色味をおびた灰白色で、緻密である。釉はオリブ灰色を呈して、内面から外面中程までにハケ塗りされている。内底面にはトチ目痕が残り、外底には回転糸切り痕がある。断面には補修痕がある。第3号土坑より出土。15は口径約12.6cmのおろし皿である。釉は口縁の内外にだけ施釉されている。素地は灰色で、緻密である。釉はオリブ灰色を呈する。おろし目は細く密である。16・17は瓶の胴部と底部の破片である。16は胴部最大径約17.8cmで、体部無文の瓶子である。素地は灰白色で、比較的緻密である。釉は光沢のあるオリブ灰色を呈する。第7号土坑より出土。17は底径9cmである。素地は灰色で、比較的緻密である。

土師質土器（第16図-18~27）

今回の発掘調査で出土した土師質土器は、その形態と調整から4タイプに分れるが、地山面の遺構からは4タイプ中3タイプが出土した。それは、土師質土器Ⅰ~Ⅲのタイプである。

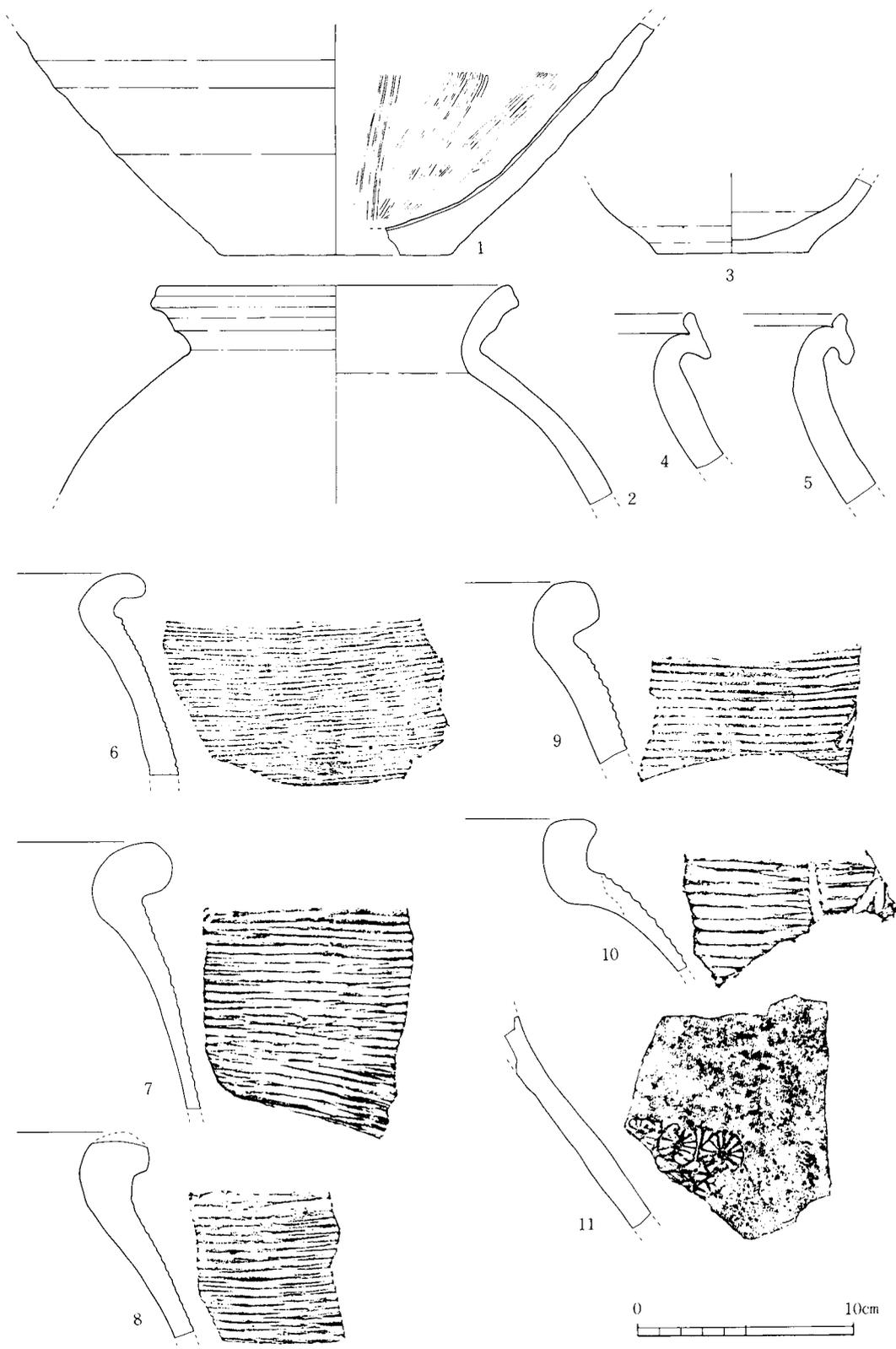
土師質土器Ⅰ（18・19）

18・19は土師質土器Ⅰタイプの特徴を良く示している。形態的には口径が7~8cm程で、小型のもので占められる。その製作は、円板状に整えた粘土板の端部を内湾させた様な作りで、口縁の内外を軽く横ナデをして調整を終えている。そのために口縁の立上がりと口縁端部の歪が著しい。胎土・焼成は共に良好である。なお、18・19とも燈芯油痕が残っている。

土師質土器Ⅱ（21・24・27）

土師質土器Ⅱタイプは、形態的には平底タイプで、器形では大・中・小の三者が認められる。三者とも底部や口縁の器厚は、ほぼ一定しており、調整も良好である。21は口径が約8.4cmと小型である。22は口径約10.7cm、器高約2.6cmと中型である。底部は指押さえにより凹凸がある。27は口径約13.5cm、器高2.7cmで、土師質土器の中では最も大型である。胎土は橙色で、密である。

土師質土器Ⅰ・Ⅱタイプとも地山面の遺構だけに、その出土が認められた。



第17図 地山面検出遺構出土土器実測図(2) (1/3)

土師質土器Ⅲ（第16図-20・22・23・25・26）

土師質土器Ⅲタイプの形態は、丸味を持つ底に外反した口縁で、口縁部の横ナデにより外面に稜を生じているものである。器形的には、土師質土器Ⅱタイプと同様に大・中・小の三者が認められる。20は口径7.5cmで、口縁部の横ナデは弱い。23は灰黄色を呈して、外面の稜は強いが、内面のナデは丁寧である。中型の製品で、口径が11cmである。25は口径10.8cmで、胎土は灰黄色を呈し、焼成は良い。26は口径11cmで、今回出土した土師質土器の中では、器壁が最も厚い。

珠洲焼（第16図-28・30、第17図-2・3・6~10）

地山面の遺構から出土した珠洲焼には、片口鉢・壺・甕の三器種とも含まれていた。

片口鉢(第16図-28・30)は、捏鉢が2点と播鉢が1点出土している。28・29の捏鉢は口縁端部を幅広に面取りしたものである。28は口径19.4cmと小型で、内面に比べ外面の調整は粗い。胎土は暗灰色を呈して、比較的緻密である。28は口径29.3cmで、胎土は灰色を呈し緻密である。内面に降灰が付着して光沢がある。

壺(第17図-2・3)は、大・小2点出土した。2は口径16.4cm、頸部径13.5cmで、肩の張は弱いが四耳壺であろう。口縁は強く外反して、端部をつまみ出している。胎土は灰色を呈して、緻密である。外面に降灰が付着している。3は底径7cmの小型の壺である。

甕(第17図-6~10)は、口縁部片を図示して、胴部片などは省略した。6は口縁部が大きく外屈し、器壁は厚手である。外面の叩きは、3cm当り14本と細くて密である。胎土は灰色で、焼成は並である。7は口縁が玉縁状を呈して、頸部には横ナデが無い。器壁は内面の削り取りで、薄く仕上げられている。叩きは3cm当り8本である。内面に黒釉状のものが付着している。8は口縁上端を欠失するが、頸部の横ナデは強い。叩きは3cm当り8本である。9の口縁は玉縁状を呈するが、面取がされている。胎土は灰色を呈して、比較的密である。叩きは3cm当り8本である。内面には黒漆状のものが付着して平滑である。10は口縁端を面取りし、頸部を強く横ナデしている。胎土は灰色を呈して、焼成は良い。叩きは3cm当り6本と最も粗くて、「N」のへら描き記号がある。

越前焼（第16図-29、第17図-1）

越前焼は片口鉢などの小型の製品が出土した。29は直線的に立ち上がった片口鉢の口縁部片で、内面に沈線が巡る。おろし目は認められず、胎土は赤褐色を呈して、砂粒の含みが多い。1は外面に水挽き痕を明瞭に残している。胎土は赤褐色を呈して、焼成は並である。内面のおろし目は、2.6cm幅9条で、右回りに間隔を置いて粗く施している。

加賀焼（第17図-4・5・11）

4・5は大甕の口縁部で、共に口縁部をN字状に折り返して、口縁帯を造り出している。胎土は灰色を呈して緻密である。4は口縁帯をハケ状工具でナデている。胎土には砂粒が少なく密である。5は降灰が付着して、胎土は砂粒を少し含んでいる。11は甕の肩部片で、外面には降灰釉が付着している。胎土は砂粒が少なく密である。外面のスタンプは菊花文を連ねたものである。

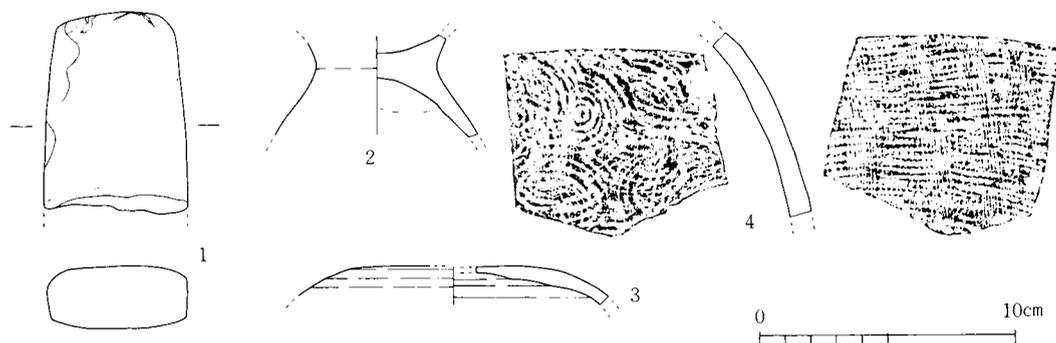
大甕の口縁部片の5は、加賀焼として整理したが、越前焼に含まれる可能性もある。

第V章 遺物

第1節 原始・古代の遺物（第18図 図版-19）

今回の発掘調査により原始・古代の遺物が4点出土した。遺物は磨製石斧、土師器、須恵器片で、いずれも中世の包含層中に散発的に検出されたものである。

1は定角式磨製石斧の頭部片である。幅5.8cm、厚さ2.5cmで、石質は流紋岩である。表裏の両面と頭部に新しい使用痕が認められ、中世にて砥石などとして利用した可能性がある。2は土師器で、器種は小型の台付甕の底部である。胎土は砂粒を多く含み赤橙色を呈する。3と4は須恵器の蓋と横瓶である。蓋は外面へラ削りで、内面はナデである。焼成は良好で、胎土は青灰色を呈する。横瓶は焼成は良いが、胎土に砂粒を多く含み色調は灰色を呈する。



第18図 原始・古代の遺物実測図（1/3）

第2節 舶載陶磁器

(1) 青磁（第19・20図 図版-20）

今回出土した舶載陶磁器の中心は青磁であり約220点出土した。器種としては、碗、皿、盤、鉢、壺の5種類が確認された。その青磁の中でも碗が大半を占めている。

碗（第19図 第20図-1～15）

青磁の碗は、その形態と文様からV類-7タイプに分けて整理した。

I類（第18図-1～13）

碗の体部外面に蓮弁文を施文したもので、鎬蓮弁文タイプ（I-a）と、へラ先により蓮弁文を刻むタイプ（I-b）に分けられる。

I-a類（1～8、12・3）は、鎬蓮弁文を施文した青磁の碗でも、最も新しい群である。蓮弁文の削り出しが粗く、鎬も低く明瞭ではない。しかし、1～8の口縁部片釉には貫入が認められない。

1は、口径14.2cmで、釉はやや透明感のあるオリーブ灰色を呈し、素地は灰白色で、緻密であ

る。2は口径15.4cmで、釉はオリーブ灰色を呈する。素地は明灰色で、気泡を多く含んでいる。鎬蓮弁文の削り出しは粗く、弁の一部にはへらに横ガキが認められる。3は口径18.6cmとI類中では、最大径である。釉は明緑灰色を呈する。素地は灰白色で、比較的密である。蓮弁の削り出しは良いが、鎬は明瞭ではない。4は体部片で、釉は透明感のないオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で、比較的密であるが、気泡を含む。蓮弁の削り出しは不明瞭で、鎬も右寄りである。5の釉は透明感のないオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で、緻密である。6は蓮弁を粗く削り出す。釉はオリーブ灰色を呈し、気泡の含みが多い。7は明緑灰色の釉で、素地は灰色である。8はオリーブ灰色の釉で、素地は灰白色である。

11は口径15cmで、浅い片切彫により蓮弁を削り出すが、間弁は崩れ鎬は低い。釉はやや透明で、明緑灰色を呈する。素地は灰白色で、密であるが、気泡が少し含まれる。12は高台径 6.2cmを計る。外面の蓮弁は細く丁寧な削り出し、内底面には不明瞭な印花文が認められる。釉は透明感に欠けたオリーブ灰色を呈し、畳付を含め高台内面にまで及ぶ。貫入は粗く入る。外底面には砂の付着がある。素地は灰白色を呈するが、気泡の含みは多い。13は幅が比較的広い蓮弁文を片切彫で、削り出す。釉は透明感のあるオリーブ灰色を呈して、高台内面にまで及ぶが、外底面は削り取られている。貫入は粗く入る。内底面には円圈が巡るが、印花文などは認められない。また、内底面に目痕が、外底面には砂の付着が認められる。素地は灰色を呈し、やや粗い。

I - b類(9・10)は、へら先により蓮弁文を刻むタイプであるが、出土点数は3点と少ない。図化可能な2点を図示した。

9は口径約13cmとやや小型の碗である。釉は明るいオリーブ灰色を呈するが、透明感に欠ける。素地は灰白色で、緻密である。割口には補修痕が認められる。10は口径約14.5cmである。釉は光沢のある明るいオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で、緻密である。

II類(第18図-14~17)

口縁部が直立もしくは直立に近い状態で立ち上がるものを一括した。体部外面の文様から2つのタイプに分かれる。それは、雷文や蓮弁文を施文したタイプ(II-a)と、無文のタイプ(II-b)である。

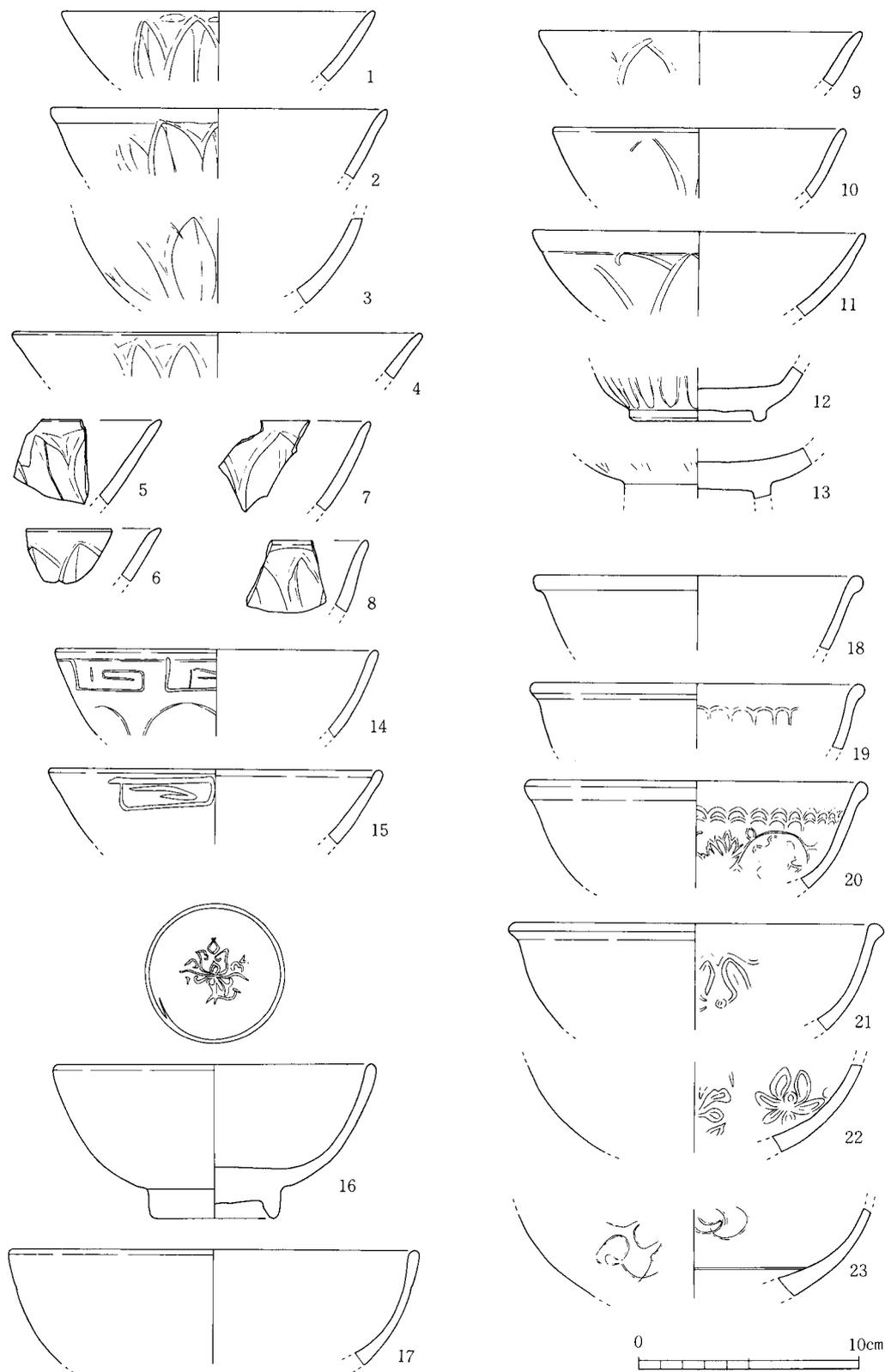
II-a類(14・15・17)は、約8点出土した内の3点を図示した。

14は口径14.6cmで、雷文と蓮弁文を組み合わせで、この文様の青磁碗はこれだけである。釉は二次加熱のために透明感のない明緑灰色を呈している。貫入はない。素地は灰白色で、緻密である。15は口径15cmで、口唇部をやや内湾させている。雷文は粗く施文されている。釉は透明感があるオリーブ灰を呈している。貫入は粗く入る。素地は14と同じである。

17は口径18.6cmとやや大型の碗である。口縁外面に浅い雷文を巡らす。二次加熱により不明瞭である。釉は体部下半では、明るいオリーブ灰色を呈する。素地は灰色で、緻密である。なお、内底面近くに径14cmの円圈が巡る。

II-b類(16)は、1点だけである。

16は口径14.4cm、器高 7.1cmで、器壁に比べ底部は厚手である。外底面には釉が輪状に削り取られるが、畳付には砂が付着している。釉は明るいオリーブ灰色を呈し、透明感には欠けるが、



第19图 青磁实测图(1) (1/3)

光沢があり、貫入はない。素地は灰白色である。破片の多くは第3号溝検出中に出土した。

Ⅲ類（第18図-18～22）

器形的には、口縁部を玉縁状に仕上げ、内面にはスタンプ状花文を施文したタイプで、文様は全て陽刻である。型造りの製品であり、出土品を全て図示した。

18は内面に不明瞭であるが、ヘラによる線刻が見られる。釉はオリーブ灰色を呈する。19は口径14.8cmで、内面に蓮弁文と唐草文状の文様を刻むが、下半の文様は不明瞭である。釉は透明感に欠けたオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で、比較的密であるが、気泡が目立つ。

20は口径15cmで、内面に蓮弁文と牡丹唐草文を刻んでいる。蓮弁文はスタンプによると見られるが、牡丹唐草文はヘラにより削り出している。釉は透明感に欠けた灰オリーブ色を呈する。釉は均一にかけられている。素地は灰色で、比較的密である。断面に補修痕が認められる。

21は口径約16.4cmで、22と同様やや大き目の碗である。口縁の玉縁は、他のものより外へ張り出す。釉は不透明であるが、明るいオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で、比較的密である。22は体部片である。内面の六花卉の文様は21と同様に陽刻されている。釉は透明感の無い灰オリーブ色を呈するが、貫入は見られない。素地は灰白色で、密である。六花卉をもつ21と22は、共に釉のむらがあるものである。

Ⅳ類（第19図-1～11）

口縁部が外反するタイプの碗で、内底面以外はほとんど無文である。その造りから二つのタイプに分けることができる。それは、透明感が強く灰色味の釉が薄くかかり、全体的にシャープな造りのタイプ（Ⅳ-a）と、釉が厚めにかけられ鈍い造りのタイプ（Ⅳ-b）である。

Ⅳ-a類（1～3）は約8点出土したが、内3点を図示した。

1は口径15.5cmで、口縁の外反は弱い。釉は透明感が強い灰オリーブ色を呈し、貫入は内外とも入るが、特に口縁部の周辺が目立つ。素地は灰色で、密である。断面に補修痕を留めている。

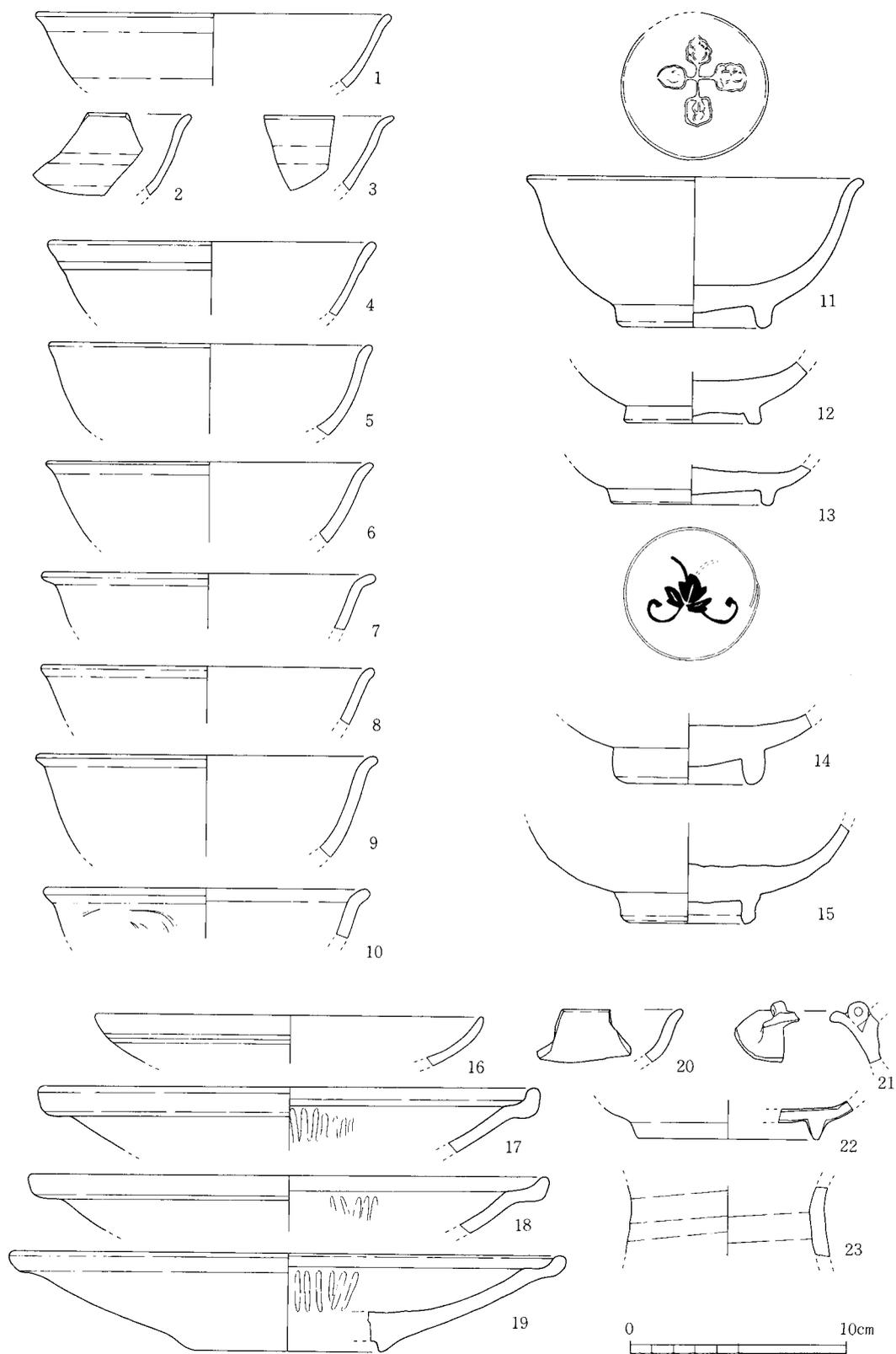
2・3は共に釉は明るいオリーブ灰色を呈して、貫入が粗く入る。素地も暗灰色である。

Ⅳ-b類（4～11）は、調整や釉にばらつきが認められるが、一群として整理した。

4は口径15cmで、口縁部の外反が弱い。口縁の外面に幅0.5cmの低い隆帯を削り出す。釉は不透明で、緑色をおびた灰オリーブ色を呈するが、釉にむらがあり素地が所々で赤褐色に変色している。素地は灰色で、密である。5は口径14.8cmで、口唇部は丸味をもち口縁の外反も弱い。釉はやや不透明であるが、明るいオリーブ灰色を呈する。貫入はない。素地は灰色で、緻密である。7は口縁部を強く外反させている。内面に沈線が認められるが文様は不明である。10と形態的に似ている。

9は口径15.6cmで、口唇部は丸味をもつ。釉は明るいオリーブ灰色を呈するが、透明感に欠ける。貫入は全体に粗く入る。素地は灰色で、密である。10は口径15cmで、口唇部は丸味をもつ。外面には浅い片切彫の文様の片鱗が見られる。釉は明るいオリーブ灰色で、透明度は低い。素地は灰白色で、比較的密である。

11は口径15.2cm、器高7cm、高台径7.2cmである。Ⅳ類の中でも唯一全形を知りえる碗である。内底面には径6.8cmの円圏を巡らして、内部に羯磨文がある。釉は不透明で、やや暗いオリーブ



第20图 青磁实测图(2) (1/3)

灰色である。貫入はない。また、釉は全体に厚くかけられるが、高台周辺で釉溜りをおこしている。外底面は釉を輪状に削り取っている。素地は灰色で、緻密である。断面に補修痕が認められる。破片は3片が第1号溝から出土し、2片が鍛冶台の横から出土した。

底部（第20図 12～15）

釉と高台部の調整から青磁碗Ⅳ類に属するものとして整理した。

12は高台径6.1cmで、内底面に径6.2cmの円圈と印花文が認められる。釉は明るいオリブ灰色を呈するが、透明度は低い。釉にはむらがあるが、貫入はない。外底面の釉は粗く削り取るが、砂が付着している。素地は灰白色で、粗く気泡の含みも多い。13は高台径7.5cmで、内底面の中央に径4.2cmの円で釉を削り取る。また、その外に径6.2cmの削り出しの円圈を巡らす。釉を削り取った痕には砂が付着している。外底面には黒漆により牡丹文(?)が描かれている。釉は明るいオリブ灰色を呈して、透明度はやや高い。釉にはむらが無いが、貫入は粗く入る。素地は灰白色で、比較的密である。皿の可能性が高い。14は高台径6.8cmで、内底面には径約7cmの円圈と印花文が、不明瞭ではあるが認められる。外底面は露胎で赤褐色を呈する。釉は明るいオリブ灰色を呈するが、透明度は低い。また、釉にはむらが目立っている。素地は灰色で、やや粗い。15は青磁碗の中でも最も大型の碗であろう。しかし、高台は径6.2cmと比較的小さい。内底面には径6.8cmの円圈が認められるが、印花文は不明である。高台の畳付の釉は削り取られ、外底面の露胎部分は赤褐色である。釉は透明度の無い灰オリブ色を呈して、全体にむらをおこしている。素地灰色で、やや密である。

皿（第20図-16、20）

青磁の皿は計10点出土した。大型の製品は16を含め2点で、他の6点は20と同様に小型の製品である。いずれも無文である。小型の皿には、口縁を軽く玉縁に仕上げるものと、外反させる二つのタイプが認められる。そして、いずれにも釉には貫が入る。

16は口径18cmで、口縁外面に3条の沈線を巡らす。釉は灰オリブ色を呈して、透明度はやや高い。貫入はない。素地は灰色で、緻密であり気泡の含みは少ない。20は口縁を外反されたタイプの小皿であるが、釉はオリブ灰色を呈し、透明度は低い。素地は暗灰色で、比較的密である。

盤（第20図-17～19）

盤と考えられる破片は約18点出土したが、その多半は小片で、図示できるものは3点であった。3点とも口縁を水平に折り曲げて、更に端部を垂直に曲げるタイプである。しかし、小片の中には口縁を水平に折り曲げ、体部外面に鎬蓮弁文を施こしたものがあり。釉は青緑色を呈している。

17は口径約23cmで、釉は透明度の低いオリブ灰色である。貫入は全体に入る。素地は灰白色で、密である。18もほぼ同一である。

19は口径25.6cm、器高4.6cm、高台径8.6cmを計る。釉は高台内面にまで及び、内底面には径11cmの削り出しの円圈が見られる。釉は暗オリブ色を呈して、透明度はやや高い。貫入は全面に入る。素地はやや茶色味をおびた灰色で、気泡が目立つ。断面には補修痕が認められる。

盤や皿は碗に比べ個体数も少なく、種類も少ない。これは、本遺跡だけに認められる様相ではない様に考えられる。

鉢（第20図-22）

22は唯一の鉢である。高台径は 8.4cmで、畳付の釉は削り取られている。内底面には径10.2cmの円圈がめぐる。釉は暗オリーブ色を呈して、透明度は高い。器面全体に厚目に施釉されている。貫入は全体に細かく入る。素地はやや茶色味をおびた灰白色を呈して、比較的密である。他にも釉が暗青緑色を呈する破片も出土している。

瓶（第20図-23）

瓶は二点出土したが、大・小の差は有るが長頸の製品であった。

23は瓶の頸部片で、最小径約 8.8cmである。下端は体部との接合面であったと認められる。内外面とも引き上げ時の綾を強く留めている。釉は明緑灰色を呈して、透明度は高い。貫入は内外面とも入る。素地は灰色で、比較的緻密であるが気泡が目立つ。

他に、地山面の遺構からも 1点（第16図-10）出土している。

21は青白磁で、小型の水注の破片と考えられるものである。水注の把手の上端の付根部分から口縁にかけてである。把手と口縁部との間に内径 0.4cmの輪を付けている。釉は口縁内面にて止まり、それ以下は露胎である。釉は明緑灰色を呈して、透明度は高い。貫入はない。素地は明るい灰白色で、緻密で気泡の含みも少ない。

前回の第一次調査の時には、梅瓶の胴部片が 1点採集されている。

(2) 白磁（第21図 図版-21）

今回の調査で出土した白磁は約70点であるが、その多半は高台付小皿で占められている。高台付小皿以外には、口禿皿と坏、碗、壺が数点出土している。

小皿（第21図-1～14）

小皿には口禿小皿と高台付の小皿の二種類が有るが、高台付小皿はさらに輪高台と、高台挟り込の 2タイプに分かれる。

口禿小皿（1～4）で、全形が推定出来るものは 1だけである。1は口径10.7cm、器高 3cm、底径 6cmである。口縁部の釉の削り取りは 3面で、釉は青味をおびた灰白色を呈する。素地は灰白色で、密であるが気泡が目立つ。2は口径10.6cmで、口縁部の釉の削り取りは 2面である。釉は灰白色を呈する。素地も灰白色で、気泡の含みも少ない。3・4は口禿皿の底部片である。3は底径 5.2cmで、釉や素地は 1と同一である。4も底径 7cmであるが、釉や素地は 1・3と同一である。

高台付小皿（5～14）は、白磁の中心的な製品である。5は口径 9.6cmと小型で浅い。釉は青味をおびた灰白色で、貫入はない。6は口径 9.4cmで、外面の釉は体部下半にて止まる。二次加熱を受けて、釉は激しく噴いている。7は口径 9.8cmで、釉は 6と同様に体部下半にて止まる。黄色味をおびた白色である。貫入は全体に細かく入る。8は 7とほぼ同一である。9は口径11.2cmで、釉は青味をおびた灰白色を呈する。貫入は全面に入る。素地は白色で、気泡の含みも少なく密である。10は口径12.8cmとやや大きい。口唇部は面取されている。釉は黄色味をおびた白色で、貫入は全面に入る。素地は白色で、密である。

11は口径 9.5cm、器高 2.2cm、高台径 4.5cmである。高台には挟り込みがある。内底面には目痕が残り、外底面には「八十八門下」と判読出来る墨書がある。釉はやや黄色味をおびた白色で、薄くかけられ貫入はない。素地は気泡を少し含んでいる。

12は口径 9.8cm、器高 2.5cm、高台径 3.9cmである。高台は挟り込まれ、内底面には目痕がある。外底面には黒漆を用いた「.」がある。釉は青味をおびた灰白色で、貫入は全体に入る。素地は荒く、気泡の含みも多い。

13は口径11cm、器高 2.7cm、高台径 4.2cmである。高台は輪高台であり、外底面には「志」と判読出来る墨書がある。また、燈明皿として使用された為か、弱い二次加熱を受けており、器面には“油”の浸透による変色が、口縁部を中心に斑に広がっている。

14は高台径 4.6cmで、高台には挟り込みがある。内底面には目痕があり、外底面には「一」の墨書がある。釉は青味をおびた灰色を呈し、高台外面には釉溜を生じている。素地は粗く気泡を多く含む。

坏（第21図-15~18）

坏は今回の調査では7点の破片が出土したが、多角坏は1点だけであった。

15は口径約 7.7cmで、外反した口唇部を面取をしている。釉は透明感のある灰白色を呈して、貫入は全面に入る。素地は灰白色で気泡を多く含む。16は多角坏の破片であるが、角数は不明である。口縁と体部の稜は一致しない。釉は青味をおびた白色で、貫入は全体に細かく入る。

17は高台径 3.2cmで、畳付に2ヶ所の目痕がある。釉は透明で、やや青味をおびている。貫入はない。

18は高台径 3.2cmで、底部は厚手である。外底面には「力」の墨書がある。釉は青味をおびた白色で、高台外面にまで及んでいる。素地はやや黄色味をおびた白色で、気泡を多く含む。

碗（第21図-19・20）

19は口縁が玉縁を呈するタイプの底部である。高台径は6cmで、高台の削り出は粗く雑である。釉は灰白色で、貫入はない。素地も灰白色で、ねばりけが強く緻密である。

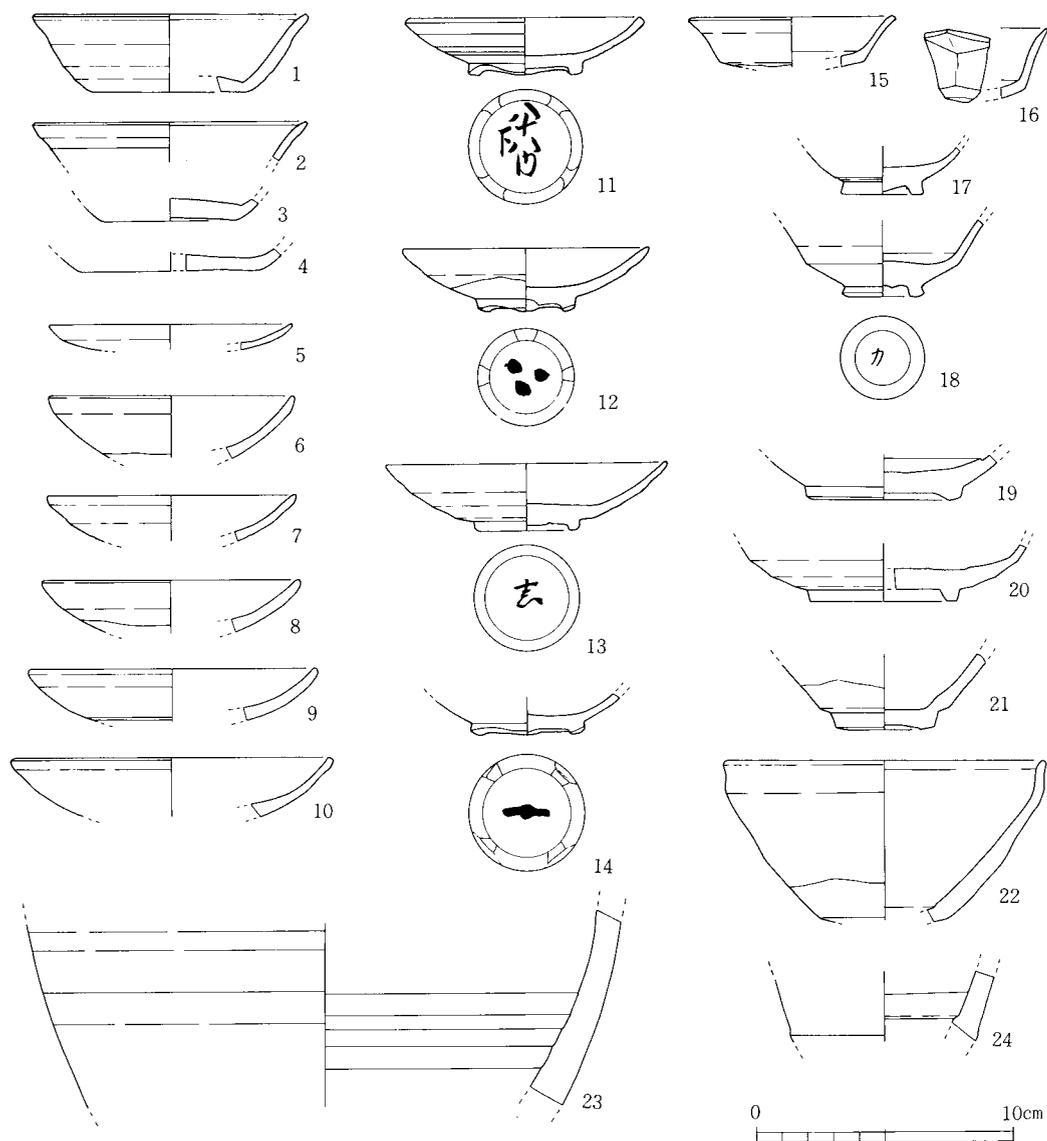
20は内底面の釉を輪状に削り取るタイプの碗である。輪状の釉の削り取りと幅は1.5cmである。高台径は5.7cmで、体部外面にはへら削りによる稜を強く留めている。釉は透明感のある淡灰色を呈して、体部下半にて止まり高台には及んでいない。貫入は全体に粗く入る。素地は灰白色で、緻密である。釉がかからない露体部分は、一部赤褐色を呈している。このタイプの碗は、沖縄県御物城¹⁾に一括資料がある。白磁の碗は上記の二点だけであり、個体数では天目の碗より少ない。

壺（第21図-23・24）

2点出土したが共に四耳壺タイプの製品と考えられるものである。23は体部下半が厚手となる。釉は透明な灰オリーブ色を呈する。貫は全体に粗く入る。素地は灰白色で、気泡の含みが多い。

24は釉が透明で、やや青味をおびた灰白色を呈する。素地は灰色で緻密である。気泡の含みは少ない。23に比べ小型の製品である。

白磁の壺も青磁と同様に大・小1個体ずつであるが、供膳形態以外の器種構成を復元する上でも貴重な資料である。



第21図 白磁・天目実測図 (1/3)

(3) 天目 (第21図-21・22 図版-21)

天目茶碗の中で、舶載製品は4点であったが、ここでは内2点を図示した。

21は唯一の底部片であり、高台径3.8cmであった。高台外面の削りは鋭く、器面は滑らかに仕上げられている。釉は漆黒色を呈して、全面に薄くかけられ光沢がある。素地は灰色で、緻密である。

22は口径12.4cmで、口縁部が直立して、口唇部がわずかに外反する。釉は漆黒色で、全体に均一にかけられている。素地は灰色で、気泡を少し含んでいる。口縁外面には幅0.5cmの帯状の使用痕(擦痕)が認められる。これは木製の蓋により生じたものと考えている。また、断面には漆による補修痕が認められる。

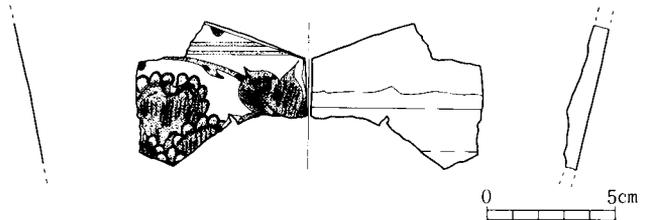
(4) 青花磁 (第22図 図版-21)

今回の発掘調査で出土した舶載製品の中では、唯一の青花磁片である。破片は縦 6.7cm、横 5.7cm、厚さ0.5~0.9cmで、3片から成る。出土地点は中層面の南端で、暗灰色砂質土層中より出土した。器形は瓶で、胴部下半の破片と考えられる。なお、外面右に銚止め釘が残る。

この青花磁片の文様は、牡丹唐草文を主体としたもので、上部に幅 0.2cmの界線を二重に巡らし、文様の区画をしている。花芯部と葉の葉脈には沈線が浅く入り、紺色を呈している。釉はやや青味をおびて、コバルトの青料は碧青色に発色している。しかし、青料には全体的ににじみがある。素地は白色で、緻密である。内面は露胎であるが、その調整は粗くロクロ目が残っている。

この青花磁が出土した土層は、中層面の遺構検出面であり、その周辺や同一層から出土した他の陶磁器から、埋まった時期は15世紀前半~中頃と考えられる。しかし、この青花磁の製作時期は、中国の元代に位置するものであろう。

なお、この時期の青花磁の出土例は、北陸地方では福井県の一乗谷朝倉氏遺跡⁽²⁾と豊原寺華蔵院⁽³⁾のものが知られている。石川県下ではこれが初例である。しかし、近年石川県下でも中世の集落址や城館跡の調査件数は増えており、今後の調査で、新たな資料の発見も予想される。



第22図 青花磁実測図 (1/3)

第3節 国産陶磁器

今回の発掘調査では、国産の陶磁器として、瀬戸系陶器、珠洲焼、越前焼、土師質土器などが出土した。以下順に説明を加える。

(1) 瀬戸系陶器 (第23~25図 図版-21・22)

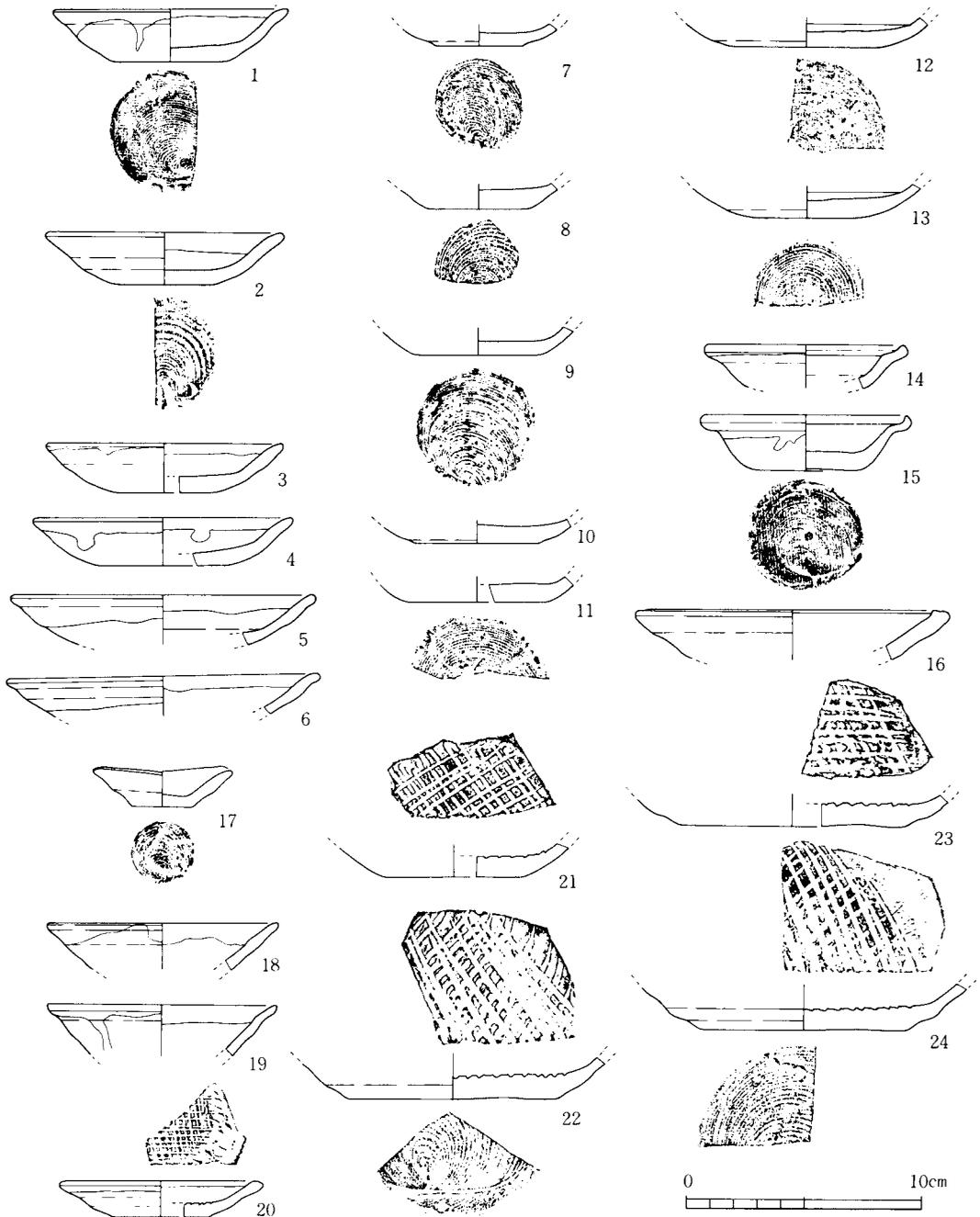
国産陶磁器の中で瀬戸系陶器は、土師質土器に次ぐ個体類が出土した。そして、その特徴は器種の豊富さにある。その器種は、皿を筆頭におろし皿、平碗、天目碗、盤、花瓶、香炉、瓶、筒形容器、茶入、水注など多種に及び、舶載製品には無かった花瓶や香炉などが含まれている。また、瀬戸系陶器は全て施釉陶器であり、無釉陶器や山茶碗などは一点も検出されていない。

皿 (第23図-1~15、17~19)

瀬戸系陶器の中で、皿は最も多く出しているが、その大半は灰釉を施釉したものである。その施釉方法から二種類に分かれる。Iは口縁部だけを付け塗りしたタイプで、IIは内面から口縁外面までをハケ塗りを行うタイプである。なお、Iの中でも鉄釉を施釉したものもあり、2点を図示した。

I 灰釉皿 (1~13)

1は口径 9.8cm、底径 4.6cm、器高 2.2cmで、底に回転糸切り痕を明瞭に残している。素地は淡黄灰色を呈してやや粗い。釉は淡緑黄色で、口縁部の内外に薄くかけられている。燈芯油痕がある。2は口径 9.9cm、底径 4.5cm、器高 2.2cmで、底に粗い回転糸切り痕を残している。素地



第23図 瀬戸系陶器実測図(1) (1/3)

は燈明による二次加熱により一部軟質化しているが、淡灰白色を呈してやや堅緻である。釉は白色に変色して、タールの付着が多い。旧河川の底から硯(第32図-1)と共に出土した。3の素地は灰色で、緻密である。釉は緑黄色を呈して、露胎部には煤とタールが多く付着している。4は口径約10.9cmで、体部下半には糸切り時に生じた擦痕を消そうとしている。素地は灰白色を呈し、やや粗く砂粒が目立つ。5は口径約12.8cmで、6は口径約13.2cmとやや大ぶりである。共にタールや煤の付着はない。

底部片の中で9～13はI類で、7・8はII類に属するものである。

9は底径 5.1cmで、素地は灰色で緻密である。12は底径 6.4cmで、内底中央と立ち上がり部に沈線が巡る。素地は灰色で緻密である。13は底径 4.2cmで、素地は灰白色でやや緻密である。

I 鉄釉皿 (17～19)

17は黒褐色の鉄釉を内面全体から口縁外面まで、ハケ塗りした小坏である。完形で口縁は、最長径 6.1cmの楕円形を呈する。底径 2.6cm、器高 1.7cmである。素地は灰白色で、比較的緻密である。中層面より出土。

茶褐色を呈する鉄釉を口縁に付け塗りするタイプは2個体出土した。共に器壁の立ち上がりは灰釉皿に比べ急である。18は口径約 9.8cmで、素地は灰白色で、比較的緻密である。19は口径9.8cmと同一であるが、素地はやや明るい灰白色で、緻密である。

II 灰釉皿 (14・15)

14・15とも口縁を外反させた後で、口縁端部を垂直に引き上げている。14は口径 8.1cmで、素地は黄色味をおびた灰白色で、やや緻密である。15は口径 8.6cm、底径 4.5cm、器高 2.4cmである。釉は緑灰色を呈して、内面全体から外面中程までハケ塗りされている。素地は黄灰色で、やや緻密である。

おろし皿 (第23図-16・20～24)

おろし皿は約19点出土した中で、6点を図示した。16は口径12cmで、おろし皿個有の口縁である。20は小型のおろし皿で、口径 8cm、底径 4.2cm、器高 1.6cmである。素地は灰白色で、比較的堅緻である。釉はオリーブ黄色を呈して、口縁のみ施釉されている。見込のおろし目は細く密である。21は底径 5.8cmで、素地は灰色で堅緻である。

22～24は見込のおろし目が太目で粗い。22は底径 9cmで、素地は灰色で緻密である。23は底径9.4cmで、素地は灰色で比較的緻密である。24は底径 8.4cmで、素地は暗灰色で緻密である。断面に漆による補修痕が認められる。

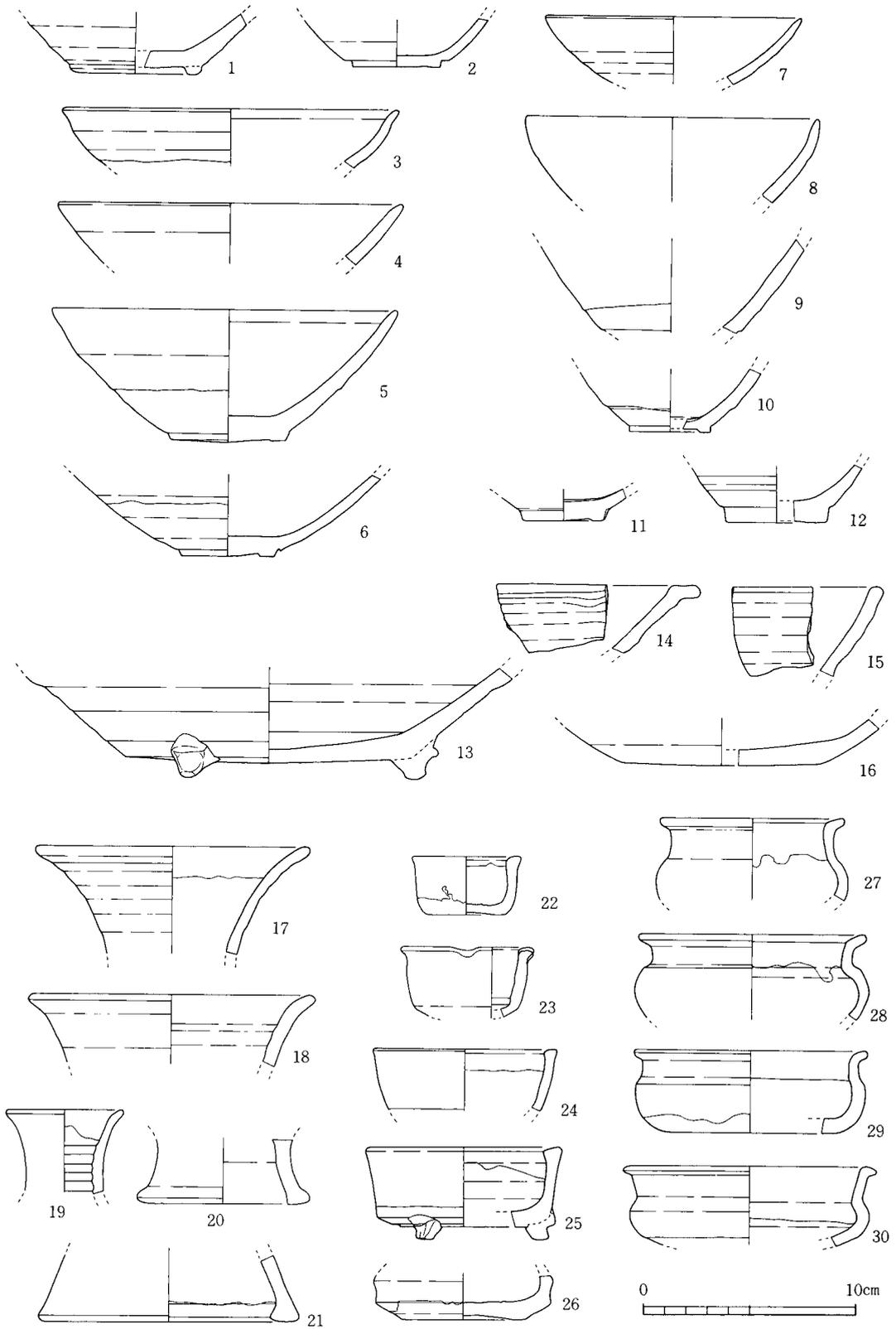
平碗 (第24図-1～6)

灰釉の平碗は約13点出土したが、図示出来るものは5点である。点数的には天目茶碗より少ない。また、張付高台は1だけで、その他は全て削り出し高台である。

1は高台径 6.2cmで、高台の接合部分には、剥離がみられる。素地は二次加熱により明灰白色を呈して、ざっくりとして気泡も多い。内面に目痕が残っている。2は高台径 4.2cmと小型の碗である。高台の削り出しはシャープであるが、外底面の削りは浅く、回転糸切り痕を留めている。素地は灰色で、やや堅緻である。釉は黄緑色を呈し体部外面にわずかに付着するが、内面には施釉されていない。3は口径15.8cmで、口縁部をわずかに外反させている。素地は灰白色で、やや緻密である。

5は口径16.4cm、器高 6.3cm、高台径 5.7cmである。全体的に水挽き痕を留めて、高台から体部下半の削りは粗い。素地はやや黄色味をおびた灰白色で、ざっくりとした感がある。釉は浅黄色を呈して、内面には目痕がある。中層面の出土で、珠洲焼の播鉢(第26図-3)と共伴する。

6は高台径 4.4cmで、器壁は薄手である。高台周辺の削りは丁寧である。素地は二次加熱によ



第24图 瀬戸系陶器実測図(2) (1/3)

りやや黄色味をおびた灰白色で、やや緻密である。釉はオリーブ黄色で、内面には目痕がある。

天目茶碗（第24図-7~12）

天目茶碗は約50点出土した中で、6点を図示した。

7は口径12cmで、器壁が薄手に仕上げられている。素地は灰白色で、緻密である。全体に褐色味をおびた黒色の釉がかけられている。8は口径13.8cmで、素地は灰色で粗く、ざっくりとした感がある。釉は褐色味をおびた黒色を呈する。9の胴部片は、素地が灰白色で、緻密である。釉は光沢のある黒色を呈する。10は高台径 3.8cmで、畳付には糸切り痕が残る。素地は灰色で、緻密である。12は高台径 4.8cmで、比較的径が大きい。素地は黄色味をおびた灰白色で、粗くざっくりとした感がある。釉は薄く黒褐色を呈する。また、畳付には糸切り痕が残る。

盤（第24図-13~16）

盤は約30点出土したが、全形を知り得るものは1点も無い。器形的には三足の有無と片口の有無がみられた。個体数の面では、青磁の盤をやや上回っている。

13は底径13.6cmで、三足を持つ大型の盤である。内面の釉は薄くハケ塗りされて、オリーブ黄色を呈する。素地はやや茶色味をおびた灰白色を呈して、緻密であるがざっくりとしている。外面の削りは比較的丁寧である。14は口縁を水平に折り曲げ、片口が付くタイプで、全面にオリーブ黄色を呈する釉が均一にかけられている。15は鉢の可能性も有るが、小片のため不明である。

16は三足を持たない小型の盤である。底径は 9.6cmで、内面に茶褐色の降灰釉が付着する以外は釉はみられない。素地はやや黄色味をおびた灰白色で、やや緻密でざっくりとした感がある。外面の削りは比較的良好である。

花瓶（第24図-17~21）

花瓶は約7個体出土した。形態的には尊形で、水挽きをした胴・台脚部に口頸部を接合させた尊式花瓶のタイプと、水挽きをした胴部に外面する口頸部と高脚を接合するタイプの二者が認められた。

17は口径12.8cmで、水挽きした素胎にオリーブ灰色の釉が施釉されている。素地は灰色で、やや緻密である。内面は横ナデが、丁寧になちれている。18は灰白色の素地で、釉は灰オリーブ色を呈する。19は口径 5.4cm、頸部最小径 3.6cmと小型の花瓶である。素地は灰白色で、緻密である。釉は二次加熱により一部白色化しているが、オリーブ黄色を呈する。

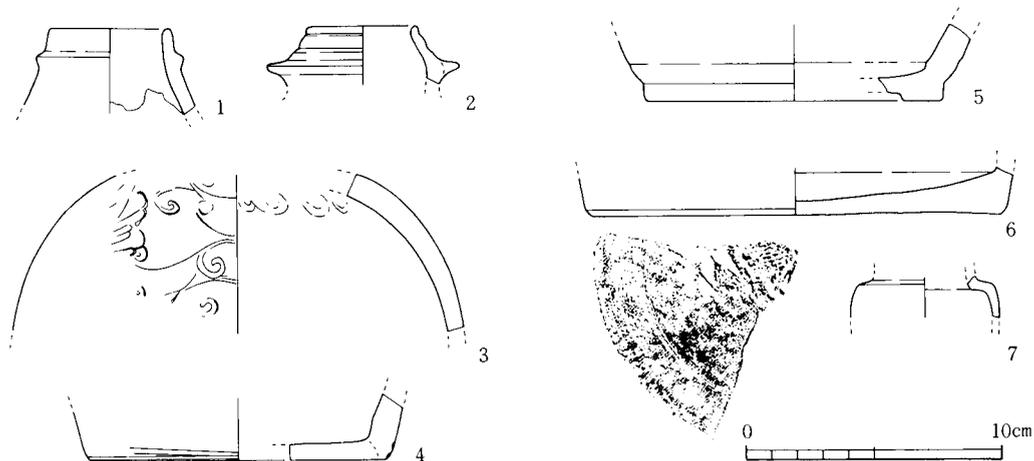
20・21は胴部に高脚を接合するタイプの高脚である。20は脚端部径 8.2cmで、水挽きにより成形されている。釉はオリーブ灰色を呈して、全面に施釉されている。素地は灰色で、緻密である。上端部は胴部との接合面である。地山面より出土した。21は脚下端径約12.5cmで、素地は灰色で、緻密である。釉はオリーブ灰色を呈して、外面から内面下端まで施釉されている。

香炉（第24図-22~30）

香炉は11点出土したが、その内訳は筒形香炉が7点で、袴腰香炉が5点であった。筒形香炉は大小二種類に分かれるが、袴腰香炉はほぼ同一規模の製品である。

I 筒形香炉（22~26）

筒形香炉の中でも22と23は小型の製品である。20は口径 5.2cm、器高 2.7cmである。釉は黄色



第25図 瀬戸系陶器実測図(3) (1/3)

をおびた白色で、やや緻密である。釉はオリーブ灰色を呈する。底には回転糸切り痕が残る。23は口径 6.2cmで、黒褐色の鉄釉が施釉される。素地は灰色で、ざっくりとしている。小さな片口が付くが、施釉の範囲から香炉とした。24は口径 8.6cmで、素地は灰色で比較的緻密である。釉はオリーブ黄色を呈する。

25は口径 9cm、底径 8.2cm、器高 4.5cmである。素地は灰白色で、堅緻である。釉は明緑灰色呈して、流れやすく体部下端に釉溜がある。断面には漆による補修痕が認められる。26は袴腰香炉に含まれる可能性も有るが、素地は灰白色で、やや緻密である。釉はオリーブ灰色を呈する。

II 袴腰香炉 (27~30)

袴腰香炉は4点とも頸部に釉溜が認められ、27以外はほぼ似た大きさである。

27は口径約 8.6cm、腰部径約 9cmである。素地は灰白色で、比較的緻密である。釉は光沢のある淡緑色を呈する。内面の露胎部にはぶい黄橙色を呈する。28は口径10.6cm、腰部径11cmで、27と同様に腰の張りが強い。素地は灰色で、堅緻である。釉はオリーブ灰色を呈する。29は口径約 10.8cmで、腰の張りが弱くなっている。素地は灰色で、釉は光沢のあるオリーブ黄色を呈している。30は口縁部径約12cm、腰部径約11.2cmである。素地は灰色で、緻密である。釉は光沢のあるオリーブ灰色を呈する。腰が潰れ気味で、口唇部を外へつまみ出している。

4点の袴腰香炉の中で、27・28は腰が球形に近く、口径に対して腰部径が大きくて、口縁が外反している。しかし、30は腰が潰れ口径に対して腰部径の方が小さくなり、口縁のつまみ出しが顕著である。29はこの変遷過程を示すものである。また、鉄釉をかけた小型の香炉も1点出土している。

瓶 (第25図-1~4)

1・2は瓶子の口縁部である。1は口径 4.6cmで、蓋受けの稜は低い。素地は灰色で、やや緻密である。釉はオリーブ灰色を呈する。2は口径 4.2cmで、鏝状の蓋受けは張付である。3は最大胴部径約17.6cmの肩部片である。素地は灰色で、比較的緻密である。釉はオリーブ灰色を呈する。4は底径11.6cmの底部片で、外面下端に二条の沈線が巡る。

5は黒褐釉で、高台径約11.6cmである。素地は灰色で、釉は畳付を含めて全体に均一に施釉されている。器形は四耳壺になる可能性がある。

筒形容器（第25図－6）

6は底径16cmとやや大型の製品である。素地は灰白色で、やや緻密である。釉は白色に変色しているが、底部近くまで施釉される。底部中央に糸切り痕を残すが、その他は丁寧な削りである。

茶入（第25図－7）

茶入は舶載品と瀬戸系陶器が各々1点出土した。7は肩衝茶入である。肩部径5.3cmで、胴部にいたり径が増す。素地は灰色で、縦織で精選されている。釉は茶褐色で、薄く施釉される。

(2) 珠洲焼（第26・27図 図版－23）

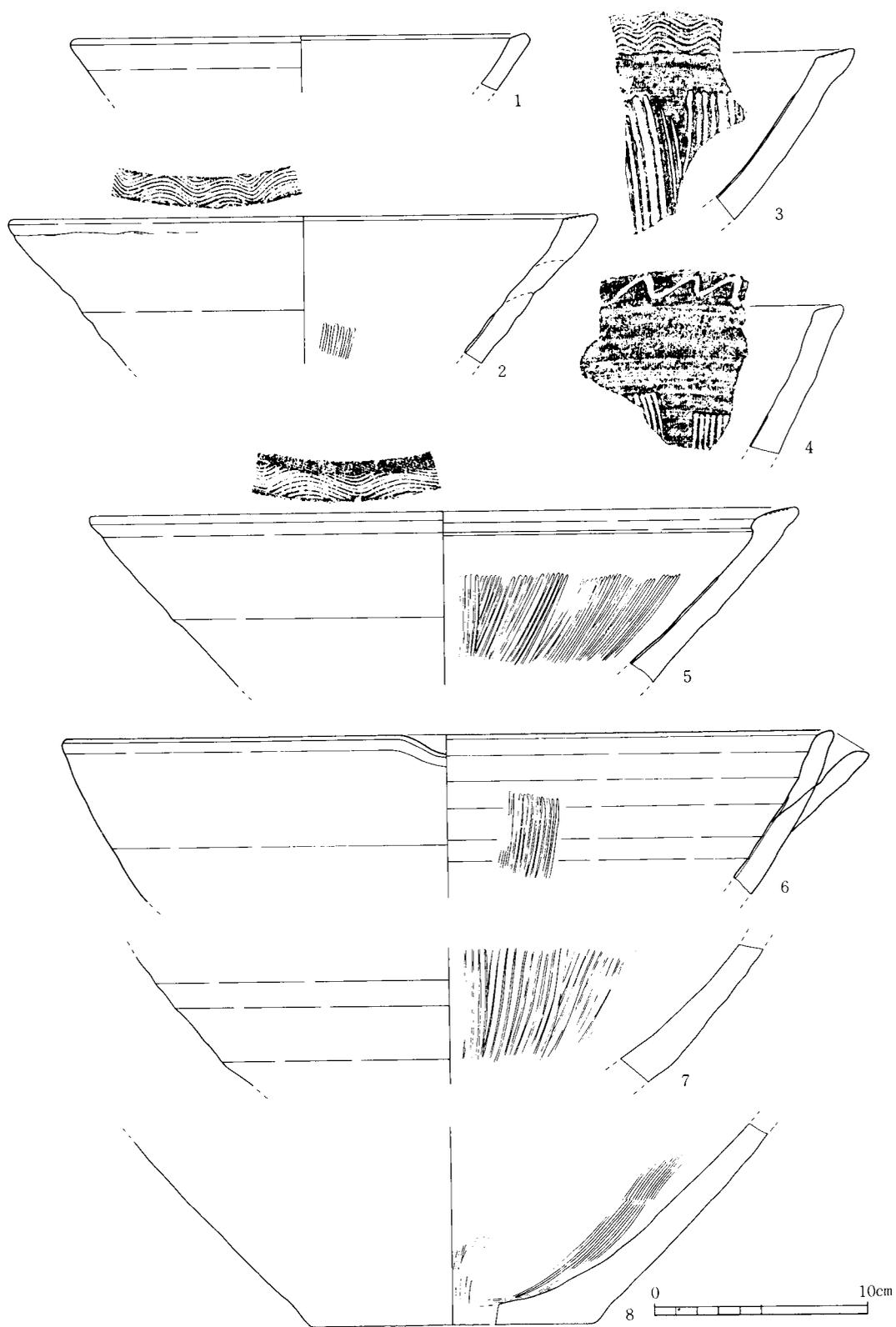
珠洲焼は片口鉢、壺、甕の三器種とも出土したが、器形が窺い知り得る破片を中心に図示した。したがって甕の胴部片などは除いた。

片口鉢（第26図－1～8、第27図－1～4）は、大・中・小と色々出土した。1は口径21.4cmと小型の鉢で、片口鉢の一種であろう。器面は暗灰色を呈するが、胎土は暗緑灰色を呈して、少し粗い。2は口径27.6cmで、口縁内面に波状文が入る。おろし目は間隔を置いて施されるが、単位は不明である。しかし、波状文から10本以上であると考えられる。胎土は暗青灰色を呈して粗く、砂が目立っている。3は中層面にて瀬戸系陶器の平碗（第24図－5）と併に出土した。おろし目は約3.1cm幅で、8本と少し粗い。胎土はオリーブ灰色を呈して、焼成は良い。4は旧河川の底から柿経と一緒に出土した。口縁内面の波状文は一本である。胎土は灰白色に近く比較的堅緻である。5は口径33.2cmで、口縁部が嘴状を呈して内面に波状文が入る。おろし目は幅2.5cmの10本で、左回りに密に施される。胎土は暗灰色を呈して、少し粗い。焼成は良い。6は片口鉢で、口径36.1cmを計る。内面にはロクロ目を強く残すが、幅3.1cmの13本のおろし目が間隔を置いて施こされる。胎土は暗青灰色を呈して、緻密である。焼成も良好である。7の体部片は、荒いおろし目が幅2.5cmで7本左回りに施されている。胎土は紫色がかった灰色を呈して、やや粗い。8は底径13.6cmの播鉢で、内面は平滑になっている。おろし目は約3cm幅の11本で、間隔をおいて、やや波打つように施されている。胎土は灰白色を呈する。底部に穿孔らしき痕が認められる。

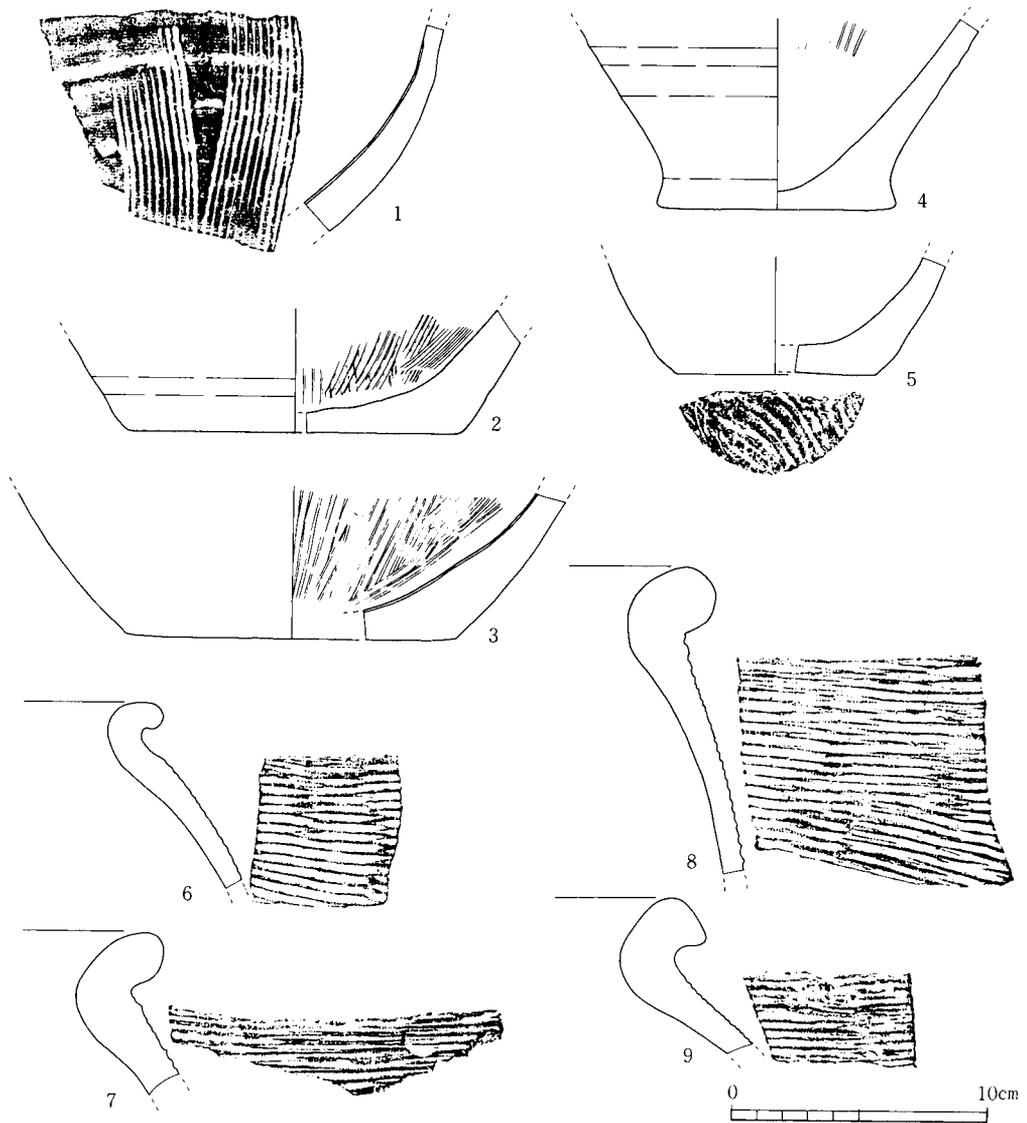
1（第27図－1）は、体部中程から直すぐに立ち上がるもので、おろし目は幅2.9cmの10本である。胎土は青灰色を呈する。焼成は良い。2・3は底部片である。2は底径13cmで、おろし目は2.4cm幅の8本である。胎土は青灰色で、焼成はあまり良くない。3は底径13cmで、粗いおろし目が施される。胎土は灰色を呈して良い。焼成も良い。4は底径が9.2cmで、高台状の造りした播鉢である。内面のおろし目などは磨滅して平滑である。器形的には壺を思わせる破片である。胎土は灰色を呈して良好である。焼成も良い。

壺（第27図－5）は、片口鉢や甕に比べると出土点数も少なく、小型のもので占られている。5は底径7.8cmで、小型の壺の破片である。胎土は暗灰色を呈して気泡の含みが多い。焼成は良い。外底には静止糸切り痕があり、内底面にはタール状のものが付着している。

甕（第27図－6～9）は、口縁部が明らかなものだけに限り図示した。胴部片や底部片は除いた。6はやや小型の甕で、口縁部は薄手で大きく外屈している。外面の叩きは、3cm当り8本で浅い。胎土はやや青味おびた灰色を呈して、密である。焼成も良いが、断面はサンドイッチ状を呈する。7は器壁が厚目である。外面の叩きは、3cm当り約9本である。胎土は灰色を呈して、気泡の含



第26图 珠洲烧実测图(1) (1/3)



第27図 珠洲焼実測図(2) (1/3)

みが目立つ。焼成は並である。8は中甕程の破片である。口縁部は玉縁状を呈して、内面も良く削られて器壁は薄い。外面の叩きは、3 cm当り8本である。胎土は灰色を呈して、砂粒の含みも少なく密である。内面に黒漆状のものが付着している。9は口縁外面が面取りされている。外面の叩きは、3 cm当り10本である。胎土は青灰色を呈して、緻密である。焼成は良好で、口縁部などは暗灰色で光沢がある。口縁内面に打撃痕のような剝離が認められる。

上記の遺物の中で、第26図-2の播鉢は包含層の上位から出土し、第27図-9の甕は上層の灰色砂層から出土した。また、その他の破片は包含層の下位から出土したもので、第26図の7と第27図の8は、地山面の遺構から出土した破片と接合された。

(3) 越前焼・加賀古焼 (第28図 図版-24)

越前焼や加賀焼は器種的には、大甕を中心として出土している。しかし、その識別は胎土の観察によるもので、図示した破片も今後変わる可能性がある。

越前焼 (第28図-1~3、5~10、12、14、15)

壺 (第28図-1~3) は、珠洲焼に比べ出土個体数が少ないものである。1の小型の壺は、頸部径が8.7cmを計り、肩にへら描きの記号がある。胎土は赤茶褐色を呈して、砂粒の含みが少ない。2は胴部径が16.9cmを計る。胎土は灰色で、緻密である。3は底部片である。底径は10cmを計り、胎土は灰色である。焼成は良い。

片口鉢 (第28図-9・10) は、少なくても挿鉢などは数点程である。ここでは、二点図示した。9は口径約15cm、底径約8.5cm、器高6.2cmの小鉢である。口縁及び底部は薄手に仕上げられている。体部外面の削りは粗く、内面には降灰釉が全面に付着している。胎土は灰色を呈して、砂粒の含みも少なく密である。断面に補修痕がある。10は高台付の鉢で、径は約7.6cmを測る。高台は張り付けである。内底部はやや平滑であるが、おろし目などは認められない。胎土は灰褐色で、砂粒の含みが多い。また、外底面の調整は不十分で、凹凸が著しい。

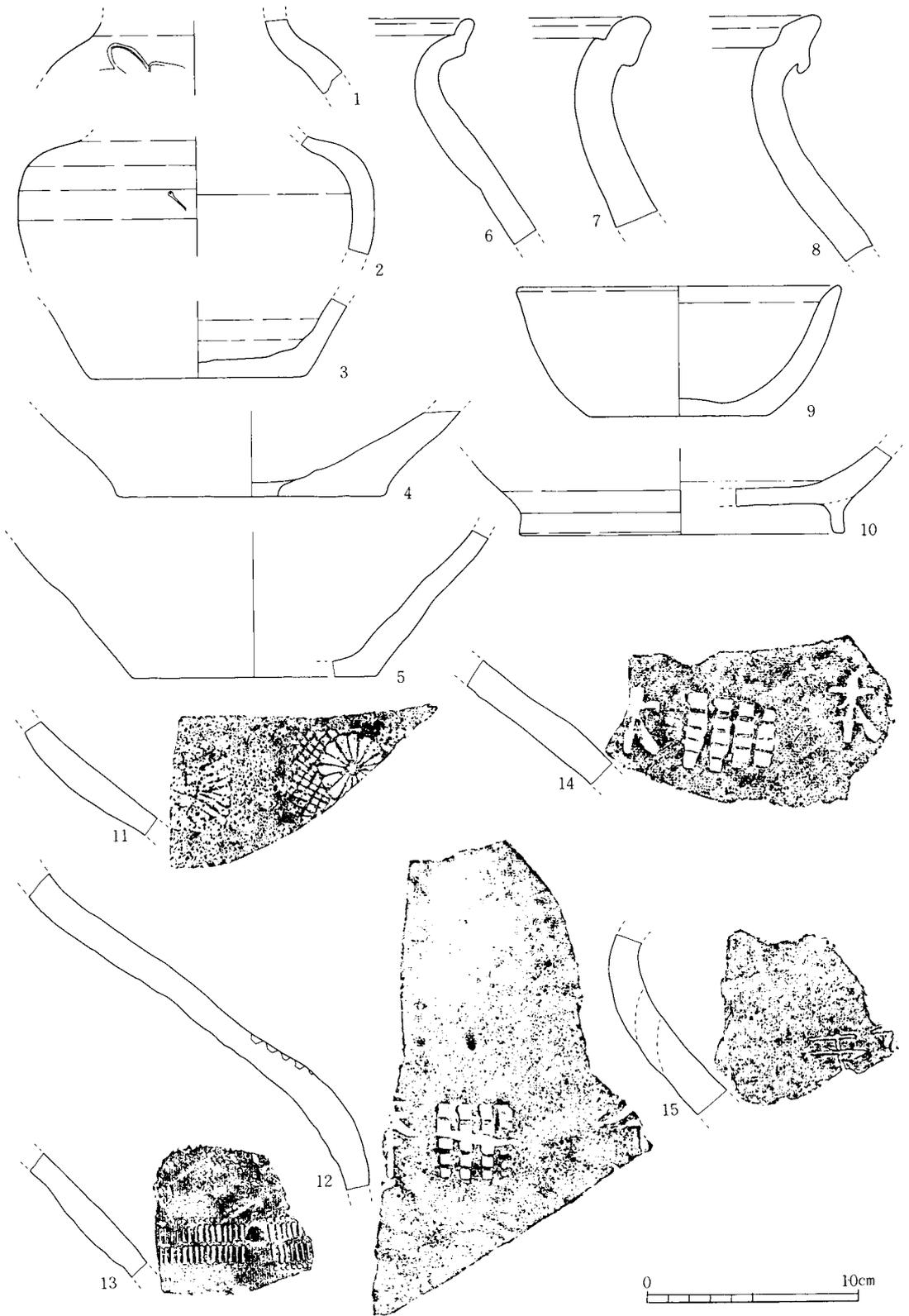
甕 (第28図-5~8、12、14、15) は、大型のものが多いので、口縁部と肩部を図示した。5は小型の甕であろう。底径は11.6cmを測る。胎土は灰色を呈して、砂粒の含みも少ない。内面には黒漆状のものが付着している。6は口縁部の造りが弱い。外面には降灰が付着するが、内面にはない。胎土は暗茶褐色を呈して、砂粒の含みが多く粗い。7は口縁外面のナデは弱く、内面に凹線が入る。胎土は灰を呈して密である。器面は内外共に暗茶褐色を呈して光沢がある。8は口縁外面のナデは強く、内面に凹線が入る。胎土は口縁部が暗灰色の砂粒の含みが多いものに対して、頸部周辺は灰色で砂粒の含みは少ない。内面には黒漆状のものが付着している。12は肩部に「奉」と格子文のスタンプが施文されている。胎土は灰色を呈して、砂粒の含みが少なく密である。外面には降灰釉がかかり、内面には黒漆状のものが付着している。14は「本」と格子文のスタンプが施文されている。胎土は灰色で、砂粒の含みが少ない。内面に黒漆状のものが付着している。15はへら描きの記号が入る。胎土は茶褐色を呈して、砂粒の含みが多い。

越前焼は珠洲焼などに比べて、焼成が良いものが多い。そして、甕などの内面に黒漆状のものが付着している破片も多い。

加賀古焼 (第28図-4・11・13)

加賀焼は各器種とも少ない。ここでは甕を3点図示した。4は底部が穿孔されていたものである。胎土は灰色で、砂粒は少なく密である。外底には黒漆状のものが、内面にはススが付着している。11は斜格子文と菊花文を組み合わせたスタンプが施文されている。胎土は灰色である。外面には降灰釉が付着している。13は樽子風の格子スタンプである。胎土は灰色を呈して、砂粒の含みが少なく密である。外面は暗灰色で光沢がある。焼成は良い。

11と13に施文されているスタンプは、加賀焼のⅢ・Ⅳ期に見られるものである。



第28図 越前焼・加賀焼実測図(1/3)

(4) 土師質・瓦質土器 (第29・30図 図版一24・25)

土師質土器 (第29図 図版一25)

今回の調査で出土した土師質土器は、その整形技法と調整から4類に分類できる。その中で、I～III類は地山面の遺構から出土しているが、IV類は上・中層面からの出土であった。

I類 (第29図一17)

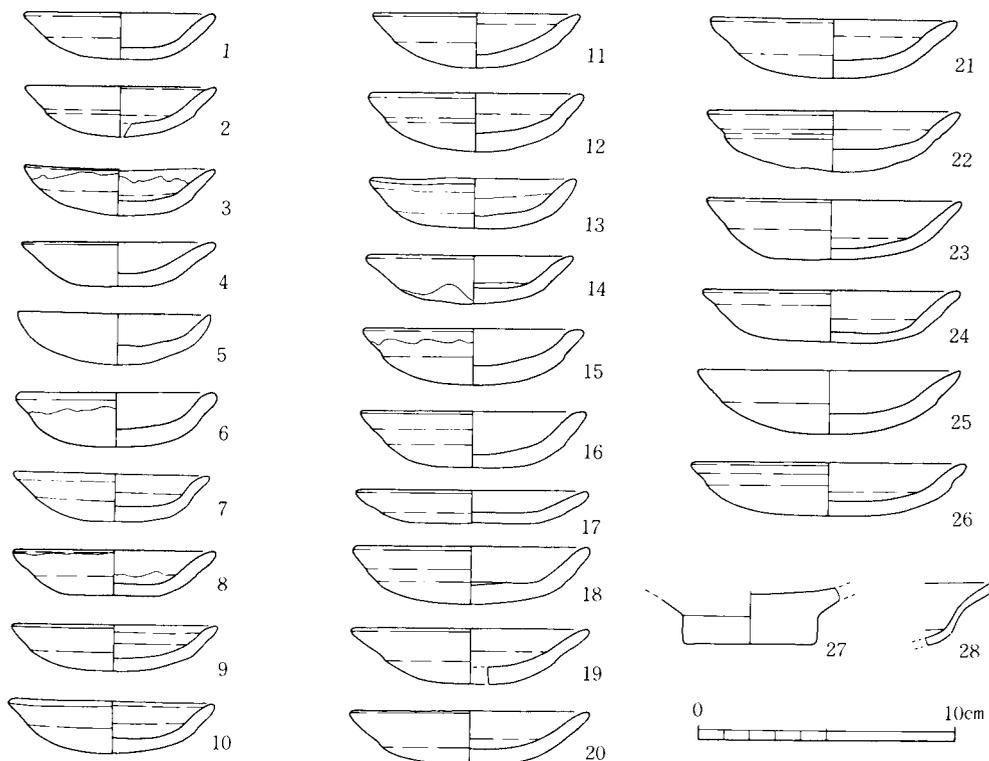
I類は地山面の遺構から数点出土したものである。その整形は、円板状に整えた粘土の端部を内湾させて、口縁部と内底にナデを施している。器壁はほぼ一定で、底の指押えは弱く、ナデは丁寧である。胎土は非常に細かくて、焼成も良好である。色調は橙褐色を基調として、明るいものが多い。口径は9cm前後であるが、器高は1～1.5cmと低い。出土品は小型が多くで、大型のものは数点しか認められなかった。

II類 (第29図一3・8・18・19・21・23・24)

II類は手づくねによる整形を行い、平底のものである。一般に底に指押えの痕が残り、平底であるが器面に凹凸がある。調整は内底を静止の横ナデをした後に、口縁部に回転横ナデを施している。口縁部外面の稜線はきわめて弱い。器形としては大・中・小の三種が有り、器壁の厚さもほぼ一定である。口径は大型のもので約14cm、中型で約10cm、小型で8～9cmである。胎土はI類と同様に細かいが、砂粒の含みが認められる。焼成は良好で、色調はI類とほぼ同一である。

III類 (第29図一1・2・9・10・11～14・20・22・25・26)

III類は手づくねを基本とする丸底のものであるが、一部に型押し的な所が認められる。底の指



第29図 土師質土器実測図 (1/3)

押えは、外底には残るが、内底には認められない。調整は内底の横ナデが無くて、口縁部を回転横ナデにて引き出している。外面には横ナデの稜が強く残り、口縁部はほぼ丸味を呈して、歪みが少ない。大・中・小の三種があり、大型で10.5cm、小型で7.5cm程である。胎土はやや粗いが、焼成は良い。色調は明オリーブ灰色を主体としている。

Ⅳ類（第29図—4・6・7・15・16）

器形的には丸底で、口縁部の回転横ナデにより、外面に強い稜をもつタイプ（Ⅳ—1・6・15・16）と、丸底であるが底に歪みがあり、横ナデにより口縁部を強く引き出すタイプ（Ⅳ—2・4・7）がある。両タイプとも口径が7.5～8.5cm程で、大型のものは出土していない。胎土はやや粗くて、砂粒の含みが多いが、焼成は良い。色調は灰オリーブを主体としている。Ⅳ—1には燈芯油痕が有るが、Ⅳ—2タイプには無い。

その他（第29図—27・28）

27は底部が極めて厚くて、回転糸切痕が残っている。12世紀頃の小皿の底部片と考えられる。

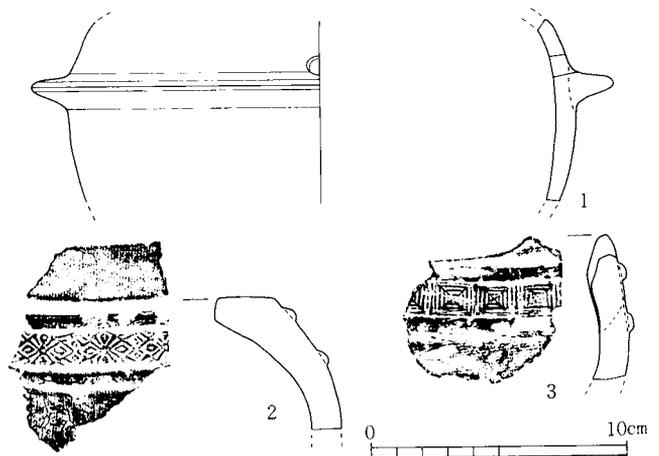
また、28は破片の為に全形を知り得ないが、器壁は薄く硬質で、叩くと金属的な音をする。胎土はやや粗いが、色調は灰白色を呈する。鎌倉地方にて出土が知られている。「白かわらけ」に該当するとも考えられる。

土師質土器に関しては、能登の穴水地域を中心とした編年試案⁽⁴⁾と、加賀の大聖寺地域を中心とした編年試案⁽⁵⁾の二者が示されている。両者とも12世紀後半から16世紀までを対象としているが、中世集落の調査例の増加により、細部に関して修正・補強が求められている。なお、本遺跡出土の土師質土器は、14世紀後半から15世紀中頃の所産と考えられる。

瓦質土器（30図 図版—24）

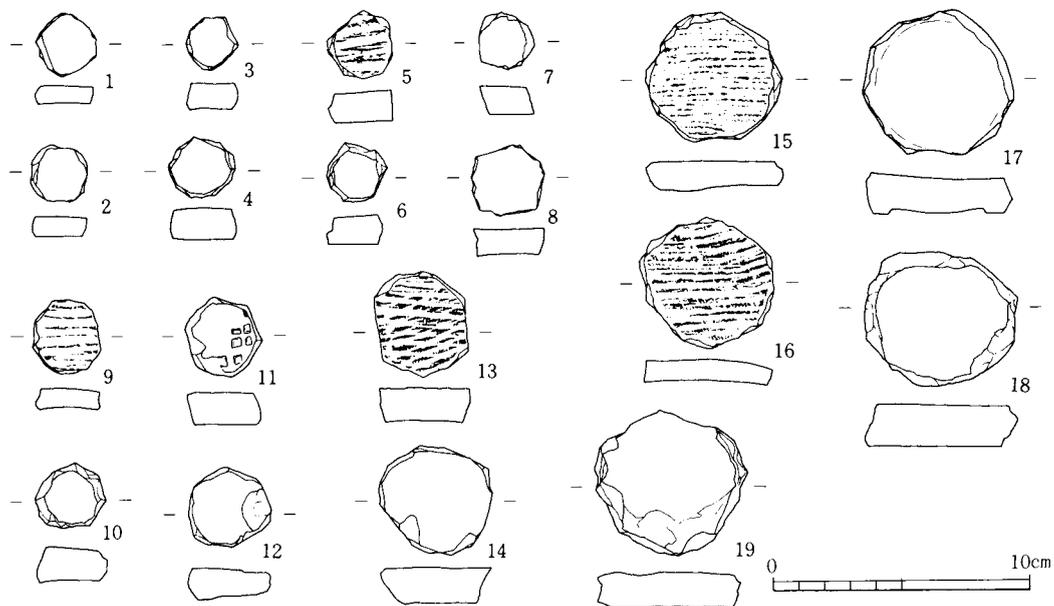
瓦質土器は火鉢等の破片が5点で、瓦器は羽釜の破片が3点出土した。

1の瓦器は茶釜形態を呈する羽釜である。ツバは水平に伸びて、穿孔がある。器面の調整は外面が粗いナデで、内面は横方向のハケ調整が施されている。色調は褐灰白色を呈する。2・3は火鉢の破片である。2は灰色を呈して、外面はへら磨きにより平滑で、光沢がある。外面に二本の凸帯を張り付けて、その間に菱形のスタンプ文が施される。3は波状口縁で、淡赤橙色を呈する。焼成は良い。スタンプ文は2と同様に凸帯を張り付けた後で施している。



第30図 瓦質土器実測図（1/3）

県内で瓦質の火鉢などは、各地の中世集落址の発掘などで出土しているが、瓦器の羽釜はその出土例が少ない。現在までの調査では、志賀町中村畑遺跡⁽⁶⁾、羽咋市寺家不動院遺跡⁽⁷⁾と本遺跡の第1次調査の折に出土している。これらは、全て畿内からの搬入品と考えられるものである。



第31図 円板状陶製品実測図 (1/3)

(5) 円板状陶製品 (第31図 図版-25)

中世集落遺跡の発掘調査では、出土した陶磁器片の中で、二次的な打ち欠きを加えて、円板状に形を整えたものが出土する。その数は多いとは言えないが、一般的な出土品である。県内の中世集落からも、その出土が知られているが、詳細な検討や報告が行われていないのが現状である。

今回の発掘調査で出土した円板状陶製品は、約200点程であったが、その一部を図示したので、説明を加えたい。なお、穿孔や断面部分に研磨を加える例はなかった。

今回出土した円板状陶製品は、その形状から大・中・小に3分してみた。小型は1～12であるが、その中で8～12はやや大きいものである。短径は1.8～2.8cm程である。1・2は両面に灰釉がかかる瀬戸系陶器片を利用しているが、5・9は珠洲で、その他は越前・加賀を利用している。中型は13・14で、短径は3.5～4cm程である。13は珠洲の壺で、14は越前・加賀の甕を利用したものである。大型は15～19で、短径は4～5.5cm程である。17は瀬戸系の平碗の底部で、18は盤の底部を利用したものである。15・16は珠洲の壺で、19は越前・加賀の甕を利用したものである。重量は小型のもので、5～16gであり。中型は27～36g、大型は29～70gとバラツキが著しく、重量は形により変化するが、大きな意味をもたないようである。また、利用している陶磁器は約80%が越前・加賀で、約15%が珠洲、残り5%が瀬戸系陶器であった。

円板状陶製品の性格については、元興寺極楽坊遺跡の考察⁽⁸⁾では、冥銭説、玩具・遊戯具説、めんこ説を列記しながらも、「何らかの信仰資料」ではないかと結んでいる。その後は鎌倉の各遺跡の報告や一乗寺谷朝倉氏遺跡の報告⁽⁹⁾等で紹介されているが、その性格の解明には至っていない。そして、本遺跡から出土した円板状陶製品は、上記の三説の中のおはじきや石蹴などと考える玩具・遊戯具説が可能性として上げられるが、その他に数量計算等に用いる数え玉としての用途が考えられる。算盤が日本で普及したのは16世紀頃⁽¹⁰⁾とすると、算盤以前の計算方法として、このような円板状陶製品を桁別に用いた計算方法の存在も可能性として考えられる。

第4節 石製品

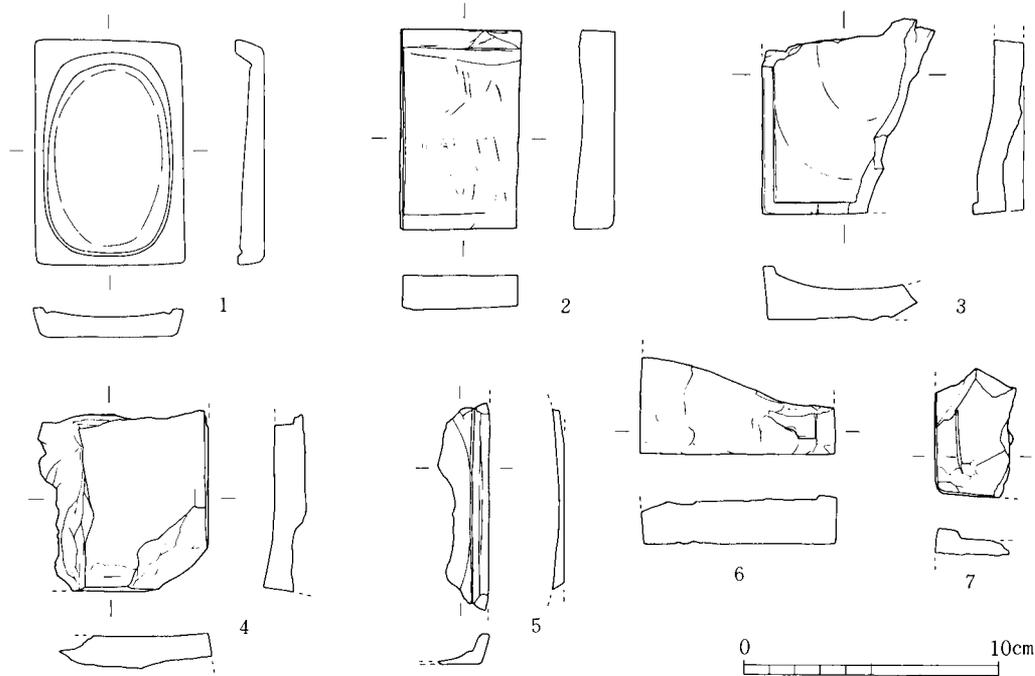
石製品としては、硯、砥石、石鍋、行火などが出土した。それらは、石製品としては小型の物ばかりで、石臼や仏塔など比較的大型の遺物は検出されなかった。

(1) 硯 (第32図 図版—25)

硯は全部で7点出土したので、全てを図示した。形態は長方形で、石質は粘板岩、細粒砂岩、シルト岩の三種類であった。

1は縦8.8cm、横5.8cm、厚さ1.1cmの完形品である。重量は118gである。陸部と海部の境目は摩滅して失なわれている。石質は黒色の粘板岩で、部分的に墨痕を残す。旧河川底より柿経などと共に出土した。2は縦7.8cm、横4.7cm、厚さ1.6cmである。砥石として再利用されたために、両側の境は欠失しているが、海部の窪みが残る。石質は青灰色の細粒砂岩もしくはシルト岩である。3は陸部の破片である。陸部は摩滅のためにレンズ状に窪む。石質は赤褐色の細粒砂岩である。地山面検出の柱穴より出土した。4は陸部右側の破片で、石質は淡燈色の細粒砂岩である。5は海部側面の破片で、石質はにぶい橙色のシルト岩である。海部の窪みは著しく、最小厚0.1cmである。6・7は陸部の破片である。石質は6が褐灰色のシルト岩で、7は黒褐色の細粒砂岩である。

硯の石質から1の粘板岩以外の硯に使用されている石材は、地元金沢周辺にて求めることが出来るものであり、地元で生産された可能性が高い。しかし、1の硯に使用されている石材は、地元には無く、近畿地方にて産出することが確認されているものである。この事から出土した硯の生産地を、畿内地方と地元の二者に分けて捉える事も出来るが、現在の資料では、判断するには



第32図 硯実測図 (1/3)

至らない。今後の資料の増加とその分析を待ちたい。

(2) 砥石 (第33図、図版—26)

出土した砥石をその石質と形状から荒砥石、中砥石、仕上げ砥石の三種類に整理してみた。

各々の出土点数は、荒砥石6点、中砥石11点、仕上げ砥石13点で、総計30点であった。ここでは、その中で主な14点を図示した。なお、石質は別表に示した。

荒砥石 (第33図—1～3)

形状は砥石の中でも最も大きく、石質も粗粒砂岩を主体とするが、粗い頁岩も利用されている。

1・2は粗粒砂岩を利用した砥石である。共に四側面に研ぎ面が広がる。特に2などは摩滅により窪んでいる。共に研ぎで細くなった先端部を欠損している。共に中層面の第3号溝より出土した。3は表面にのみ研ぎ面が残っている。地山面の第4号土坑より出土した。

中砥石 (第33図—4～8)

形状は長方形の棒状を呈して、石質は全て凝灰岩である。

4は長さ12.3cmの完形品である。断面が正方形を呈して、四面に研ぎ面が認められる。第3号溝より出土した。5は横幅7cmで、表裏両面に研ぎ面がある。形状は断面長方形の板状であったと考えられる。上層面の鉄滓群中より出土した。6は横幅3.9cmで、表裏両面に研ぎ面があるが、表面の方が摩滅が著しく平滑である。4と同じく第3号溝から出土した。7は横幅4cmで、断面が平行四辺形を呈する。研ぎ面は四面にみられる。8は横幅3.3cmで、断面が正方形を呈する。細くなった先端部を欠損している。研ぎ面は三面で、鉄滓群中より出土した。

仕上げ砥石 (第33図—9～14)

仕上げ砥石の形状は全て板状である。大きさは、横幅3～3.7cmで、厚さは0.5～0.7cmである。石質は全てが成層状凝灰質泥岩である。研ぎ面は表裏二面で平滑である。これら仕上げ砥石は、形状、石質、研ぎ面と共通していると同時に、出土層も地山面の遺構に集中しているのである。そして、13・14の砥石のように木葉などの落書きも認められる。

砥石は中世の集落的な遺跡の発掘調査では、個体数は少なくとも一般的な出土品である。それらが全て上記のように分類できるものではない。しかし、上層面にて検出した鍛冶台から窺える鍛冶には、製品の調整と仕上げのためにも砥石は必要不可欠な物である。それは、出土した鉄製品からも言える。鉄製品の主体が釘などの小物が中心でも、その完成には必ず砥石による研ぎが行なわれる。したがって、上記の分類がそのまま当時の砥石の使用方法に基づくものでは無いが、砥石が石質と形状から三分類されていたと推定される。

そして、これらの砥石は鉄製品の消費の過程で使用されたのではなく、鉄製品の生産(鍛冶)の過程で使用されたものであろう。

また、砥石の石材は手取扇状地の礫層に求めることができる。特に仕上げ砥石の成層状凝灰質泥岩は、手取川中流の石川郡鳥越村の釜清水(旧手取遊園地)にて産出する事が知られている。



第33図 砥石実測図 (1/3)

第1表 砥石の石質一覧表

番号	石質	番号	石質	番号	石質
1	緑色凝灰岩質粗粒砂岩	6	緑色凝灰岩	11	成層状凝灰質泥岩
2	粗粒砂岩	7	凝灰岩	12	成層状凝灰質泥岩
3	黒色頁岩	8	軽石凝灰岩	13	成層状凝灰質泥岩
4	凝灰岩	9	成層状凝灰質泥岩	14	成層状凝灰質泥岩
5	凝灰岩	10	成層状凝灰質泥岩		

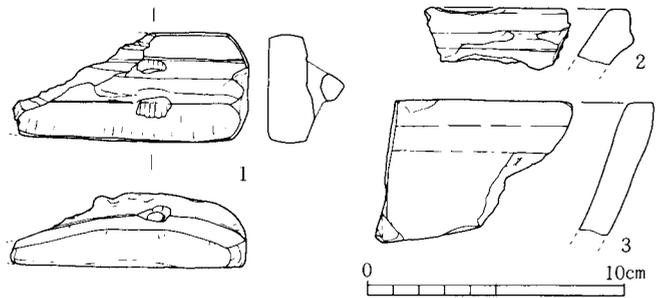
(3) 滑石製品 (第34図、図版一26)

滑石製品は石鍋片とその加工品である。出土点数は6点で、約4個体が出土した。1・3は破損した石鍋片に二次的な加工をしたもので、特に1はその形状から「文鎮」と考えられた。

1は石鍋の鏝の部分加工したものである。長辺約10.3cm、短辺4.3cm、高さ3cmの製品である。約 $\frac{1}{4}$ を欠損している現重量が、134gであるので、以前は180g程であったと推定される。鏝の部分は旧形を保つが、加工時に穿孔がなされている。また、鏝の下半にはススが付着して、黒色を呈している。旧河川底から柿経や硯(第32図一1)などと共に出土した。

2は口縁片で、鏝の削り出しは弱く、加工痕はみられない。3は口縁片を利用して、鏝を削り落して歪んだ板状に加工している。また、胴部片の内面に漆状のものが付着した破片も出土した。

今回出土した1と3の再利用は、その形態から文鎮と温石と考えている。石川県内でも近年滑石製の石鍋や温石が、少量ではあるが出土している。それは、加賀市永町ガマノマがり遺跡⁽¹⁾、同市勅使館遺跡⁽²⁾、金沢市柱遺跡⁽³⁾、羽咋市寺家遺跡⁽⁴⁾などである。石鍋は瓦質の羽釜と同様に、当時の煮沸形態を窺える数少ない資料である。



第34図 滑石製品実測図 (1/3)

(4) 行火・火打石 (第35図 図版一26)

石製品の中でも硯や砥石に比べ大型の製品として行火がある。行火は、暖房用具の一つであるが、今回出土したものは全て破片で、(総破片数46点、約5個体)全形を知り得る製品は検出されなかった。ここでは鶴来町白山遺跡出土の行火⁽⁵⁾を参考にした上で報告したい。

白山遺跡の行火は、白色を呈する凝灰岩をノミ状の工具を使用して彫り上げたもので、前面及び側面形は台形を呈する。高さは15cm前後、最大横幅18cm前後の規模である。前面には、やや上向きの口が、大きく長方形に開き、内部に小さな室を削りぬいている。四方の壁は、ほぼ一定の厚さに仕上げられているが、外面の平滑に対して、内面の整形は粗く、多くのノミ状の工具痕を残している。底の四隅には、台脚を削り出している。

本遺跡出土の行火も規模の差はあるが、全て白山遺跡の行火と同一形態の製品と認められるものである。

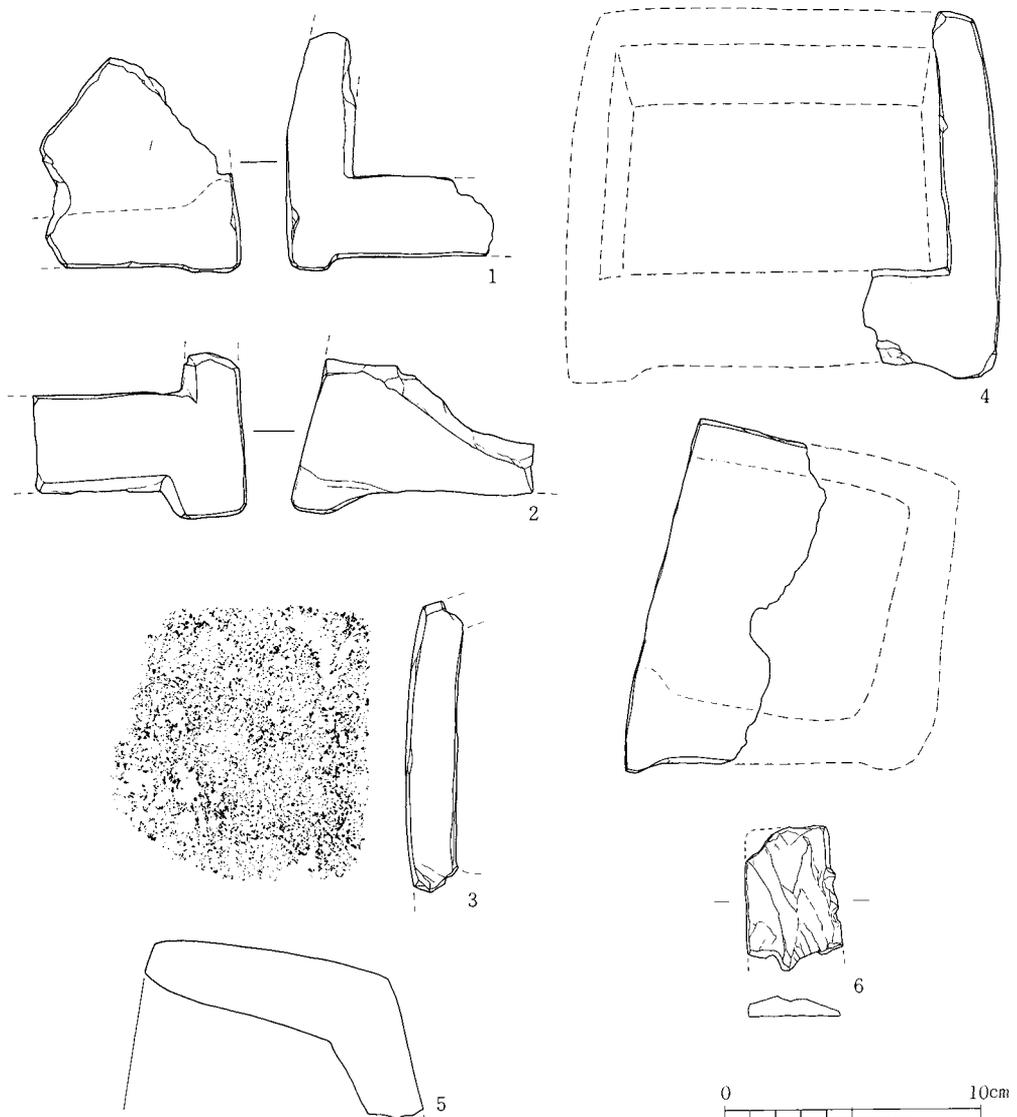
1は行火の右前方下半の破片で高さ1.2cmの台脚を削り出している。前面の堤も幅2.5cmと厚く、行火の中でも大型の製品であろう。2は左前方下半の破片である。左側壁の内湾が強いが、前面の堤は、上幅1cm、高さ1cmと1に比べ小さい。台脚も高さ0.5cmと小さく削り出したものである。3は行火の左側壁片である。外壁は比較的平滑に仕上げられるが、内壁は幅2.1cmのノミ状の工具痕が残る。内室の奥行きは、最大9cm程とみられる。4は白山遺跡の出土品を参考にして、旧形を復元した右前側部片である。側壁高14.2cmを計るが、天井部はややドーム状を呈すると考えられる。台脚と前面の堤は小さく削り出されている。2・3と同様に小型の行火である。

5は行火の天井部片である。最大厚 3.4cmと極めて厚手の製品である。しかし、室内の奥行きは約8cmと浅く、前面の口が上方へ開いている。壁面は内外共に火熱を受けて、赤色化している。

6は火打石として使用されたと考えられる石片である。最大幅 3.8cm、最大厚 0.8cmで、板状を呈する。下半は欠失するが、右側面に使用痕と見られる剝離がある。石質は珪質岩と硬質である。火打金(第39図-14)と共に使用された発火具であろう。

行火も火打石も火の使用に関する石製品である。行火は瓦質土器の火鉢と同様に暖房用具に含まれるが、その形態は大きく異なる。形態の違いは、使用方法の違いに起因するものと思われる。

県内における行火の検出例は、前述の白山遺跡と敷地町後方遺跡¹⁰だけと少ない。敷地町後方遺跡のものは、福井県一乗谷朝倉氏遺跡で一般的に見られる上方に開口し、蓋が付く行火であることから、地方により形態の違いを生じていたことが窺い知られる。



第35図 行火・火打石実測図

第5節 土製品

土製品には土錘や鞆の羽口、るつぼなどが出土したが、鞆の羽口やるつぼは鍛冶関係の遺物であるので、ここでは土錘に関して説明を加える。

土錘（第36図、図版—27）

今回出土した土錘は約23個で、その中で完形を中心に18個を図示した。本遺跡が臨海的な位置に立地する事から漁網などの錘と考えるのが妥当であろう。また、その多くが地山面の遺構と包含層に集中している。これは、地山面にて検出した柱穴や土坑の性格を探る指標ともなる。また土錘の形状は管状であり、その製作も丸棒に粘土を巻き付けて、整えた後にヘラによるナデや板の上を回転させたりして調整したものである。孔の内面には丸棒を抜き取った時の擦痕が認められる。したがって土錘の分類の目安は孔径（丸棒）と重量（粘土量）に求めることになり。孔径に対する重量（重量／孔径、以下比率と略す）に基づき分類される。また、それに形態を加味することで、土錘はⅣ類6タイプに分類できる。なお、第2表の土錘の分類にて使用しているA・Bは同一タイプの中での軽重を示すものである。

Ⅰ類 形態的には長さ3.6～4.3cmで、細身のものである。土錘の中では最も小型のものである。

Ⅰ—(1) 1で孔径・重量とも最も小さいものである。比率は0.6である。

Ⅰ—(2) 2～5で形状はほぼ同一であるが、孔径と重量の違いからA・Bに分かれる。Aの2・L3は同一孔径で重量もほぼ同じである。Bの4と5は重量が少し違うが、孔径は同一である。

Ⅱ類 形態的にはⅠ類に近いが、孔径や重量が増大している。しかし、6と7とでは孔径が同一であるが、比重では7は6の倍以上である。

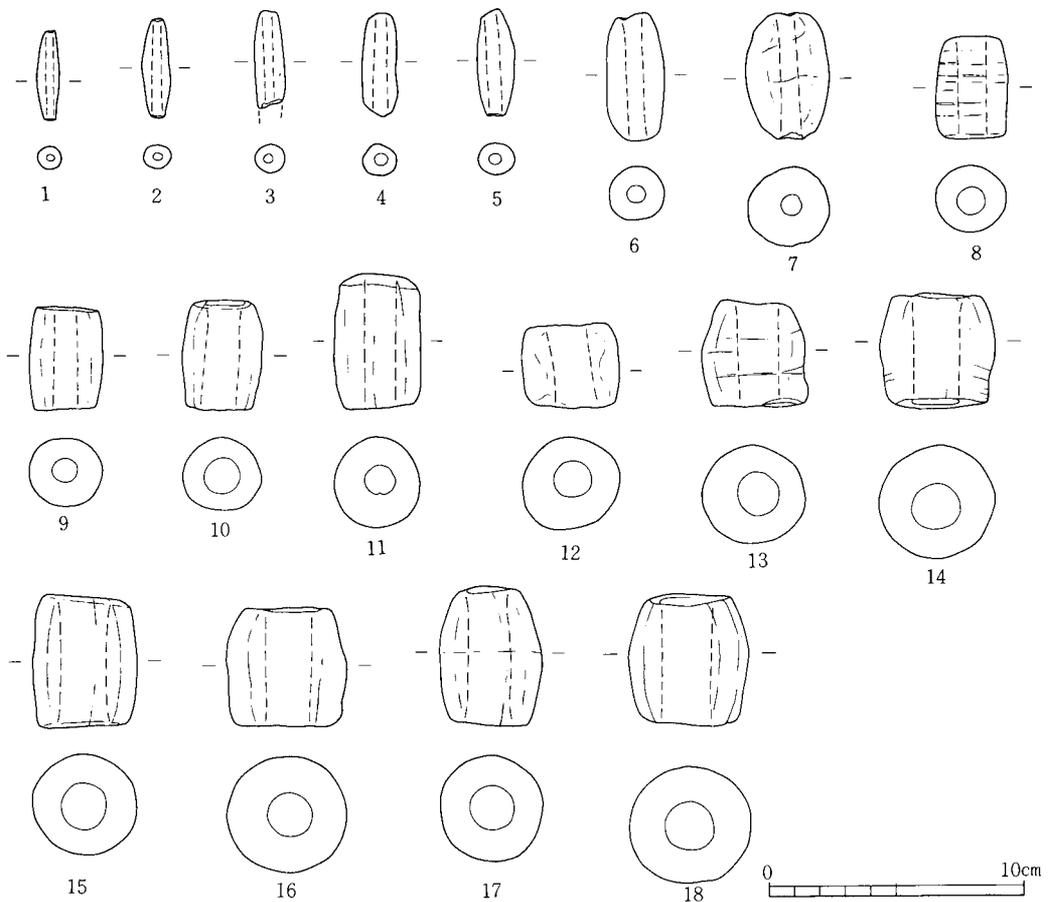
Ⅲ類 ほぼ管状を呈して表面の調整も良いが、孔径にばらつきがみられる。

Ⅲ—(1) 8と9は形状が似ているが、重量と比率の違いから二分される。

Ⅲ—(2) 10と11は(1)に比べて形状や重量が増大しているタイプで、直径や孔径がほぼ同一であるが、比率は倍以上の差がある。

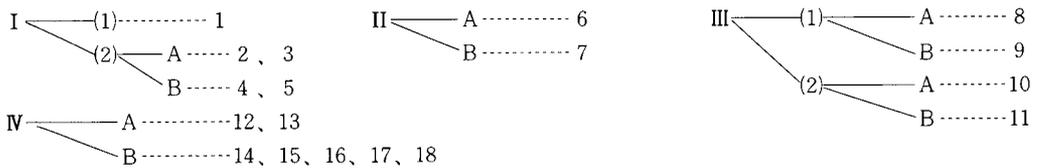
Ⅳ類 外面の調整が不十分で、歪みがあり外面の中程が張り出すタイプである。土錘の中では最も大きく重量もある。12は他のものより小さく比重も3.0と最も少ない。13～18は、重量や比重にばらつきがあるが、孔径はほぼ同一である。

石川県はその地勢から沿岸漁業が盛んに行なわれてきたが、中世にてもかなりの漁業が行なわれていたことが予想される。しかし、県内で本遺跡以外に中世の土錘を知り得る資料は少ない。そのために対比できる資料は、広島県草戸千軒町遺跡¹¹⁾、神奈川県光明寺裏遺跡¹²⁾、秋田県後城遺跡¹³⁾などが、臨海的な集落のものとして上げられる。特に草戸千軒町遺跡の土錘の分類は数少ない土錘の研究として注目される。そして、本遺跡と上記3遺跡の土錘を対比してみると、本遺跡の特色が少しはみえてくる。それは、形態的には全てのものが管状である点と、Ⅳ類に代表される比較的重くて、作りの粗い土錘の個体比率が高い点であろう。しかし、これは漁法および漁場の地形などの他に地方色の表われとして捉えることもできよう。



第36図 土錘実測図 (1/3)

番号	全長(cm)	直径(cm)	孔径(mm)	重量(g)	重量/孔径	番号	全長(cm)	直径(cm)	孔径(mm)	重量(g)	g/mm
1	3.6	0.9	3	2.0	0.6	10	4.3	3.2	14	31.5	2.3
2	3.9	1.2	4	4.1	1.0	11	5.4	3.4	12	64.7	5.4
3	(3.8)	1.2	4	(4.4)	1.1	12	3.3	3.9	15	46	3.0
4	(4.1)	1.4	5	6.4	1.3	13	4.2	4.1	17	53	3.7
5	4.3	1.5	5	7.2	1.4	14	4.6	4.6	19	74.7	3.9
6	5.1	2.2	8	19.7	2.5	15	5.3	4.1	18	78.8	4.4
7	5.0	3.2	8	(42.8)	5.6	16	4.7	4.8	18	87.0	4.8
8	4.0	2.8	11	25.5	2.3	17	5.5	4.1	18	70.5	4.0
9	4.1	2.9	10	31.8	3.2	18	5.2	4.8	19	87.5	4.6



第2表 土錘計測値一覧表と土錘の分類

第6節 金属製品

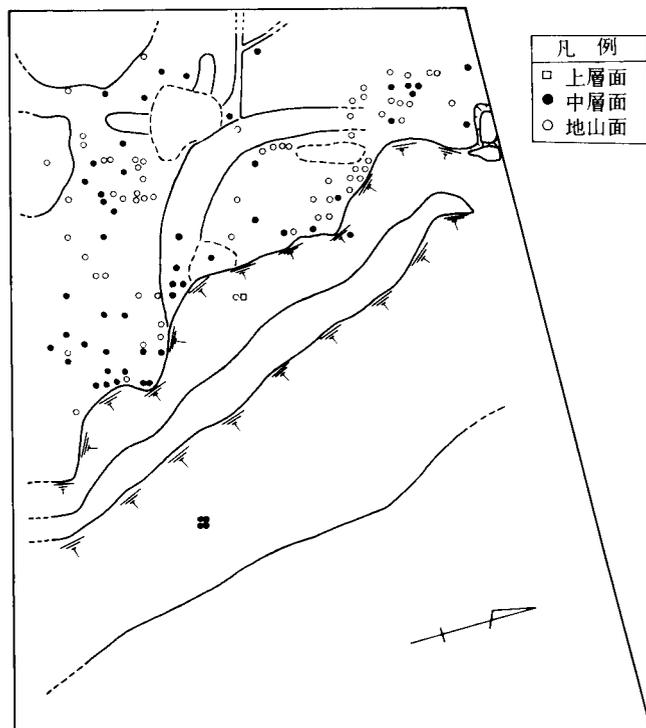
(1) 銅 銭 (第38図、図版一28)

今調査で検出した銅銭は161枚にのぼる。これらは遺構面積約100㎡の範囲から大体集中して出土している。出土状態は3層の面からそれぞれ検出されており、上層面から15枚、次の中層面では60枚、最後の地山面からは66枚である。第37図、銅銭出土位置図はあらかじめことわっておきたいが、この図は出土地点の明確なもの118枚(全体の73%)だけを図示したものであり、残りの43枚は地点が不明確なため図にはのせなかった。したがって完全な図ではないにしろ、ある程度の傾向性は窺えるものと考えられよう。

まず上層面からみると、東側斜面の上端付近に1枚の検出がある。図示していないが西南の第1号土坑覆土内から2枚が発見されている。その他の銅銭は包含層からの出土である。中層面では北から東へカーブして走る第3号溝跡の覆土内から5枚が検出されている。その第3号溝跡の北、東の両地点に14枚の出土があり、特に北地点の粘土面には7枚が集中して検出されている。第3号溝跡を境にして西南および東南の銅銭出土両ブロックの出土数は前者の2倍強に相当する31枚が検出されている。西南、東南両ブロックの間で第3号溝跡付近寄りの銅銭出土がみられない地点からは、約6点の荒砥石、中砥石が集中して検出されている。地山面になると北および南側にピット群の集中がみられ、それに比例して両群地点に出土数が多い点が特色である。

出土した銅銭161枚のうち判読可能銭が28種39書体で132枚(82%)みられ、判読不可能な不明銭が29枚(18%)である。判読可能銭132枚はすべて中国からの渡来銭であることから、不明銭もおそらく近隣諸国からの渡来銭と考えられよう。

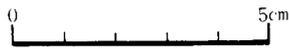
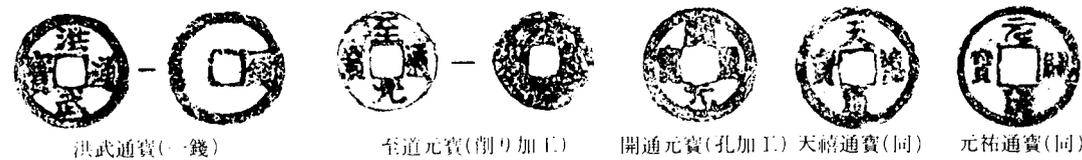
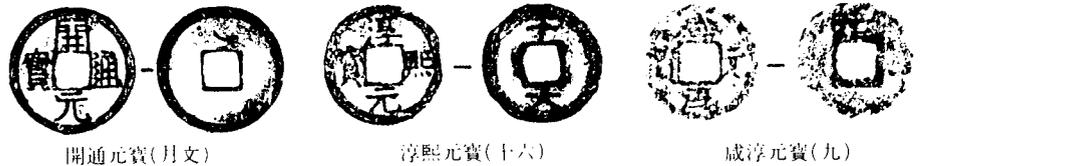
銅銭の初鑄年をみると、最古の銭は西暦621(唐・武徳4)年に鑄造された「開通元寶」であり、最新の銭は西暦1408(明・永楽6)年の「永楽通寶」である。鑄造国別銭貨の比率をみると、唐銭が22枚(全体の14%)、北宋銭が102枚(同63%)、南宋銭が2枚(同1%)、明銭が6枚(同4%)の数値である。さらに銭貨名別の比率を高い順に示すと、唐銭の「開通元寶」が21枚(全体の13%)、北宋銭の



第37図 銅銭出土位置図 (1/200)

第3表 銅銭出土一覧表

番号	銭貨名	時代	初鋳年(西暦)	書体	出土枚数								備考					
					包含層				遺構				小計	加工銭		切銭		その他
					上層	中層	地山	不明	ピット	土坑	溝	孔形		削り	部分切	半切		
1-R	開通元寶	唐	武徳4年以後(621~)	隸書	2	9	5	3	1	1	0	21	3				背上に月文	
2-R	乾元重寶	"	乾元2年以後(759~)	隸書	0	0	1	0	0	0	0	1						
3-K	太平通寶	北宋	太平興国元年(976)	楷書	0	0	0	0	1	0	0	1						
4-G	淳化元寶	"	淳化元年(990)	行書	1	0	0	0	0	0	0	1						
5-K	至道元寶	"	至道年間(995~7)	楷書	0	1	1	0	0	0	0	2	1					
-G	"	"	"(")	行書	0	2	0	0	0	0	0	2						
-S	"	"	"(")	草書	0	0	1	0	0	0	0	1						
6-K	咸平元寶	"	咸平元年(998)	楷書	0	0	1	1	0	0	0	2						
7-K	景德元寶	"	景德元年(1004)	楷書	0	0	1	0	0	0	0	1						
8-K	祥符元寶	"	大中祥符元年(1008)	楷書	0	1	0	0	0	0	1	2	1					
9-K	祥符通寶	"	"(")	楷書	0	1	1	0	0	0	0	2			1			
10-K	天禧通寶	"	天禧年間(1017~22)	楷書	0	1	0	1	1	0	0	3	1					
11-K	天聖元寶	"	天聖元年(1023)	楷書	0	1	2	0	1	0	0	4						
-T	"	"	"(")	篆書	1	0	0	0	0	0	0	1			1			
12-K	皇宋通寶	"	寶元2年(1039)	楷書	1	4	3	0	0	0	1	9	4			1		
-R	"	"	"(")	隸書	0	1	1	1	0	0	1	4	1					
-T	"	"	"(")	篆書	1	2	2	0	0	0	1	6				1		
13-K	至和元寶	"	至和元年(1054)	楷書	0	1	0	0	0	0	0	1						
14-K	嘉祐通寶	"	嘉祐元年(1056)	楷書	1	0	1	1	0	0	0	3						
-T	"	"	"(")	篆書	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1				
15-K	治平元寶	"	治平元年(1064)	楷書	0	2	0	0	0	0	0	2						
16-K	熙寧元寶	"	熙寧元年(1068)	楷書	0	1	0	0	1	0	0	2						
-T	"	"	"(")	篆書	2	3	0	0	0	0	0	5						
17-G	元豐通寶	"	元豐元年(1078)	行書	0	1	12	1	0	0	0	14						
-T	"	"	"(")	篆書	1	1	2	1	1	0	0	6						
18-G	元祐通寶	"	元祐元年(1086)	行書	2	1	3	0	0	0	0	6	1					
-T	"	"	"(")	篆書	0	2	4	0	0	0	1	7	2					
19-G	紹聖元寶	"	紹聖元年(1094)	行書	0	0	1	0	1	0	0	2						
-T	"	"	"(")	篆書	1	0	1	1	0	0	0	3						
20-T	元符通寶	"	元符元年(1098)	篆書	0	0	1	0	0	0	0	1						
21-T	聖宋元寶	"	建中靖国元年(1101)	篆書	0	1	0	0	0	1	0	1	1					
22-K	大觀通寶	"	大觀元年(1107)	楷書	0	0	0	0	0	0	0	1						
23-K	政和通寶	"	政和元年(1111)	楷書	0	0	1	1	0	0	0	2						
-T	"	"	"(")	篆書	0	1	0	1	0	0	0	2						
24-T	宣和通寶	"	宣和元年(1119)	篆書	0	0	2	0	0	0	0	2						
25-K	淳熙元寶	南宋	淳熙16年(1189)	楷書	0	1	0	0	0	0	0	1					背上下に「六」	
26-K	咸淳元寶	"	咸淳9年(1273)	楷書	0	0	0	0	0	0	0	1					背上に「九」	
27-K	洪武通寶	明	洪武年間(1368~98)	楷書	0	2	0	0	0	0	0	4			1		背右に「銭」	
28-K	永樂通寶	"	永樂6年(1408)	楷書	0	2	0	0	0	0	0	2				1		
	判読不明				2	12	9	6	0	0	0	29			1	6		
	合計				15	55		18	7	2	5	161	15	1	3	10		



注、(K)楷書, (G)行書, (S)草書,
(R)隸書, (T)篆書

第38圖 銅錢拓影 (2/3)

「元豊通寶」が20枚（同12%）、「皇宋通寶」19枚（同12%）、「元祐通寶」13枚（同8%）の順になっている。このような北宋銭の出土比率が高く、上記した各銭貨の出土数が多い点は全国の各遺跡からの出土例と大体同様の傾向を示している。

これら銭貨のうち背面に鑄印を施文するものを次に掲げてみると、「開通元寶」の背上に月文を印すものが2枚みられる。「淳熙元寶」の背上下に「六」の数字、「咸淳元寶」の背上に「九」の数字を印すもの各1枚がある。「洪武通寶」の背右に「一錢」を印すものが2枚みられる。ちなみに「淳熙元寶」の背文「六」は淳熙16年（1189）、「咸淳元寶」の背文「九」は咸淳9年（1273）の鑄造である。

銭貨に加工を施して通常の銭形を呈していない「加工銭」、および銭貨の一部もしくは約半分を鋭利な工具を使用してカットしたと考えられる「切銭」(註)が29枚出土している。加工銭には外輪と背面を擦る「至道元寶」1枚がある。また、中央の孔形が星形状を呈しているもの15枚は加工銭の範疇に入れるには若干の抵抗はあるものの一応含めてみた。計16枚（全体の10%）である。切銭は計13枚（全体の8%）出土している。銭貨を部分的に切り取った部分切銭と約 $\frac{1}{2}$ に切り取る半切銭に区別できる。前者は3枚、後者は10枚が検出されている。この切銭は当時流通していた1文銭の $\frac{1}{2}$ の価値つまり半文銭として、あるいは鑄銭などと同等に取り扱われて流通していた可能性が考えられる。しかし、詳細な事は現時点では不明であり今後の資料増加をまって検討を重ねていきたい。

(註) 古事類苑刊行会編 「泉貨部」『古事類苑』 吉川弘文館 1896年 P150。

(2) 鉄製品（第39図 図版一28）

今回の調査で出土した鉄製品は、総点数 385点に及ぶが、その大半は釘であった。他に掛金具、鏃、棒状、鋏、刀子、短刀、火打金、クサビと用途不明なものがあった。

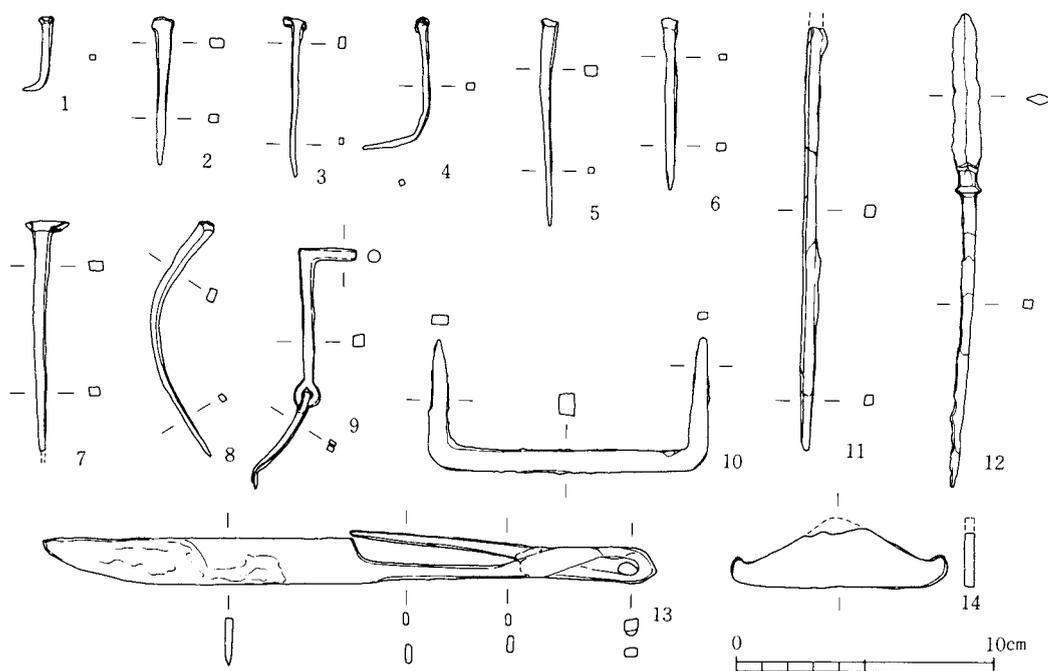
釘（第39図一1～8）は鉄製品の中心で、347点出土した。それらは全て和釘と呼ばれる角釘であった。その形は1本ずつの鍛造のために、類似したものがあったが、同形のもの認められない。また、断面の形は正方形を呈するものよりも、長方形を呈するものが多い。頭部の鍛造方法から四種類に分れる。

I類は頭部を平たく敲き伸ばして、それを内側へ巻き込むように丸めたもの（第39—1～4、7）である。II類は頭部を敲き伸ばさずに、直角に折り曲げたものである。III類は頭部を斜めに整えたもの（第39図一5・6）である。IV類は頭部に整形を加えないもの（第39図一8）である。

釘の中で、長さが測定可能なものを長さ別に分けると、2寸台が最も多く169点(48.7%)である。以下、1寸台が145点(41.7%)、3寸台が27点(7.7%)、4寸台が6点(1.7%)であった。

掛金具（第39図一9）は、棒状の片方を直角に折り曲げ、もう一方を丸く曲げて環状にしている。その環部には、掛金具を柱等に取り付けるため釘状の金具が付いている。残存状態は良好で、取り付けの釘状の金具は、棒状のものを環部に通した後に、二つに折り曲げたものである。また、直角に折り曲げた頭部は断面形が丸く整えられている。この掛金を受けるための壺金も出土している。

その他の鉄製品（第39図一10～14）を順に説明をする。10は鏃で、長さ11cm、打込部分5cmの



第39図 鉄製品実測図 (1/3)

完形品である。厚さは中央部で0.6cmで、断面形は長方形を呈している。左右の打込部分は長さは同一であるが、断面形が違っている。11は長さ16.6cmの棒状を呈する。上端は欠損しているために、旧形態はもう少し長いと推定される。厚さは0.5cmで、断面形は略長方形である。釘・火箸・鋏等を考えてみたが、いずれも該当せず、何か工具の可能性が高い。12は長さ18.5cmの鋏で、ほぼ完形である。刃部は長さ6cm、幅1.1cm、最大厚0.4cmで、両刃である。茎部は長さ11.5cmで、断面形は正方形を呈する。鋏の出土はこの一点だけである。13の刀子は長さ23.4cmの完成品である。刀身部は刃区(まち)は明確でないが、長さ13.2cm、刃幅1.8cmで、柄は棒状にして折り返されて、鋏状を呈している。この刀子は柄の造りから、鞘を持たずに使用されるものと推定される。14の火打金は、長さ8.5cmで平面形が笠形をなして、両端が少し上がる。厚さは0.4cmで、上部を欠くがその幅は2.5cm程と推定される。火打石と打ち合わせる発火具である。

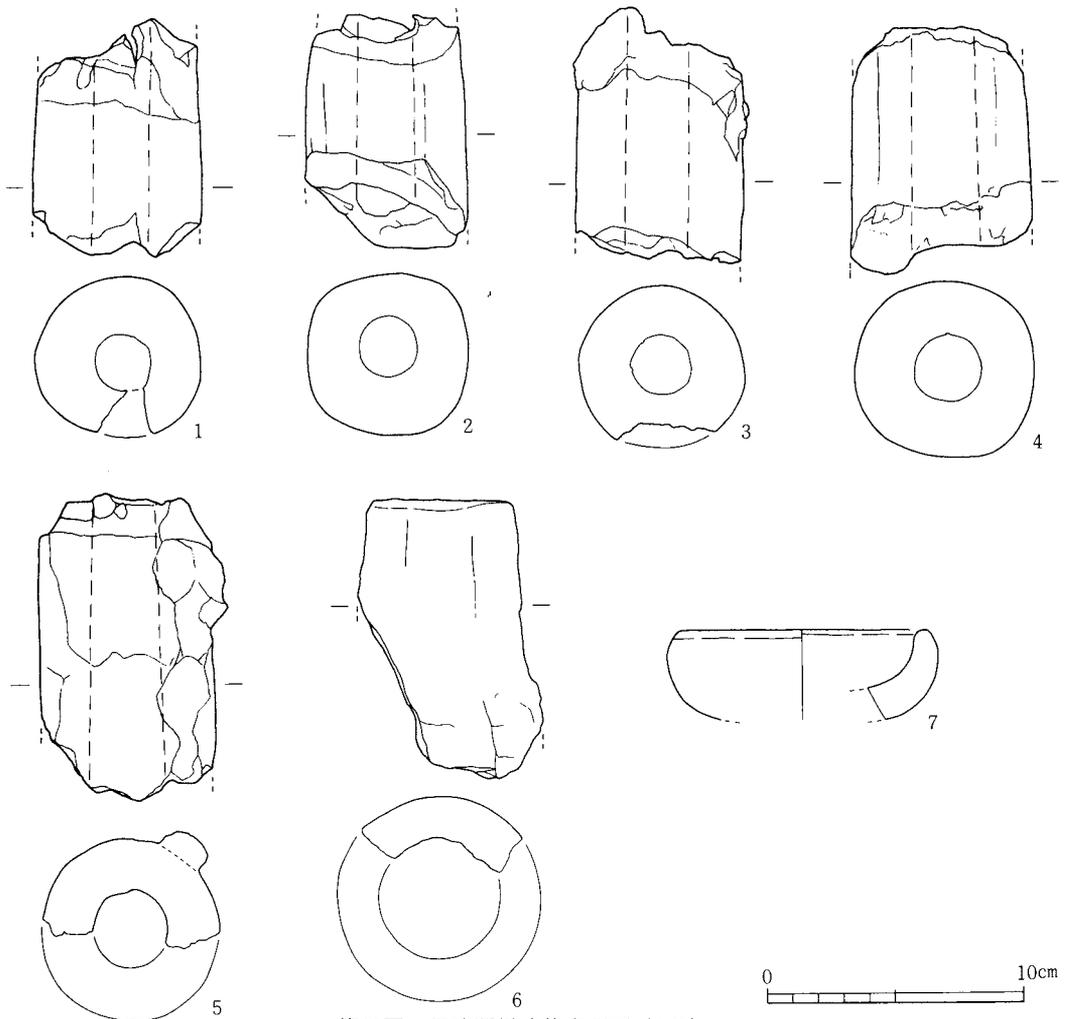
金属製品としては他に銅製品の残片が数点出土しているが、青銅製品と認められるものは出土していない。

第7節 鍛冶関係の遺物

鍛冶関係の遺物としては、鞆(ふいご)の羽口、るつば、砥石の他に多量の鉄滓が出土した。ここでは土製品である鞆の羽口とるつばに関して整理した。また、これらの出土は、中層面の第3号溝と包含層中からのものである。

(1) 鞆の羽口 (第40図-1~6 図版-27)

鞆の羽口は約11個体出土したが、全形を知り得るものは1点もない。図示したものの大半は、羽口の先端部とその周辺部であり、鞆との接合部片は6のだけであった。また、その作りは棒状具



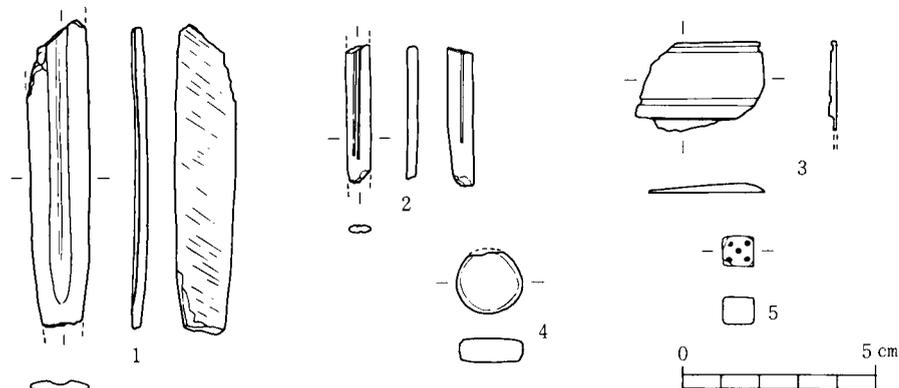
第40図 鍛冶関係遺物実測図 (1/3)

に粃殻や植物繊維(藁か)の細かくしたものを混入した粘土を巻き付けて、形を整えた後に棒を抜き取ったものである。外面はナデ調整が十分に施されて、平滑に仕上げられている。内面は棒状具で調整されている。

1～3・5は先端部が熔変している。1～3は最大内径が2.2～2.5cmで、先端部径とほぼ同一である。1・2の胎土には少量の植物繊維が含まれるが、3には多量の粃殻が多量に混入されている。4・5は最大内径が2.7cmと3cmで、先端部径との差は0.3～0.5cmである。4の胎土には粃殻が多量に含まれるが、5には植物繊維が比較的多く含まれて、外面に鉄滓が付着している。6は最大内径が約4.8cmで、器厚も薄手である。胎土には植物繊維の混入が少なく、砂粒を多く含み堅緻である。

(2) るつぼ (第40図—7 図版—27)

7は口径が約9.5cmで、口縁がやや方形を呈している。底は厚さ1.3cmで、胎土には砂の含みが少なく、植物繊維の混入も少ない。付着物は無いが、胎芯は灰色を呈して堅く、耐火性を示している。他に2点出土し、轡の羽口と共に第3号溝より出土した。



第41図 骨角製品実測図(1/2)

第8節 骨角製品(第41図 図版-30)

骨角製品では筭(こうがい)と考えられるものが2点、おはじきが1点、賽子が1点、性格不明な骨角製品が1点の計5点が出土した。

筭(第41図-1・2)

筭は2点出土したが、いずれも破片であった。1は頭部と先端部を欠損しているが、片面の中央に溝をもち、緩やかな反りをみせている。幅2.5cm、厚さ0.3cm、溝幅0.5cmを測る。両面とも丁寧に研磨されて、擦痕も残っている。2も両端を欠損しているが、片面に2条、もう片面に1条の細い溝が刻まれている。幅0.6cm、厚さ0.2cmを測る。溝には墨が入れられている。

おはじき・賽子(第41図-4・5)

4のおはじきは円板状を呈して、側面は丸く研磨されている。径は1.7cm、厚さ0.7cmを測る。両面は丁寧に研磨されているが、表裏の識別はない。5の賽子は一辺が0.8cmで、重さ0.6gある。賽の目は全て0.15cmの丸で、少し窪んでいる。目には墨が入れられ、現在の賽子と同様に表裏合わせて7である。二点とも当時の数少ない遊戯具の一つと考えられる。また、賽子の県内に於ける出土例は、一向一揆の最後の拠点ともなった鳥越城址³⁰より3点出土している。

その他の骨角製品(第41図-3)

3は性格不明のものである。形は板状を呈して、片面は平坦であるが、もう片面は膨らみ3条の溝が刻まれている。溝幅は0.2cmで、溝も両面も丁寧に研磨されている。刀装具の一部とも考えられる。

第9節 木製品(第42・43図 図版-29)

本遺跡は横を犀川が流れている関係で、地下水位が高く、木製品の遺存状態は良好であった。

しかし、包含層の調査面積が少ない上に、遺構等からの出土も少なかった。したがって図示したものは、形態を知り得るもののお大半である。それは、下駄、ハシ状木器、刀子の柄、握手、柿経等であったが、柿経は別項にて説明することとした。また、木製品には不可欠な材質同定を行うことができなかった。

(1) 下駄 (42図-1・2)

1は台長21.7cm、台幅7.9cm、台厚2.5cmで、遺存状態は比較的良好である。前壺は径1.2cmで、裏は長方形にくりぬかれている。後壺は径1.6cm(左)そ2.6cm(右)で、右側の壺が大きい。裏は前壺と同様に長方形にくりぬかれている。前壺の前後には、指のあたりが強く残り、後壺周辺の台表もすり減っている。台裏には歯が無くて、後あごもすり減っている。

2は台長19.2cm、台幅約8cm、台厚1.9cmで、1に比べ遺存状態は悪い。前壺は径約1cmで、後壺は径1cm(右)である。台の表裏共に損みが激しくて、台裏には幅役1.5cmの歯が残るが、後あごは1と同様にすり減っている。

(2) ハシ状木器 (第42図-4~10)

ハシ状木器は各遺構や包含層中から散発的に出土したもので、点数も約20点と少ない。全形を知り得るものも少ない。形態は長さ17~20cmで、中央部の太さ0.4~0.6cmを計り、両端をやや尖らせている。多量のハシ状木器が出土している西川島遺跡群の製品に比べやや小型の物が多い。

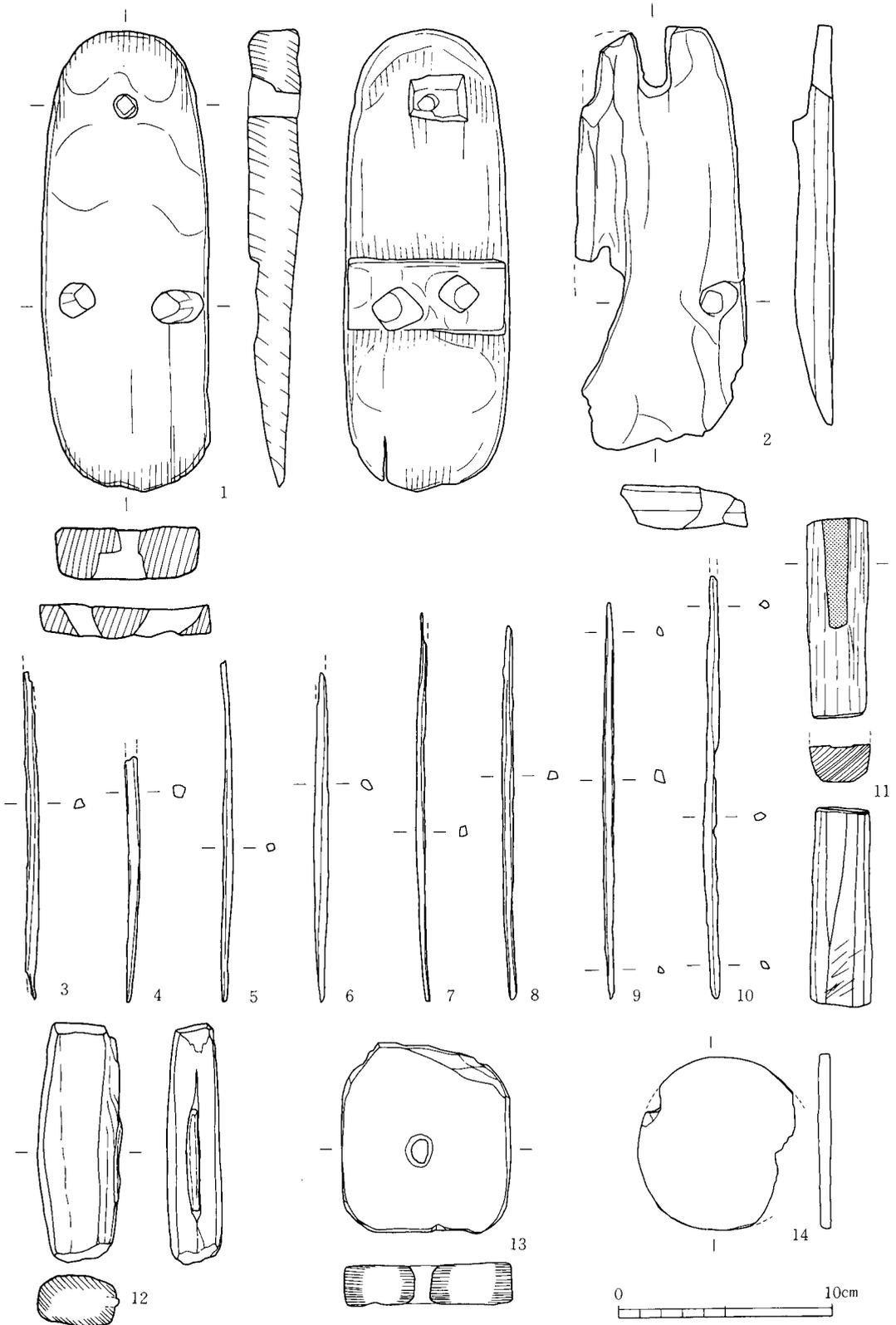
(3) その他 (第42図-11~14、第43図)

その他の木製品としては、刀子の柄、握手、円板状、曲物底、折敷、舟形、刀子状、柱根、礎板等があった。11は刀子の柄が縦に割れたものである。全長9.4cm、柄口幅2.8cmを計り、断面形は約10面程の多角形を呈していたと考えられる。中子部分は長さ5.1cm、幅3.7cmで、焼かれているが、目釘などは認められず差し込みであった。12は側面に鉄板を打ち込んだ握手状の木製品で、長さ11.5cm、横幅3.7cm、厚さ2.5cmである。中央部分の側面はやや山形を呈し幅広い。側面の鉄板は、長さ11.5cm、厚さ0.5cm程のもので、くさび状に打ち込まれ、握手に亀裂が入る。火打金に握手を付けたものと考えられるが、定かでない。13は隅丸方形に近い円板状の木製品で、縦9cm、横8cm、厚さ2cmを計る。側面は平滑に仕上げられて、板中央に径1.1cmの孔が穿たれている。用途は不明である。14は曲物底と考えられるもので、約 $\frac{1}{3}$ を焼失している。径口8.2cm、厚さ0.5cmで、ほぼ円形を呈する。側面には木釘等は認められない。

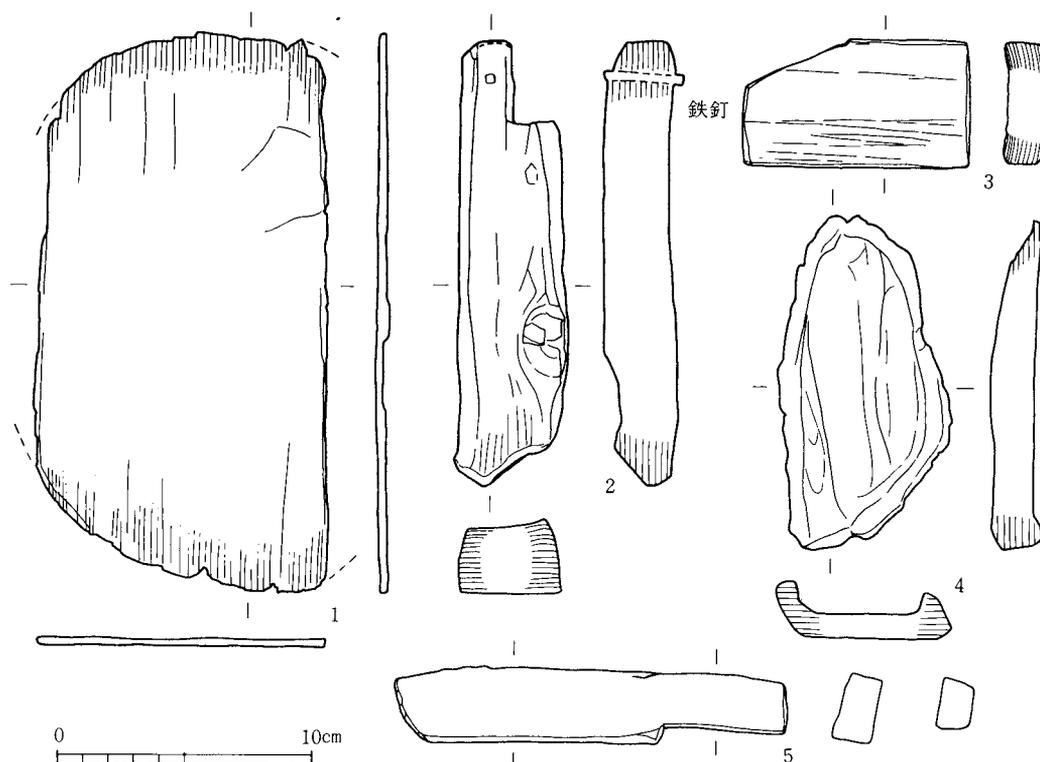
1は折敷の底板と考えられ、略隅丸方形を呈して、長さ21.6cm、厚さ0.5cmである。2は一端にはほぞ状の加工を加えて、鉄釘が打ち込まれている。鉄釘は0.3cm方形で、現存部は3.1cmを測り上・下両端を欠いている。3は長さ8.9cm、横幅5cm、厚さ1.5cmの板で、柾目材から断ち割りしたものである。左上を斜めに削り取っている。削り取られた部分と下の側面は平滑である。何かの止め板と考えられる。4は舟形であるが、右舷を中心に焼失している。現長13.1cm、幅6.6cm、底の厚さ1cmで、内部をくりぬいたものである。形態からして、独木舟ではなくある程度の構造舟を模造したものであろう。5は刀子状の製品である。全長15.5cm、刃幅2.7cmで、刃区(まち)は明瞭であるが、厚さが1.4cmと厚い。断面も長方形で、刃部と柄の部分がねじられている。

また、破片のために図示できなかったが、朱と墨で飾った獅子頭状の木製品も1点ある。

木製品は第一次調査に比べて、点数・種類共に少ないが、舟形・刀子状・獅子頭状の木製品では共通している。調査地点が離れていても同一の祭祀的遺物が出土したことは、これら形代を使用した宗教的行為が、本遺跡で広く行なわれていたことを物語るものであろう。



第42図 木製品実測図(1)(1/3)



第43図 木製品実測図(2)(1/3)

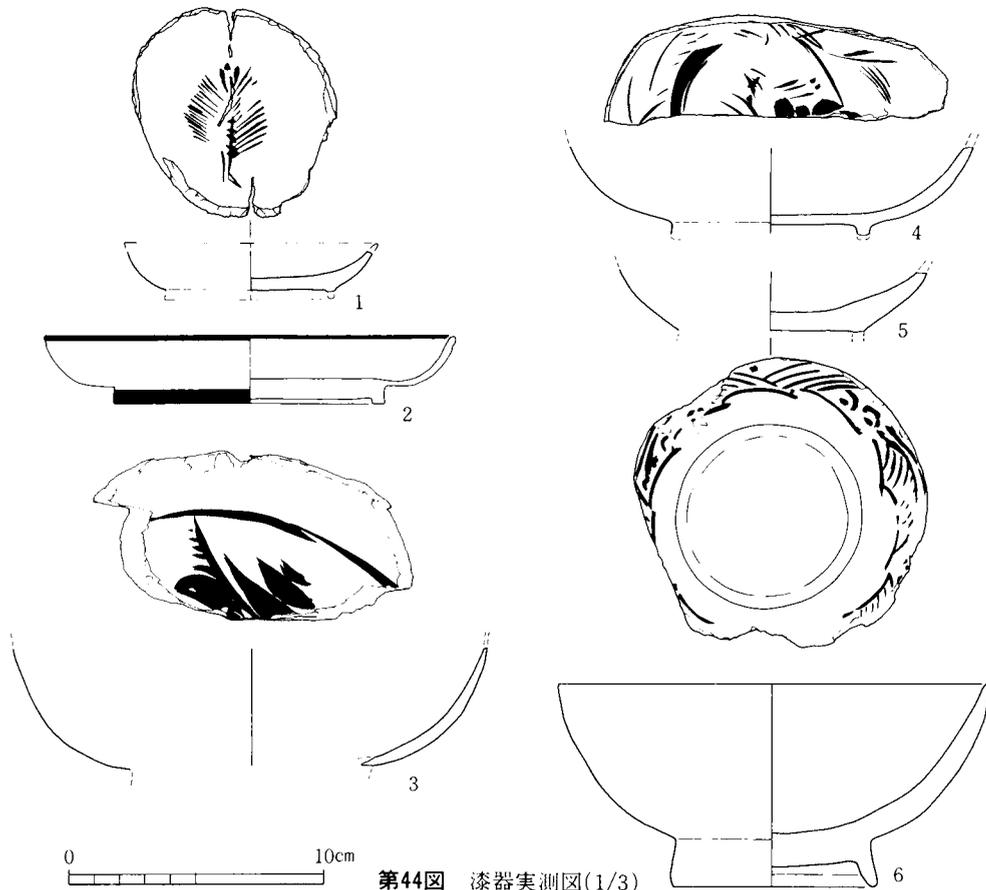
第10節 漆器（第44図 図版-29）

漆器の椀や皿の出土は、個体数で約8点と陶磁器と比べ極めて少ない。図示可能な製品は、小皿・皿・椀の計6点である。各製品の木取は、横木取りである。

1は口縁部と高台を欠損した小皿である。推定口径10cm、高台径6.6cm、高台幅0.4cmを計る。全面黒漆塗りで、内底に綾杉状の草文を朱漆で描いている。2は朱漆塗りの皿である。口径17.2cm、高台径10.6cm、器高2.7cmを計る。口縁の内外と高台から外底面に黒漆を重ねている。漆は厚めかけられ、発色は良い。

3は椀の体部片である。内面には筆幅がある草花文を横に描き、外面には細目の筆による草花文が描かれている。遺存状況は悪い。4は椀の中でも器厚が一定した製品である。高台径7.6cmを測る。内外両面に草花文を朱漆で描くが、外面の遺存は悪い。2号土坑より出土。5は椀の底部で、高台径7.3cmを測る。内面は朱漆塗りであるが、下地に黒漆が認められる。外面は扇状の草文を描くが、朱漆の発色は悪い。6は全形が知り得る椀である。口径16.8cm、器高7.9cm、高台径8cmを測る。素地は厚いが、漆の剥離が激しい。外面にわずかな朱漆文様が残る。内面は全て朱漆塗りである。

漆器は第一次調査の折にも8点が採集され、内7点が図示・報告されている。いずれも草花文を朱漆で描いた椀と盃で、文様の点では類似している。しかし、2の皿や5・6の椀で見られた朱漆を多用した製品は、知られていない。なお、県内の中世集落址から出土した漆器は、本遺跡



第44図 漆器実測図(1/3)

同様に極めて少ない。

第11節 柿 経 (第4表 図版-30)

今回出土した柿経は、全て破片であり、全形を知り得るものは無い。全て標高- 2.2mの旧犀川河道部の左岸と考えられた斜面下からほぼ一括出土した。周辺からは、人の左上腕骨(図版-27)、硯(第32図-1)、滑石製品(第34図-1)等が共に出土している。いずれも水辺に投棄したものが、流失せずに河岸に埋れたものであろう。

柿経の形状は、頭部を山形にし、幅14~17mm、厚さ 0.3mmとほぼ一定している。全長は不明であるが、約20cm程であったと推定される。墨書された経文は、第4表に示した通りで、書体は細く楷書体であるが全品鮮明である。柿経通有の形状²³⁾よりやや小さく薄手の用材が使用され、経文から「南無阿弥陀仏」の六字名号を二段に写経したものと、無量寿経もしくは観無量寿経の経文と推定されたものに大別された。

県内における柿経の出土は、大野川遺跡(仮称)²⁴⁾より漆器箱に納められた状態で出土した例以外には無い。しかし、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の堀跡からの出土例²⁵⁾と共に水辺からの出土という点で共通している。なお、県内の中世集落址出土の墨書資料としては、西川島遺跡群の笹塔婆や木簡、²⁶⁾押水町南吉田葛山遺跡の六字名号の笹塔婆²⁷⁾などが知られている。

第4表 柿經釈文表

(×印は欠損、計測單位mm)

(1)	×菩提若有善男子善女人以恒河沙×	(118) × 13 × 0.3							
(2)	〔薩名× 〔无量カ〕 ×□□×	(40) × 16 × 0.3	(16)	×□生□×	(46) × 14 × 0.5				
(3)	〔口悉令成就聲聞緣覺都共集會禪思以比提〕	(18) × 16 × 0.3	(17)	×□□此經中乃〕	(60) × 16 × 0.3				
(4)	×□□×	(18) × 16 × 0.3	(18)	×而降□□經	(33) × 14 × 0.3				
(5)	×□□×	(161) × 16 × 0.3	(19)	×□俱	×				
(6)	×回悟木空速×	(59) × 17 × 0.25	(20)	〔無力〕	(95) × 16 × 0.25				
(7)	〔其國カ〕	(34) × 17 × 0.25	(21)	×佛〕	(102) × 15 × 0.4				
(8)	×□□土百由旬内無〕	(117) × 16 × 0.3	(22)	南無阿□×	(39) × 16 × 0.3				
(9)	〔成佛×	(28) × 16 × 0.4	(23)	南無阿×	(22) × 15 × 0.25				
(10)	〔若□□辭說無上道諸佛子等從□×	(155) × 17 × 0.7	(24)	×旃陀×	(31) × 14 × 0.3				
(11)	×人〕	(102) × 15 × 0.4	(25)	南無阿×					
(12)	×□最〕	(100) × 15 × 0.3	(26)	〔無阿旃陀カ〕	(50) × 15 × 0.3				
(13)	×無量×	(20) × 14 × 0.3	(27)	×南□□□佛×					
(14)	×□言其×	(28) × 15 × 0.3	(28)	〔佛カ〕	(60) × 15 × 0.3				
(15)	×□作无量×	(35) × 16 × 0.3		×□南無阿弥陀□×					
(16)	×華經×	(19) × 16 × 0.3		〔陀佛カ〕	(17) × 14 × 0.3				

注

- (1) 亀井明德「グスク採集の輸入陶磁」 知念 勇編『沖縄出土の中国陶磁(下)』—ジョージ・H・ケア氏調査収集資料— 沖縄本島編 沖縄県立博物館 1983 那覇。
- (2) 小野正敏「一乗谷及び豊原寺出土の元様式の染付」『貿易陶磁研究』 No.3 日本貿易陶磁研究会 1983 太宰府。
- (3) 小野正敏・金元賢治『豊原寺跡II 華蔵院跡第2次発掘調査概報』 丸岡町教育委員会 1981 丸岡。
- (4) 四柳嘉章他『西川島・I』 穴水町教育委員会 1980 穴水。
- (5) 田嶋正和『勅使館発掘調査報告』 加賀市教育委員会1981 加賀。
- (6) 谷内尾晋司他「志賀町中村畑遺跡」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書I』 石川県立埋蔵文化財センター 1982 金沢。
- (7) 湯尻修平氏の教示による。1977年に石川県立埋蔵文化財センターが、発掘調査を実施。
- (8) 辻村泰園編『日本仏教民俗基礎資料集成四 元興寺極楽坊IV』 位牌・物忌札・冥銭・石塔類 中央公論美術出版 1977 東京。
- (9) 福井県立朝倉氏遺跡資料編「第31次調査報告」『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告 福井県教育委員会 1983 福井。
- (10) 全国珠算教育連盟編『新珠算叢書 13 日本珠算史』 暁出版株式会社 1971 東京。
- (11) 越坂一也氏の教示による。1983年に石川県立埋蔵文化財センターが、発掘調査を実施。
- (12) 註(5)文献に同じ。
- (13) 米沢義光氏の教示による。1981年に石川県立埋蔵文化財センターが、発掘調査を実施。
- (14) 小嶋芳孝『寺家』1980年度調査概報 石川県立埋蔵文化財センター 1981 金沢。
- (15) 1981年に石川県立埋蔵文化財センターが、発掘調査を実施した鶴来町白山遺跡第IV次調査区(担当小嶋芳孝・垣内光次郎)より全形を知り得る行火が出土している。
- (16) 田嶋正和他『敷地町後方遺跡発掘調査報告』 加賀市教育委員会 1982 加賀。
- (17) 小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡出土の土鍾(1)・(2)」『草戸千軒』調査研究ニュース No.86・96 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980・81 福山。
- (18) 上田明美「土鍾」北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団編『光明寺裏遺跡』東京都北区教育委員会 1980。
- (19) 小松正夫編『後城遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会 1981 秋田。
- (20) 石川考古学研究会編『鳥越城跡発掘調査概報』 鳥越村教育委員会 1979 鳥越。
- (21) 辻村泰園編『日本仏教民俗基礎資料集成六 元興寺極楽坊VI』 こけら経・経典・祭文・和讃・暦 中央公論美術出版 1975 東京。
- (22) 福田弘光氏の教示による。出土状況及び出土品の詳細は明らかでない。
- (23) 朝倉氏遺跡調査研究所編『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡V』 昭和48年度発掘調査整備事業概報 福井県教育委員会 1974 福井。
- (24) 註(4)文献に同じ。
- (25) 浜野伸雄氏の教示による。1981年に石川県立埋蔵文化財センターが、発掘調査を実施。

第VI章 調査の成果と課題

第1節 遺跡と遺構

(1) 砂丘と遺構

今回の調査で確認された遺構と遺物は、調査面積の狭少さに対して極めて豊富であり、本遺跡の形成、発展、廃絶に至る過程を解明する資料が得られた。本遺跡は海岸砂丘に被覆された砂地遺跡であり、遺跡の変容には海岸砂丘という自然環境が、大きく影響を及ぼしていた。この環境的要因であった海岸砂丘と本遺跡の関係をまず考えてみたい。

石川県は、日本海に突出する能登半島を県の北半に擁するために、他県に比べ長い海岸線をもつが、海岸砂丘の発達が見られるのは、単調な海岸線を呈する南加賀地方から口能登地方に至る延長約100kmの日本海沿岸である。海岸砂丘は南の大聖寺砂丘から、小松砂丘、安原砂丘、内灘砂丘、羽咋砂丘の順で、北に向って直線的に連なり、さらに砂丘を分断する河川により細分されている。中でも、金沢市の西郊に位置する内灘砂丘は、延長約19km、幅約2km、最高位約60mで、日本の代表的な砂丘の一つに数えられている。

本遺跡を被覆する砂丘は、この内灘砂丘の南方に位置する安原砂丘で、規模は延長約7.5km、幅約1km、最高位は今回の調査区西側で約17mに達する。汀線付近には、弥生・古墳時代や平安時代の土器等出土地が五ヶ所確認されて、県内の海岸砂丘に立地する砂地遺跡の中でも、比較的砂丘と遺跡の関係が明らかにされている。そして、現在県下で発見・調査されている砂地遺跡の中で、その詳細が知り得る中世集落遺跡としては、本遺跡以外に能登地方の羽咋市寺家遺跡と門前町道下元町遺跡があげられる。

なお、砂丘地に占地した遺跡の共通する特徴としては、遺物包含層や遺構が黒色砂層で形成され、遺跡が営続されている期間中にも飛砂現象により遺物包含層が発達する。時には無遺物砂層と黒色砂層が、互層状況を作り出す為に、層位的調査が必要であり、また可能でもある。

羽咋市寺家遺跡^①は、口能登地方に位置する羽咋砂丘の北端部で発見された大規模な複合遺跡である。1978～1981年に及ぶ発掘調査により検出された古代祭祀の遺構とその関連施設は、全国的にも注目された。遺跡は、祭祀地区、砂田地区、太田地区の三地区に区分されているが、砂田地区では、縄文時代前期から室町時代中頃に至る遺物包含層が5層確認された。その中でも、10世紀と14・15世紀と推定される二時期には、急激な砂丘の活動を物語る無遺物砂層が検出されている。特に、14・15世紀の砂丘の形成活動においては、14世紀中頃から遺跡の西方に既に形成されていた砂丘の移動が飛砂現象として始まり、土塁で大きく方形に区画された掘立柱建物群が廃絶し、15世紀前半に至っては、完全に砂丘に被覆されてしまったと推測されている。

門前町道下元町遺跡^②は、能登半島の北西部に流れる八ヶ川の河口近くに位置する縄文時代から室町時代後半に及ぶ複合集落遺跡である。遺跡の性格に関しては、港町的性格と門前町的性格の二面が考えられている。集落の変容は、14世紀後半から16世紀初頭に最盛期を迎えるが、16世紀中頃には、砂丘に被覆され始め、後半に至っては完全に被覆されたと推測される。

また、本遺跡の発見時に実施された第一次調査で調査された中世墓地は、本遺跡の南東隅の地点に構築された墓地で、90㎡弱の墓域には石塔を標識とする火葬墓群が営まれていた。検出された石塔は、五輪塔、宝篋印塔、板碑であったが、五輪塔は造立したまま砂丘の無遺物砂層に覆われていた。検出状況と出土遺物等から、墓地は南西方向から移動してきた砂丘により埋もれたもので、その時期を15世紀後半⁽³⁾と推定している。

一方、今回の調査地点において観察された本遺跡の変容は、14世紀後半頃に集落としての活動が本格的に始まり、15世紀前半には最盛期を迎えているが、15世紀中頃には急激な砂丘の再移動にあい、遺跡の営続が不可能となったと考えられる。

以上、本遺跡を含む三遺跡で認められた砂丘と遺跡の関連をみてきたが、本遺跡を被覆している安原砂丘に関しては、既に地質学者の藤 則雄氏が、「普正寺付近の砂丘のように、室町時代以降に堆積したと推定される砂丘もあるが、それは、すでに古墳時代初頭に形成されていた砂丘の一部が、何らかの理由で再移動したものと判断される。」⁽⁴⁾とその所見を述べておられる。また、これより先には、北陸地方に分布する砂丘を六期の砂丘形成期に分けて、砂丘の類形化と編年を試みられ、本遺跡を被覆する安原砂丘を富山県の放生津砂丘と共に第Ⅳ期（室町時代末頃）形成期に位置付けている。⁽⁵⁾このように、地質学的には、砂丘形成とその発達過程の解明にあたり、考古学的資料を活用して成果をあげつつあるが、考古学的方法論に基づく研究は少ない。唯一、橋本澄夫氏による砂地遺跡の形態分類⁽⁶⁾があげられるだけである。それは、砂丘という大きな自然環境に阻まれ、十分な調査が実施されず、遺構・遺物といった具体的な資料が欠けていたことによる。

上記三遺跡で確認された遺跡の廃絶時期は、遺跡により違ってはいるが、廃絶の主要因を砂丘活動に見出すことができる。それは、14世紀後半から16世紀後半に至る約二世紀の期間が、一連の砂丘活動期間であり、日本海沿岸域に位置する遺跡の消長に大きく関与していたことを教えている。その砂丘活動期間の変遷と、本遺跡が位置する大野荘の文献資料から、砂丘活動に因る被害状況をみてみたい。

砂丘の活動は、寺家遺跡で確認されたように、10世紀の活動期間以降、14世紀中頃まで比較的安定（停滞）していたが、14世紀後半頃より再び活動期間に入っている。寺家遺跡では、飛砂の激化により、遺跡が廃絶に追い込まれるが、本遺跡や道下元町遺跡では、この頃より遺跡内における人的活動が本格化している。両遺跡とも飛砂の増大により、短期の営続期間ではあるが、肥厚な遺物包含層（黒砂層）が形成されている。この飛砂の現象は、期間中に幾度かのピークを迎えながら、16世紀後半頃まで続いたと考えられる。途中15世紀初には寺家遺跡が、15世紀中頃には本遺跡と続いて砂丘に被覆されている。両遺跡とも遺跡周辺に存在した既成の砂丘が、飛砂現象により再移動したものであろう。一方、道下元町遺跡だけは、16世紀中頃まで営続されるが、これは、周辺に既成の砂丘が存在せず、汀線より離れていたことによる。その道下元町遺跡も16世紀後半から17世紀初頃に起った砂丘の一大活動により砂丘に被覆されてしまう。

この砂丘活動は、本県のみ認められる現象ではなくて、汎日本海的現象として捉えられるものであり、前述の三遺跡と類似した立地条件で営まれた鳥取県長瀬高浜遺跡⁽⁷⁾、秋田県後城遺跡⁽⁸⁾

においてもほぼ同様な遺跡の廃絶状況が報告されていることから裏付けられる。

次に、この一連の砂丘活動に代表される自然環境の変化が、当時の人々の生活に及ぼした影響を、本遺跡に係る文献資料とその研究からみてみたい。

本遺跡とその周辺地域が、かつて臨川寺領加賀国石川郡大野荘の中心的地域であったことは、前回の報告書において、浅香山木氏が詳細に論及されているところである。その後、氏は天竜寺文書の中にある明応四年（1495）分と明応九年（1500）分の大野荘年貢算用状二通を紹介・分析され⁹⁾、大野荘で展開された一向一揆の動向を具体的に解明されている。資料となった二通の大野荘年貢算用状の記載内容には、砂丘活動を主体とした各種の自然災害による米方・錢方の負担免除の記録が多くみられるが、その中の一部を紹介してみたい。¹⁰⁾

「赤土村無量寺村西安原村之散田不作河成砂成分以起請文注進之開免許之」

「寸次良村清名三分二依砂成不作之由以起請文堅歎申旨此由披露申処任誓言自永享十二年御□免」

「宮腰塩町在家三郎次郎、去応安五年洪水河類分地子錢也」

「大野・宮腰在家地子錢山類浜成損分也、応永十五、十六年郷免状在之」

「宮腰白浄庵古屋敷砂山成間、彼庵円楽寺地之内引之、依古屋敷地子錢御免」

「依年々砂成、屋敷地子依為不足、沙汰人以起請文歎申間、以御評定自永享年中御免」

「宮腰屋地子依成砂山、沙汰人以注狀歎申間、為評定之義、自嘉吉元年免之」(註9の文献より引用)

記録された自然災害は、「河成砂成」、「洪水河類」、「山類浜成」、「砂山成」と色々な言葉で表現されるが、いずれの場合も河川の反乱や洪水、海岸浸食や砂丘の発達等の自然災害による損害を上げて、年貢の負担免除がなされている。

浅香山木氏の集計¹¹⁾によると、当時大野荘の領主であった臨川寺が、貞治六年（1367）から康正元年（1455）の期間に年貢免除を認容した額は、米方・錢方とも免除額の8割強が、川成・砂成・河類・水損を理由とするもので、その成因を犀川と大野川の河口部分を中心として、犀川左岸の後背湿地を庄域とする立地条件と砂丘活動に求めている。

その年貢免除に上げられている自然災害の中で最多の記録は河類であるが、本遺跡の廃絶に大きく関わり、砂成・砂山成と表現されている砂丘活動による被害の記録をみるならば、応永十五・十六年(1408・1409)に大野・宮腰の在家地子錢10貫文を免除したのに始まり、以後数回記載されている。特に永享十一年(1439)から文安元年(1444)には、砂成・砂山成の記録が集中し、この期間の宮腰における屋敷地子錢の免除額は74貫文にも達している。算用状に記載されている在家・屋敷地子錢の免除総額が102貫文である点からしても、この期間の砂成・砂山成の被害の甚大さが知られるばかりか、免除額から想定される大野庄内における宮腰の経済的重要性の表われと捉えたい。そして、本遺跡を文書に記載されている宮腰の一端と考えるならば、砂丘が本遺跡を被覆した年代は、ほぼ嘉吉元年(1441)を中心とする砂山成の記録に比定されよう。

なお、この年代観は出土した各種の陶磁器から推定された年代とも一致するもので、考古学的資料からも裏付けられていることを付け加えておきたい。

(2) 遺跡と遺構の性格

今回の発掘調査地点においては、黒色砂層から形成される厚さ40～60cmの遺物包含層が約100

m²検出され、包含層中より上層・中層・地山面の三面の遺構面が検出された。各遺構面の概要については、第Ⅲ・Ⅳ章で既に説明を終えたので、本項では各遺構面で検出された遺構を通して、本遺跡の性格を探ってみたい。

上層面は、砂丘の無遺物砂層を削除した段階で、包含層を形成する黒色砂層の上面で検出された遺構面である。遺構の覆土が砂丘の無遺物砂層である点からも、遺跡が砂丘により被覆され、廃絶に追い込まれる直前に営まれた遺構で、土坑、溝、粘土面、鍛冶台、焼土等が検出された。これら検出遺構の中で、調査区西側に位置する鍛冶台と焼土（火床跡か）は第1号溝を含め鍛冶生産関連の遺構であり、鍛冶工房の主要施設である鍛冶場と判断された。本遺構における鍛冶工人を代表とする手工業者の活動は、第1次調査の折に出土した鉄滓と鞆の羽口等からもその活動が想定されていたが、鍛冶場の検出は、それを具体的に実証する資料といえよう。なお、鍛冶工房は製品を鍛造する鍛冶場と、砥石を使用して製品の仕上げを行なう研ぎ場から構成され、これに住居部分が付属していたと推測されるが、中層面で検出された第3号溝の南辺部は、釘等の小型鉄製品と砥石の出土状況から研ぎ場に比定される地点であり、上層面においても研ぎ場として機能していたと考えられた。

中層面で新たに検出された遺構は、土坑、溝、焼土、柱穴等であった。焼土は鍛冶場の火床跡と考えられるが、上層面のものより層位的にも先行するもので、砥石や鉄製品の出土状況から研ぎ場と比定された第3号溝南辺の検出状況からも、鍛冶工房が中層面の段階で既に営まれていたと考えられた。また、第3号溝の南側には、柱穴の検出により小規模な掘立柱建物の存在が窺い知られ、その周辺域からは、銅銭の出土が多く確認された。（第37図参照）

地山面で検出された遺構は、上・中層面の遺構検出状況とは様相が大きく異なり、土坑や柱穴等が地山面全域で検出された。土坑以外の径約30～50cmの小型の遺構は、その大半が掘立柱建物の柱穴と認定されるもので、中には柱根や礎板が確認された。これからしても上・中層面での活動が確認された鍛冶工房に先行する遺構は、掘立柱建物を中心とする遺構群が構築されていたことが知られる。建物の性格は、地山面の遺構検出に際して比較的多くの土錘が出土した点と、本遺跡の地理的環境の中でも海と河川の存在を考え併せると漁業関連の色彩が濃くなるが、遺構面の東側が浸食作用により欠損しているので確定に欠ける。

三遺構面の年代は、各遺構面から検出された各種陶磁器類から導き出される年代観によると、上層面は15世紀中頃、中層面は15世紀前半、地山面は14世紀後半を中心とする年代を与えることができる。

他方、調査区の大半を占めていた無遺構部分の大きな落ち込みに関しては、包含層が斜面上部で断たれ、その伸びが全く認められないが、明灰色粘土の斜面中程には、ほぼ南北方向に走る細長い平坦面が上下二段検出された。細長い平坦面は幅1m前後で、上段が標高約－0.2m、下段が標高約－2.2mを測り、下段の平坦面では上方の包含層端から崩落したと考えられる径30～60cmの包含層の固まりが多く検出された。斜面を形成する明灰色粘土面は、約25度の傾きがあり、全面に波文状の浸蝕が認められ、斜面より東に広がるA-3・4区を重機を使用して標高－3.5mまで掘削を試みたが、砂丘の無遺物砂層の単一層であり、包含層及び明灰色粘土は検出されなかった。

以上の所見から斜面部と調査区の大半を占める大きな落ち込みの性格は、現在本遺跡の東を流下する犀川の旧河道部の一端として捉えられ、斜面部は旧左岸に当り、包含層端と斜面部は河の水量の増減等による浸食・破壊作用を受けていたと考えられる。したがって、当時の海水面の水位と現在の水位とに大差が無ければ、落ち込みから想定される水深をもってすれば、比較的大型の構造船等の船舶が接岸することも可能な状況であったと推測される。

このように、今回の調査区で検出された遺構等からは、本遺跡の性格解明の糸口が導き出されたが、本遺跡の性格解明に先立って、本遺跡の規模を復元してみたい。今回の調査の前年に実施した分布調査の所見から、包含層の広がりや、野鳥飼育園の敷地全域に広がることが確認され、第一次調査時に犀川左岸沿に長く確認された包含層の北端部との接合が十分に予測されている。したがって、本遺跡の規模は、今回の調査区をほぼ北端部と考えるならば、犀川沿いの包含層南端部までの距離は、南北方向で約400m、横幅は推定ながらも東西方向で約100m程の規模であり、南北に細長い大型の中世集落址が復元されよう。これはまた、今回の調査区と約300m程隔てて位置する第一次調査時のA地点との包含層堆積状況がほぼ一致する点からも肯定される。

復元された集落規模から本遺跡は、北陸地方における中世集落址の中でも大型の集落址に分類されるばかりか、集落に港湾的機能を付加することが可能な旧河道部の検出、各種の陶磁器製品に代表される消費物資の質と量から窺える消費生活の多様性、鍛冶工房と推定される鍛冶生産関連遺構にみられる鍛冶工人等の手工業者の活動、臨海的立地と周辺地形から知られる非農業的集落像等からも、本遺跡は旧犀川河口近くに位置し、砂丘の東側に広がる平坦部に集落を展開しながら、旧河道部を港湾施設として活用したと考えられる。その規模と内容からして、本遺跡は中世北加賀地方の中核的港湾集落が想定され、その集落形態と規模から都市型集落¹⁰⁾に分類されよう。

第2節 陶磁器の組成と機能分担

(1) 陶磁器の組成と機能分担 (第5表 第45図)

今回の調査区から出土した各種の陶磁器は、その総破片数が約11,000点に達し、その内訳を産地・製品・器種別にまとめたものが第5表である。この資料に基づき各種の陶磁器別にその組成を整理し、グラフ化したものが第45図であり、このグラフから窺える陶磁器組成の様相から、本遺跡に搬入・消費された陶磁器の特質と問題点を明らかにしたい。陶磁器は、大きく中国産と国産の製品に大別されるが、共に当時本遺跡で展開された消費生活には必要不可欠の物資として、消費し廃棄されたものである。

近年、陶磁器の組成と機能分担に関して、全国的規模でその研究と対比¹⁰⁾が試みられ、成果をあげつつある。これは、各地で増加している中世集落址や城館址等の調査により、分析と対比が可能なまでに資料が蓄積されつつある状況と同時に、中国製品を主体とする陶磁器編年の確立と研究の進展による。県内においても同一な状況下に近づきつつあるといえる。なお、今回資料として使用している陶磁器の破片数は、当然のことながら元の個体数を大きく上回るばかりか、個体の大小にも影響されるが、遺跡から最も多く出土する陶磁器の中でも完形品はごく

第5表 出土土器総破片数

中	青磁	碗	159	瀬戸系陶器	灰釉碗	11	越前	壺	69	
		皿	10		" 盤	29		片口鉢	22	
		盤	17		" 花瓶	15		その他	416	
		鉢	10		" 香炉	16		計	1,341	
		鉢	3		" 瓶	45		加賀	甕	273
	その他	23	" 水注		2	壺			12	
	計	222	" 筒形		1	片口鉢			10	
	白磁	口禿皿	11		天目茶碗	54			その他	111
		台付皿	52		鉄釉小坏	2			計	406
		壺	7		" 皿	6		信楽	壺	8
碗		3	" 壺	8	土師質	皿	7,715			
その他		17	" 茶入	5	瓦質	花瓶	4			
計	87	その他	66	羽釜		13				
天目碗	碗	7	計	352		火鉢	1			
	付瓶	1	珠洲	甕		321	火鉢	14		
	青白磁	水注・他		3		壺	216	計	32	
茶入	2	片口鉢		191	国産品合計	10,703				
中国品合計	322	その他		121		総計	11,025			
国産	瀬戸系陶器	灰釉皿		64			計	849		
	" 卸皿	28	越前	甕	834					

稀で、そのほとんどが破碎して出土する。したがって、本遺跡の陶磁器組成を調べるだけでなく、他の遺跡との対比検討の資料を提供する意味においても破片数を用いた。

まず、陶磁器全体の製品別組成（第45図-①）をみると、在地製品である土師質土器が70%と最高率を占めるが、これは、土師質土器の消費量の膨大さに加えて、耐久性に欠け、破損し易い製品の特質に起因するものであろう。次いで、北陸地方に生産窯址が存在し、日常用器の甕・壺・片口鉢の三器種を生産の基本としながら、製品を広く供給していた珠洲、越前、加賀の三者を合わせて23.6%となる。以下、唯一の国産施釉陶器である瀬戸系陶器が3.2%、青磁と白磁を中心とする中国製品が2.9%とほぼ同率で続く。

この製品別組成の中心である土師質土器等のカワラケに関して全国的な視点から対比してみるならば、瓦器・土師器等のカワラケが9割前後の高率を占める畿内から北部九州までの西日本と、カワラケの出土が極めて低率な東北から北海道南部の北日本の様相とは大きく異なり、数量的には若干の差があるとしても、福井県一乗谷朝倉氏遺跡と似ている点からして、北陸地方における一般的な組成として捉えることができよう。一乗谷朝倉氏遺跡は、北陸地方の代表的な中世遺跡として周知されているが、年代的には本遺跡よりも後出である。その一乗谷朝倉氏遺跡の陶磁器組成⁹⁾と対比するならば、土師質土器が約20%高いが、反面日常用器が約7%低い。施釉陶磁器では、瀬戸系陶器がほぼ同率であるが、中国製品は約4%低い。この組成比率の相違は、本遺跡を北加賀地方の中核的港湾集落と位置付け、都市型集落に分類しても、一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名の朝倉氏が拠点として繁栄した城下町であり、その性格の違いと、陶磁器を中心とする各種消費物資の流通状況を強く反映した消費生活の時代的相違の2点に起因するものと考えられるが、調査面積や精度から生ずる数量的ばらつきも考慮する必要がある。

陶磁器組成の中心となる土師質土器は、全て皿形態の製品であり。一乗谷朝倉氏遺跡で出土している小型の土釜や土鈴等の製品は、一点も確認されていない。その土師質土器の皿は、口径や形態からして、大・中・小皿の三種に分類されるが、組成の中心は中・小皿であり、用途の一つである灯明皿には小皿が主に使用される傾向が認められた。

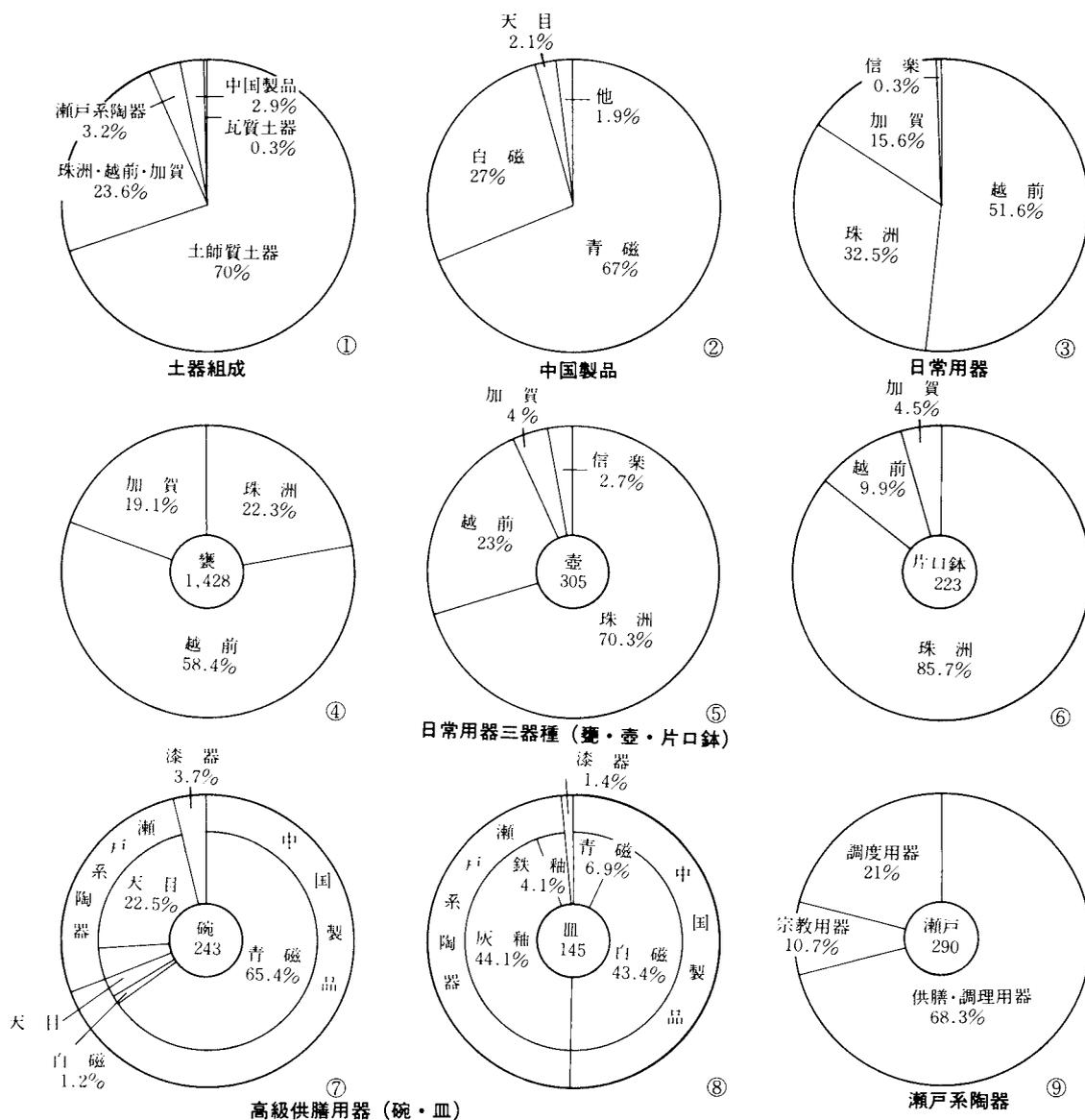
日常用器の三器種を構成する珠洲、越前、加賀の三窯は、その製品供給範囲と生産規模から近国窯（珠洲・越前）と地元窯（加賀）に大別⁹⁹されているが、本遺跡における日常用器の組成（第45図-③）は、越前51.6%、珠洲32.5%、加賀15.6%で、越前が過半数を占めていた。なお、少量であるが、信楽の出土も確認された。日常用器の組成において、越前が過半数を占める状況は、本遺跡以南の加賀地方に散在する中世集落址等の消費遺跡で、数多く認められる状況ではあるが、これからすぐに日常用器における越前中心の搬入・消費形態とは位置付けられない。それは、この地方では、古くから三窯の各種製品の共伴出土が報告され¹⁰⁰、三窯の商圏が重複する地域では、日常用器三器種の分業化が計られていたことが推定されている。¹⁰¹これは、本遺跡出土の日常用器三器種で確認された三窯の組成を器種別に（45図-④～⑥）をみれば、その分業化を具体的に知ることができる。

甕は、日常用器の中でも大型かつ重量品であり、貯蔵を主用途とする用器である。その組成は、珠洲22.3%、越前58.4%、加賀19.1%の比率で、三窯の製品の大小を抜きにするならば、越前を主体としながらも珠洲と加賀をほぼ同率で搬入・消費していた状況が復元される。壺の組成は、珠洲70.3%、越前23%、加賀4%、信楽2.7%と珠洲が搬入・消費の中心となる反面、越前が低率となる。調理・調整用器の主用器である片口鉢は、珠洲85.7%、越前9.9%、加賀4.5%と壺以上に珠洲の占有率が高まる。以上、三器種の組成をみてきたが、三器種の中で大型かつ重量品である甕は、越前が搬入・消費の中心となり、珠洲と加賀がほぼ同率で従う点からも、珠洲と加賀の二窯は、越前の補完的な役割を果していたことが知られる。

中・小型の製品である壺や片口鉢では、一転して珠洲の市場独占を意味する程までに組成の比率が高く、越前や加賀は、付録的な搬入・消費量であったことも知られる。したがって、本遺跡では日常用器三器種に関して珠洲と越前による製品の分業形態が確立していたことが知られる。なお、珠洲の片口鉢に認められた独占的な占有率は、単に生産・供給者である珠洲窯の生産状況を強く反映したものか、あるいは消費者側の製品選択に拠るものなのかは今後の課題としておきたい。また、少量ではあったが、その搬入・消費が確認された信楽の壺は、小野正敏氏の指摘する茶壺としての性格¹⁰²が最も有力ではあるが、今後の資料の増加を待ちたい。

供膳用器の中でも中国製品は高級供膳用器の中心になるが、その製品別組成（第45図-②）は、青磁67%、白磁27%、天目2.1%で青磁中心の組成が知られる。青磁と白磁を合わせると中国製品の大半を占めるが、その比率は7.5：3である。器種的にも青磁が碗を主体にするのに対して、白磁は皿を主体とする点からもその性格の違いが判る。しかし、供膳用器は中国製品の青磁や白磁だけで構成されるのではなく、他に土師質土器（皿）、瀬戸、漆器等が出土したので、これらを供膳用器の二大器種である碗と皿について、その製品別組成を概観してみたい。なお、皿の組成で土師質土器を加えると、その比率は97.8%にも達するので、今回は除外したことを御了承していただきたい。

碗の組成（第45図-⑦）では、青磁等の中国製品69.5%、天目碗等の瀬戸26.7%、漆器3.7%で、中国製品が瀬戸製品の2倍以上の比率を占める点が注目される。それをより具体的にみるならば青磁碗65.4%、瀬戸天目碗22.2%、瀬戸灰釉碗（平碗）4.5%と青磁碗が、供膳用器の主要



第45図 出土土器の組成

器種である碗の中心に位置する搬入・消費状況が知られる。なお、青磁碗は全て龍泉窯系の製品で、同安窯系の製品は一点もない。青磁皿も同様である。

一方、皿の組成(第45図-⑧)では、白磁を主体とする中国製品50.3%、灰釉皿を主体とする瀬戸48.5%、漆器1.4%で、中国製品と瀬戸の製品が、ほぼ同率で並ぶ点が注目される。これを器種別にみれば、白磁皿43.4%、瀬戸灰釉皿44.1%の二器種が、ほぼ同率で搬入・消費された状況が知られる。これも本遺跡の陶磁器組成の特質として捉えられよう。

供膳用器の二大器種である碗と皿の組成に関しても、中国製品の青磁や白磁が高率を占め、搬入・消費の中心に位置することが知られた。反面、瀬戸に代表される国産製品の比率は、第一次調査時の資料を加えても大きく変動することは無く、これが本遺跡に於ける供膳用器の二大器種の組成と認められる。また、今回はその組成比率が明らかにされていない漆器の碗と皿を組成に

加えてみたが、その低率さからも漆器製品が陶磁器に比べて、その搬入・消費が極めて限定された製品であったことを物語っている。

今回の調査で得られた陶磁器の中で、日常用器と供膳用器の組成に関して、破片数を用いて製品と器種の組成と特徴を報告してきたが、それをより明確に把握するためには、本遺跡の第一次調査の様相を踏まえた上で、他の中世集落遺跡との比較検討が必要であろう。今日まで発掘調査が実施された県内の中世集落遺跡の中で、資料的に対比が可能な遺跡としては、石川郡鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡²⁰（以下白山遺跡と略す）と鳳至郡穴水町西川島遺跡群の美麻奈比古神社前遺跡²¹が資料としてあげられよう。

まず、第一次調査で検出された各種の陶磁器に関してみるならば、中国製品の青磁や白磁の中にも特異な製品が含まれるばかりか、朝鮮製品である高麗青磁も認められる。国産品としては、瀬戸の灰釉・鉄釉製品の各種が含まれる。

中国製品を製品別にみると青磁44点（53%）と最も多く、次に白磁32点（38.5%）と続き、他に天目碗2点、梅瓶1点と各種製品があげられるが、特異な製品としては、南宋官窯であった郊壇窯の青磁小壺片1点、白磁の口禿の短頸壺2点が知られる。他方、瀬戸は、80点と少ないが、器種的には灰釉・鉄釉製品とも一応各器種が揃うが、今回確認されていない灰釉製品の行平と小壺、鉄釉製品のおろし皿・花瓶・蓋を新たに加えることができる。供膳用器の碗と皿に関しても、青磁碗と白磁皿を中心とする組成が共通して認められたが、瀬戸の碗・皿では、組成にバラツキが多く認められた。

そして、対比される白山遺跡と美麻奈比古神社前遺跡での陶磁器組成は、白山遺跡が土師質土器83.3%、日常用器10.7%、中国製品3.2%、瀬戸2.1%で、本遺跡に比べて土師質土器が13%高率であるが、その分日常用器が低率を示している。中国製品と瀬戸の比率が逆転してはいるものの、大枠では本遺跡に似た陶磁器組成として受け止められる。一方、美麻奈比古神社前遺跡では、土師質土器40.9%、日常用器（珠洲）21.8%、瀬戸20%、中国製品20.7%の組成が知られるが、一昨年に調査が実施された鳳至郡門前町の道下元町遺跡における調査所見²²から能登の中世集落の中でも特異な陶磁器組成と考えられる。したがって、本遺跡との対比検討が十分に行なえる遺跡は、同じ北加賀地方に所在する白山遺跡に限定されよう。

白山遺跡は、本遺跡の南東約18km離れた手取川溪谷の谷口部に位置する基幹的な中世集落遺跡で、加賀地方最大の荘園領主であった白山比咩神社に関連した僧坊址と門前町的集落の二面が遺跡の性格として想定されている。その位置と出土した陶磁器の様相からして、在地製品である土師質土器を除く各種の陶磁器は、本遺跡をはじめ北加賀地方の日本海沿岸で営まれた港湾集落に荷上げされた製品が、小河川や陸路等の内陸交通路を経て搬入・消費されたものであろう。

前回の報告書でも本遺跡と白山遺跡が位置する鶴来地域との経済的交流は、出土遺物や文献史的資料からも裏付けされていたが、今回対比した陶磁器組成の若干の違いは、遺跡の性格よりも白山遺跡の営続年代が、13～16世紀と長期である点に起因するものと考えられる。一方、陶磁器の量と質の点に関して、本遺跡は白山遺跡よりも極めて豊かで良質と言えよう。したがって、本遺跡出土の陶磁器が示す組成と様相は、本遺跡が当時の北加賀地方の経済活動の中でも、物流の

拠点となる港湾施設が付随した集落であった事を十分に窺い知らせるものである。

(2) 陶磁器の用途と機能

今回の調査で出土した各種の陶磁器は、中国製品と国産製品に大別して、それをさらに製品と器種に分けて整理報告した。また、前項では、陶磁器の組成と用途から碗・皿の供膳用器、甕・壺・片口鉢の日常用器、香炉・花瓶の宗教用器の三者を中心とした製品区分に基づき報告してきたが、この区分が本遺跡で消費された陶磁器の機能分類に直結するとは考えられない。そこで、本項では、中世の日常生活における陶磁器の製品別用途と機能を探る基礎的な作業として、今回出土した陶磁器を現行の民俗学的分類⁸⁴に拠り、下記の七用具に整理してみた。

飲食器（碗・皿・鉢・盤・坏・水注）、調理・調整用具（おろし皿・片口鉢）、炊事用具（羽釜）、貯蔵用具（壺・甕）、嗜好品用具（茶入れ・茶壺・茶碗）、暖房用具（火炉・火鉢）、宗教用具（香炉・花瓶）

なお、今日中世の人々の日常生活が具体的に知り得る資料としては、平安時代末から室町時代前半に作成された絵巻物の存在がまず上げられよう。描かれた内容は美術史や歴史学の資料としてばかりではなく、当時の日常生活で使用されていた陶磁器製品の用途を探る資料として、陶磁器研究に活用されてきた。近年、絵巻物に描かれている食生活関連用器と、畿内を中心とした土器研究の成果に基づく考古資料との比較研究⁸⁵も大いに援用したい。

飲食器 日常の食生活で使用される陶磁器の中で、中心となる器種は、碗と皿の二器種である。その他にも鉢・盤・坏・水注などの製品が上げられる。また、その出土が認められた木製の箸や折敷、漆器の椀や皿をも含まれよう。

絵巻物に描写されている食事や酒宴の風景や台所の場景からして、碗の用途は飯や汁物の容器に使用し、皿には副食物のおかず等を盛り付け、鉢や盤には調理した料理を盛り、小型の水注は液体の調味料入れなどに使用されていたことが知られる。したがって、本遺跡出土の青磁碗は、その組成比率の点からしても飯や汁物の容器として使用され、白磁皿や瀬戸灰釉皿は、土師質の皿と共に副食のおかずの盛り付け容器や酒盃等に使用されていたと考えられる。また、青磁や瀬戸の盤は、水注と同様に調度品の性格が強く考えられていたが、やはり食生活の中で消費された陶磁器であろう。

皿には飲食器以外の用途として、燈明皿があげられる。燈芯油痕が確認されたものは、土師質土器の小皿を主体とするが、白磁皿や瀬戸灰釉皿にも燈芯油痕をはじめ炭化物の付着が比較的多く認められた。

一方、飲食器に含まれる杓子や配膳具の折敷・高坏・衝重などの木製品は、絵巻物には多く認められるものであるが、本遺跡では折敷以外は確認されていない。なお、杓子の好例としては、辰口町高座遺跡の井戸出土例⁸⁶が上げられる。

調理・調整用具 食物の調理に使用されたと考えられる陶磁器製品としては、日常用具の片口鉢と瀬戸のおろし皿の二製品以外には、明確な製品は見出せない。

片口鉢には、珠洲・越前・加賀の三窯の製品が混在して使用されていたが、製品の組成比率の面では、珠洲が圧倒的な高率を占め、珠洲の片口鉢を消費の中心とした生活状況であったことは、既に前

項で明らかになっている。この珠洲の片口鉢は、口径40～50cm前後の製品が一般的で、断面形は逆台形を呈して、口縁部の一端を引き出し注ぎ口を一ヶ所設けている。おろし具の有無から搗鉢と捏鉢に分けられるが、出土点数の大半が搗鉢で、捏鉢は少量しか確認されていない。一方、瀬戸のおろし皿は、底径から5cmと10cm前後の大小二種に分けられるが、その使用痕には差が認められない。

珠洲を中心とする片口鉢は、注ぎ口を備えている点からも液体や半液体の食品の調理に適用する点を考慮して生産された製品であるが、消費地である集落址からの出土品からは、かなり違った使用状況が考えられる。出土する搗鉢は、内面が激しくすり減って、底周辺ではおろし目が失なわれてしまい、時には器面が抉られる状態にまで使い込まれ、搗鉢本来の機能とする“おろし”が不可能となっている。これは、絵巻物でもその使用が確認されたすりこぎによる調理以外の用途も考える必要があろう。例えば、米の脱穀や粟・そば・豆等の雑穀の粉末化を中心とした調整過程と食料品の加工や石臼の代用などである。

調理・調整用具としては他に、まな板、包丁、石臼等の粉挽道具などが上げられるが、いずれも本遺跡では確認されていない。しかし、包丁は白山遺跡⁹⁶で認められ、石臼は各地の集落址から出土している。まな板も現在の様な台脚が付く物ではなくて、集落址から出土する曲物や折敷の底板に認められる刃跡から、これら板状の木製品が代用されていたと考えるのが妥当であろう。

炊事用具 食生活の中で食物を煮炊するための煮沸用具としては、瓦質の羽釜と滑石製の石鍋があげられる。その点数は、第1次調査時のものと合せても10個体に満たない点数であるが、県下の中世集落址の中では、最多のものである。他の集落址では、煮沸用具の出土が極めて少なくその主体が何であったか解明に至っていないのが現状である。

瓦質の羽釜は、畿内地方で生産された製品であり、滑石製の石鍋は、西北九州の生産品であるからして、煮沸に関する在地製品が全く認められない事になる。この点に関して、四柳嘉章氏は西川島遺跡群の調査成果から、14世紀以降出土量が急激に増加する珠洲の鉢に着目して、「珠洲・鉢に二次的火熱を受けたものがあることから、鉢が煮沸用に転用されたことも考えてみなくてはならない。」⁹⁷と可能性を指適している。

一乗谷朝倉氏遺跡の煮沸用具に関して見ると、在地製品は小型土師質の土釜以外には認められず、その主体を鉄鍋等の鉄製品と推定している。この鉄鍋で思いつくのは、能登半島の穴水町中居に居住した鋳物工人集団の存在である。彼らは“中井の鋳物”として、藩政時代に盛行を極めたが、記録としては、14世紀末の記年銘を持つ鋳銅製懸仏⁹⁸から中居の鋳物師の存在が知られ、中世においても鉄製の鍋釜を中心とした製作活動を展開していたと考えられている。⁹⁹

絵巻物に描かれている鍋や釜は、全て鉄製と見なされるもので、13世紀末に描かれた『一遍上人絵伝（歓喜光寺本）』では、乞食の所有する用具に鉄鍋が認められ、この時代には、かなり鉄鍋が普及していたことが知られる。そして、中世農民をその資財から三階層に分けて捉えた黒田日出男氏の研究¹⁰⁰においても、14世紀中頃の粟食主体の食生活が考えられる小百姓クラスの農民の資材に鉄鍋3個と金輪の所有が知られる。以上の点からしても、煮沸用具は一部の土製

や石製の鍋釜を除くと、その大半が鉄製の鍋釜で占められていたと考えられる。

鉄製の鍋釜は、土製や石製の鍋釜に比べ耐久性に優れ、仮に欠損しても比較的修復が可能である。また、破損して使用不可能となった場合でも、原材料として価値を損なわず、再利用が容易である。さらに、廃棄されると遺存しにくい性質を持っている。

なお、炊事用具には煮沸用具の鍋釜以外に、ざる、かご、こしき、鍋しき等も含まれるが、これらの出土は確認されていない。

貯蔵用具 各種の穀物に水、油、酒等の貯蔵用具としては、陶磁器の壺・甕、木製の桶・樽、藁製のかます・俵等があげられるが、本遺跡から検出されたものは陶磁器の壺・甕の二製品であった。

壺と甕については、前項の陶磁器の組成で報告したものである。壺は珠洲を中心とするが、甕は越前を主体とした消費状況が知られた。甕は一般的に水甕や酒壺としての用途が考えられるが、その不安定な形態から、一乗谷朝倉氏遺跡や根来寺坊院跡¹⁰⁰で多く認められるように、胴部下半を地中に埋めて安定¹⁰¹させている。珠洲・越前・加賀の三窯の製品を液体貯蔵時における保水能力で見ると、珠洲や加賀に比べて越前が格段に優れている点からしても、越前の甕を主体とする消費生活形態の成立が理解されよう。また、珠洲と越前の甕には、時々内面に漆状の物を塗り込めた痕跡が認められるが、これは、漆の用器と考えるよりも、甕の保水能力向上を目的とした処理と捉えて大過なからう。甕は日常の食生活用具の中でも、貯蔵以外に保存・加工や醸造・製造用具としても使用されるものである。

一方、木製の桶でも曲物桶は、絵巻物に多く認められるばかりか、県内の中世集落址から数多く検出されている曲物井筒に代表される様に、大小さまざまな曲物製品が、幅広い用途に使用されていたと推定される。結桶で中世にさかのぼる資料はまだ検出されていない。また、藁製のかますや俵は、中世でも各種農産物の貯蔵や運搬の用具として使用されたことは十分考えられるが、極めて遺存しにくい物のために検出例はない。

嗜好品用具 日常生活で使用される用具の中で、経済的富裕や生活の安定度を知る目安として、嗜好品用具の存在があげられる。本遺跡出土の陶磁器の中で、嗜好品に含まれる用具としては、茶事に関する製品が出土している。出土品は、茶碗、茶入れ、茶壺で、共に少量ではあるが認められる。これらの製品は、いずれも中国製品と国産の二者で構成されているが、各製品とも中国製品の方が優品である。

茶碗には、中国の建窯系と瀬戸の天目茶碗が見られるが、特に中国製品だけに蓋の使用を窺わせる擦痕が確認されていることから、国産品に比べ中国製品を上物として使用したと推測される。茶入れは、葉茶を茶臼により製粉した抹茶を貯える小型の壺であるが、これも中国製品と国産の瀬戸の二者が出土している。共に褐釉もしくは鉄釉を施した製品であった。茶壺は、葉茶の運搬・貯蔵容器であるが、瀬戸と信楽の壺がこれに該当しよう。なお、第一次調査時に出土した漆器製品の中で、黒漆塗の小型の蓋は、茶入れの蓋と推定される。茶道具には他に、茶釜、茶臼、茶托、茶筌等の用具があげられるが、本遺跡では出土していない。

鎌倉時代に禅宗と共に広まった喫茶の風習も、室町時代中頃には、既に本遺跡の様な地方の都

市型集落内においても広がりを見せていたことを本遺跡出土の陶磁器は物語っている。また、嗜好品用具としては、この他に飲酒に関する盃、銚子、瓶子等が含まれるが、前述の飲食器と共に食事や宴会の際に使用される場合が多いので、今回は製品の特定は行なわなかった。

暖房用具 冬期を中心として使用する暖房用具としては、瓦質の火炉、火鉢、火桶などがあげられる。火鉢は本遺跡を初め各地の中世集落址から出土が認められる。第一次調査時に全形を知り得る製品が出土している。口径は35cm前後で、体部が強く内湾するが、口縁上端は水平に仕上げられ、底は平底で簡単な三足が付く。火炉は袋状の体部に窓が開けられ、直立する口縁部と体部下半をスタンプ文で飾る。三足も火鉢に比べ装飾性に富んでいる。完形品としては、青森県尻八館⁶⁴の資料があげられ、本遺跡出土の火炉も同一形態の製品であろう。

火鉢は絵巻物にも描かれて、その使用が良く知られているが、火炉も火鉢と同様に手あぶりの暖房用具であったと推定され、燃料には木炭や消し炭が用いられたのであろう。そしてその他の暖房用具の中でも凝灰岩製の行火も多く出土しているが、形態的には大きな違いがあり、機能的には火鉢と同一でも、その用途には大きな違いがあったと考えられる。また、本遺跡を含め中世における屋内暖房の主体は、形態が不明ではあるが囲炉裏に求められよう。

信仰用具 中世集落内における宗教活動を探る糸口は乏しく、本遺跡の場合も柿経と少量の陶磁器製品があげられる。陶磁器は、瀬戸の花瓶と香炉であり、中国製品は確認されていない。この花瓶と香炉の二製品に燭台が加わると、仏具の三具足として整い、仏教的供献容器としての用途が一層強く考えられるが、燭台と認められる製品は1点も無い。また、県下でも燭台の出土は極めて少なく、消費が限定された製品であったことが知られる。

これは、燭台に使用される蠟燭が、日常生活で一般的に消費されるのは、17世紀後半以降⁶⁵のことからしても、中世の宗教的な供献燈火の主体は、蠟燭ではなく燈油による燈明であろう。この燈明に使用された皿は、燈芯油痕が確認された各種の皿製品の中でも、白磁皿や瀬戸灰釉皿が最も有力であり、花瓶、香炉、燈明皿から構成された三具足が、本遺跡のような中世集落では、一般的な仏教的供献容器の組成であったと推測される。

以上、民俗学的分類に基づきながら、出土した陶磁器を七種の用具に分類し、その用途と機能を整理してきたが、今後も中世集落遺跡等の調査を通して、より具体的な用途を製品別に探る必要があるであろう。

(3) 陶磁器の特質と変遷 (第46図)

本遺跡の最大の特徴は、集落遺跡としては営続期間が比較的短期でありながらも、飛砂現象に因る肥厚な包含層が形成され、良好な層位的検出が、遺構と遺物の両面で行なえる状態で遺存している点にあるといえる。これは、砂丘地に立地する遺跡には共通する状況ともいえるが、本遺跡出土の各種陶磁器は、その変遷を具体的に把握できる資料であり、前述の西川島遺跡群や一乗谷朝倉氏遺跡と並ぶものであろう。

今回出土した陶磁器の中で、整理の編年の基軸は、中国製品の青磁(碗)、白磁(皿)、国産製品の瀬戸(皿・おろし皿・平碗・天目碗・花瓶・香炉)、珠洲(甕・壺・片口鉢)に求められ、土師質土器については、他の陶磁器との共伴関係が明らかなものを抽出した。第46図は、これら層位別に

整理した陶磁器を三遺構面の変遷に基づき配列したもので、本遺跡へ搬入・消費された各種陶磁器の変化の概要を図示したものと理解していただきたい。なお、青磁碗は全て龍泉窯系の製品である。

地山面 中国製品は、青磁碗Ⅰ類とⅥ-a類を主体とし、これに少量の青磁盤・細口壺・皿・鉢に白磁皿・坏・瓶などで構成される。青磁碗のⅠ類は、鎬蓮弁文の削り出しも粗く、このタイプの終末期の製品で、中にはへら描き状の製品もみられる。また、Ⅵ-a類は、内底面の印花文以外は無文で、全体にシャープな造りである。白磁の口禿皿も少量であるが遺存している。

国産製品では、瀬戸の灰釉製品が八器種と天目茶碗が認められる。数点の天目碗以外は、全て灰釉製品であるが、その中でも宗教用器の存在が目立つ。古瀬戸編年の後期Ⅰ⁹⁸に該当するものであろう。日常用器では、珠洲が各器種とも主体であり、越前の搬入・消費は、片口鉢などの小型製品に限定される。甕は珠洲と加賀ともⅣ期の製品であるが、珠洲の中にはⅢ期の特徴を残す製品も認められた。また、珠洲の片口鉢は、口縁端部を面取りしたⅣ期の製品で捏鉢が多い。土師質土器は、Ⅰ・Ⅱ類で、器形は平底で器厚がほぼ一定しており、体部の外反も横ナデも弱い。口径が13cmを越える大型の製品も存在する。

この段階は、本遺跡の活動が本格化した時期であり、各種陶磁器から導き出される年代より、14世紀後半から14世紀末頃に位置付けておきたい。

中層面 遺物の半数がこの段階の層位より検出された。中国製品は、青磁碗Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ-b類を中心とするが、高台付の白磁皿の増加もみられる。青磁や白磁とも前段階に比べ器種の減少傾向が強まるが、新たに天目茶碗も加わる。この段階は、前段階に比べ青磁碗の変化が目される。Ⅱ類は器形面でもⅠ類の延長に位置する製品であるが、口縁部に雷文、体部に蓮弁文を施すものが出現する。Ⅵ-b類はⅥ-a類が発展した製品で、釉が厚く鈍い造りとなるが、量的には青磁碗の過半数を占めている。Ⅲ類は口縁玉縁状で内面に印花文を陽刻した製品であり点数も少ないが、上層面にまで認められる。

国産製品ではまず瀬戸が前段階とほぼ同一の器種構成で搬入・消費されるが、その中でも供膳用器の碗と皿の点数が増大し、瀬戸の主體的な位置を占めるようになる。施釉方法もハケ塗りから付け塗りへと変化するばかりか、天目茶碗に強く認められる中国製品の器形模倣と消費量の増加も特徴である。日常用器の甕は、越前の搬入・消費量の急増に伴ない同じ瓷器系の加賀が姿を消すが、須恵器系の珠洲にはⅤ期への移行以外の量的変化が認められない。しかし、その珠洲も小型製品の片口鉢に関しては、独占的な状況にまで供給量を増大させる一方、Ⅴ期への移行を示す口縁内傾に口縁端部が変化する。特にその口縁形態から嘴状口縁と称される形態の製品は、本段階でも古い方に位置付けられる点からして、Ⅳ期からⅤ期への変革期に限定される製品と捉えている。土師質土器は新田二段階に分けて整理してみた。前段階は平底から丸底への移行期であり、小型の製品にも回転横ナデによる体部の外反が起こり、内底を静止のナデにて調整している。後段階は土師質土器のⅢ類が相当する。全てが丸底の製品で、回転横ナデにより体部の稜が強まり口縁端は丸味を滞びる。前段階にまで認められた内底の静止ナデの調整は無くなり、小型の製品が増加する傾向が認められる。

この中層面の期間は、本遺跡の最盛期であるが、恒常的な飛砂現象下にあったと考えられ、前述の臨川寺文書の記載内容と時期、陶磁器から推測される年代観から、14世紀末から15世紀前半代に位置づけられよう。

上層面 本遺跡が廃絶する直前に営なまれた生活面で、上面には本遺跡を廃絶に追込んだと考えられる砂丘の無遺物砂層が被覆していた。中国製品の青磁製品は、青磁碗Ⅱ-a・Ⅲ・Ⅳ-b類を主体とするが、中層面で認められたⅡ-b類の青磁碗が姿を消す。白磁皿も引き続き一定量搬入・消費された。

青磁碗で代表される様に本期間では、中国製品の器種の減少傾向が強まり、製品の多様性も失なわれ、Ⅵ-b類の様な無文の製品が主体となる。白磁の皿についても釉の透明感が損なわれ、焼成のあまい製品が一層目立つが、まだ全面施釉の製品は1点も認められず、このタイプの製品は本期以降に出現するものと考えられる。また、白磁坏では大型化の傾向が強く見られた。

国産製品の瀬戸は、製品の小型化傾向が供膳用器を中心としながらも全器種に認められ、他にも水注・盤・瓶子等の大型製品の点数も減少する。確認された製品は、皿・おろし皿・平碗・小坏・香炉・花瓶・壺・筒型用器等であり、釉にも変化が起っている。それは、鉄釉製品の器種増加であり、天目茶碗以外にも皿・小坏・筒型香炉・壺の四製品が追加された。日常用器では、甕が越前、片口鉢は珠洲とする消費活動における分業形態が定着していたと考えられる。土師質土器は、Ⅳ類の製品を主体として構成される。Ⅳ類は器形全体が厚手で、丸底に整形されるが、口縁端部を回転横ナデの際に引き出し、やや尖出する状態に仕上げる傾向が強まる。

本期間は砂丘の移動に因り遺跡が廃絶する直前の時期であり、砂丘の活動期からその年代が知られた。砂丘の活動期の中心は、第1節第1項で引用した臨川寺文書の中で、砂丘活動を示す砂成・砂山成の災害記録が集中する永享十一年(1439)から文安元年(1444)の期間と考えられる。記録された地名から本遺跡の廃絶時期は、ほぼ嘉吉元年(1441)を中心とする砂山成の記録に比定される。したがって、本期間の年代幅は、15世紀前半から嘉吉元年頃までの短期間と推測される。

以上、三段階の遺構面を主体として、出土陶磁器を三時期に分けてその様相と変化を概観してきたが、これにより本遺跡の営続期間が14世紀後半から15世紀中頃までと集落遺跡としては極めて短いことが知られる。この営続期間は第一次調査結果ともほぼ一致する。

本遺跡の出土遺物は、その営続期間の短かさから中国製陶磁器を中心とはするが、北陸地方の中世陶磁器研究では、標式的遺跡となると考えられるので、その問題点を整理しておきたい。

1. 中国製品の中心は龍泉窯系青磁碗で、14世紀後半頃に青磁碗の画期が設定される。
2. 青磁碗の雷文帯は、14世紀末以降に出現し広まる。同時に無文碗も増加する。
3. 青磁碗Ⅲ類は、15世紀前半代の所産であると思われる。
4. 染付の碗・皿は一点も確認されていない。
5. 白磁は口禿皿以外は全て森田分類³⁸⁾のⅡ類に限定されるが、全面施釉の製品は認められない。
6. 瀬戸の供膳用器への拡大は、14世紀末から15世紀前半代に一層強まる。
7. 瀬戸の鉄釉製品は、15世紀前半から器種増加が見られる。

中国製陶磁器の中でも14～16世紀の白磁・青磁・染付に関しては、各々編年³⁷⁾が組み立てられているので、本遺跡の青磁碗と上田秀夫氏の青磁碗の分類との対応関係は別に示した。³⁸⁾

本遺跡の中国製陶磁器と同時期の対比資料としては、沖縄県勝連城と御物城、³⁹⁾和歌山県友ヶ島沖引揚遺物、⁴⁰⁾青森県尻八館⁴¹⁾が上げられ、中でも営統期間が重複するのは、勝連城、御物城、尻八館の三遺跡である。特に本州北端に位置する尻八館の陶磁器資料は、中国製品ばかりか国産の瀬戸、珠洲、瓦質土器にも本遺跡とはほぼ同一の年代観が与えられ、器種や製品の文様についても数多くの類似点を見出すことができた⁴²⁾。これは、単に遺跡の営統期間の重複に帰結するのではなく、両遺跡へ搬入し消費された内部の陶磁器が、かつて日本海沿岸を舞台として展開された考えられる海運交易に依り確立していた広域な商品流通圏内で行なわれた商業活動の商品であった事を強く裏付ける資料と考えている。

第3節 遺跡の性格

本遺跡の性格については、第一次の調査報告書において文献史学面からの浅香年木氏の考察⁴³⁾がある。考察では、本遺跡を包括する犀川下流から河口部に至る西岸一帯は、11世紀末頃に成立した醍醐寺領得蔵保⁴⁴⁾に属し、北加賀地方の中核港湾を拠点として構成された臨海的荘園と考えられ、15世紀初には大野荘に編入され、犀川・大野川河口一帯の臨海地域を包括した臨川寺領大野荘の一翼を担っていた港湾集落と捉え、本遺跡を中核港湾集落とする流通圏が、北加賀地方に形成されていたと指摘されている。また、考古学的には、本遺跡で消費された陶磁器の供給経路と流通機構に関して、珠洲窯の生産と流通構造を中心とする吉岡康暢氏の一連の論考⁴⁵⁾があり、本遺跡を北東日本海域での港湾遺跡として把握される遺跡の一として捉えている。

ここで再度本遺跡の地理的環境を振り返るならば、本遺跡の北端部に位置する犀川河口の金石港は、藩政期までは宮腰湊と呼ばれ、北陸地方の主要港の一であった。河口に占地する港は、防風・防波に関しても天然の良港であるばかりか、河川は内陸部の幹線水路として舟運に利用され、流域とその背後の平野部は、農業生産地であると同時に商品経済の一大市場でもあった。河口港及びこれに付随した集落は、これら平野部における商品経済を傘下に組み込んだ物流機構の拠点として、各種物資の集荷・輸送・販売などが広く取り行なわれていたと考えられる。ちなみに加賀地方で知られている河口港は、竹ノ浦(大聖寺川)、安宅湊(梯川)、今湊(手取川)、宮腰湊(犀川)、大野湊(大野川)の五港が上げられるが、宮腰湊は大野川と近接していることから北加賀地域の大小各河川の背後に広がる平野部とは舟運で緊密に結ばれていた。

そして、本遺跡から出土した各種陶磁製品の中で、在地製品と見られる土師質土器を除く陶磁器の生産地は、地元北加賀地方には認められず、最短の生産地である日常用器の加賀窯も約30km隔てている。中国製品は無論のこと瀬戸や珠洲・越前等の生産地は、いずれも遠隔地である。したがって、本遺跡出土の陶磁器製品は、各種の船舶によりかつて日本海沿岸で展開された海運交易⁴⁶⁾に因り商品として本遺跡へ搬入された一部であり、その大半が本遺跡内に留まることなく、北加賀地方に形成されていた流通圏内の各消費地へ供給されたものと推定される。

現在知られている北加賀地方の陶磁器資料からこの流通圏を解明するまでには至らないが、前

述の白山遺跡と本遺跡との陶磁器組成の類似や広く加賀地方で見られる日常用器の分業圏の成立、主要河川の流域や河口部を含む臨海的位置に立地する集落遺跡における陶磁器の偏在性は、消費地へ搬入された陶磁器の輸送手段として、水運が大いに利用されていたことの物証となりえる。

一方、本遺跡出土の各種陶磁製品から知られた集落の営続年代幅と港湾機能の営続期間とは一致しなくても、港湾機能を果たした集落の経済的活動状況や変化を色濃く反映していると考えられるが、これには背後の平野部に広がる農村などの消費地を取り囲む政治的動向にも影響を受けていたと推察されている。¹⁰⁰特に北加賀地域では、河川から構成され水路と陸上交通路の幹線であった北国街道の交差する地点には、野市・山崎窪市などの市が設けられ、物流の中継と搬入を行なう港湾と、消費地である農村などの仲介機能を果たしていたが、その経営には、守護勢力を初めとして有力名主層や権門社寺等の勢力が強く関与する中で、北加賀地方で成立した商品経済圏下の物流構造が機能していたと考えられる。

以上、本遺跡の性格をその地理的環境に主眼を置き整理してみたが、性格に関しては前述の浅香年木氏の考察と吉岡康暢氏の論旨に帰するものである。今回の報告では新たな性格付けは出来なかったため、本遺跡の規模や営続期間中の生業や日常生活の様相などを検討してみた。今後も加賀地方に広がる集落遺跡との対比を通して、本遺跡の性格を探究する必要があるだろう。

註

- (1) 小嶋芳孝『寺家』 1980年度調査概報 石川県立埋蔵文化財センター 1981 金沢。
- (2) 平田千秋氏の教示による。1982年度に発掘調査を石川県立埋蔵文化財センターが実施。
- (3) 吉岡康暢「中世墓地の構造」『善正寺』 石川考古学研究会編 1970 金沢。
- (4) 藤 則雄「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』 北陸第四紀研究グループ 1975 金沢。
- (5) 藤 則雄「日本海沿岸の海岸砂丘」『日本海域研究所報告』第1号 金沢大学日本海域研究所 1969 金沢。
- (6) 橋本澄夫「石川県の砂丘遺跡とその調査」『遺跡保存方法の検討』—砂地遺跡— 文化庁 1983 東京。
- (7) 森田純一他『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書II』 鳥取県教育文化財団 1981 鳥取。
- (8) 小松正夫編『後城遺跡発掘調査報告書』 秋田市教育委員会 1981 秋田。
- (9) 浅香年木「一向一揆の展開と加賀国大野庄」『北陸史学』第三十号—北陸中世史の再検討— 北陸史学会 1981 金沢。
- (10) 石川県立図書館加能史料編纂室のご厚意により館残翁編『加賀史料集成』巻十六（稿本）所収本に接する機会をいただいた。閲覧にあたっては東四柳史明・伊林永幸両氏のお世話にあずかり、御指導を受けた。深謝したい。
- (11) 註(9)文献に同じ。
- (12) 現在の犀川河道の中で、本遺跡東側の佐寄森町から善正寺橋にいたる区間は、寛永十六年(1639)の切り替え工事により改修されたもので、以前は佐寄森町から善正寺町の東を通って金石港へと大きく蛇行していた。福田弘光『大徳郷土史』 大徳公民館 1970 金沢。
- (13) 本稿では加賀地方の中世集落に関して、各種の陶磁器を中心と遺物の出土状況と検出遺構及び遺跡の規模から、都市型集落（中核港湾集落など）、基幹集落（門前町・市町など）、一般集落（農村・漁村など）とに分類し捉えた。
- (14) 第4回貿易陶磁研究集会在が、1983年11月26・27日の両日に東京の青山学院大学で「日本各地の遺跡における陶磁器の組成と機能分担」をテーマとして催された。

- (15) 小野正敏「福井県一乗谷の陶磁器組成と機能分担」 第4回貿易陶磁研究集会発表資料 1983年 東京。
- (16) 吉岡康暢「中世陶器の生産と流通(一)・(二)―北東日本海域の珠洲系陶器を中心に―」『考古学研究』108・110号 1981 岡山。
- (17) 能美郡辰口町長滝経塚の経外容器は、13世紀前半の珠洲小型四耳壺と加賀片口鉢が組み合わせられるが、小松市軽海中世墳墓では、14世紀の加賀小壺と珠洲片口鉢が組み合わせが知られる。吉岡康暢「長滝経塚」『鶴来町の古代中世遺跡』 石川県立鶴来高等学校歴史部 1963 鶴来。小村 茂編『軽海中世墳墓群』一発掘調査概報一 小松教育委員会 1973 小松。
- (18) 註(16)と同じ。
- (19) 註(15)で小野正敏氏は、信楽焼の壺を茶の運搬・保存容器と指摘しているが、本遺跡出土の信楽焼も壺と見られるので、その性格も同一と思われる。
- (20) 西野秀和・浅田耕治『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1981 金沢。
- (21) 四柳嘉章『西川島II』一美麻奈比古神社前遺跡一 穴水町教育委員会 1981 穴水。四柳嘉章「能登・穴水盆地における中世遺跡群の調査」『信濃』第三十三巻 第四号 信濃史学会 1981 長野。
- (22) 平田天秋氏より出土陶磁器の様相と組成に関してご教示を受けた。
- (23) 文化財保護委員会編集『民俗資料調査収集の手びき』 第一法規出版株式会社 1966 東京。
- (24) 安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」『文化財論叢』一奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集一 同朋舎 1983 京都。
- (25) 中島俊一『辰口町高座遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会 1978 金沢。
- (26) 1981年度の鶴来町白山遺跡第IV次調査区(担当小嶋芳孝・垣内光次郎)の土坑内より完形の包丁を1点検出している。
- (27) 註(21)と同じ。
- (28) 輪島市町野町に遺存する鑄鉄五社明神懸仏には、「中井 應永三年 大工小泉長左衛門 五社大明神 折坂 三月廿六日 寺山村(窯印)」の銘が裏面に陽鑄されている。この懸仏は、中居鑄物最古の在銘遺品である。櫻井甚一「造形文化資料」『輪島市史』資料編第三巻 考古・古文献資料 1974 輪島。
- (29) 長谷 進『中居鑄物史』 穴水町文化財保護専門委員会 1970 穴水。
- (30) 黒田日出男「中世農業技術の様相」『講座 日本技術の社会史』第一巻 農業・農産加工 日本評論社 1983 東京。
- (31) 上田秀夫編『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会 1980 和歌山。
- (32) 甕の保水能力は産地と製品により異なるが、体部下半を地中に埋め込んだ場合、浸透圧により保水能力には大差を生じないとも考えられる。
- (33) 註(3)文献の「遺物 木器・漆器」にて報告されている径5cm、高さ1.5cmの全面黒漆塗りの蓋(41頁 第24図17)を実見した結果、その形状と法量から陶器の茶入れの蓋と考えた。
- (34) 岩本義雄・大橋康二・倉谷弘孝・鳴海 秀・三上次男他『尻八館調査報告書』尻八館調査委員会 1981 青森。
- (35) 長野 暹「榎・蠟」『講座 日本技術の社会史』第一巻 農業・農産加工 日本評論社 1983 東京。
- (36) 藤沢 良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号 東洋陶磁学会 1982 東京。
- (37) 森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982 福岡。
- (38) 森田 勉・上田秀夫・小野正敏他「14～16世紀の日本出土貿易陶磁の編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982 福岡。14～16世紀の白磁を森田 勉氏、青磁を上田秀夫氏、染付を小野正敏氏が分類と編年を報告されている。
- (39) 青磁碗における本遺跡の分類と上田秀夫氏の分類の対応関係は、次のとおりである。

普正寺遺跡分類		上田分類
I-a	鎬蓮弁文碗(口縁直立)	B-I
I-b	へら先により蓮弁文を施文した碗(口縁直立)	B-II-a・b
II-a	雷文や蓮弁文を施文した碗(口縁直立)	C-II-a
II-b	無文碗(口縁直立)	E
III	内面に陽刻花文を施文した碗(口縁玉縁)	
IV-a	外面へら削りの無文碗(口縁外反)	D-I
IV-b	釉が厚く鈍い造りの無文碗(口縁外反)	D-II-a

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982 福岡。

- (40) 知念 勇編『沖繩出土の中国陶磁(下)』—ジョージ・H・ケア氏調査収集資料— 沖繩本島編 沖繩県立博物館 1983 那覇。
- (41) 西山要一「紀淡海峡海底採集の中国陶磁」『古代研究』5 元興寺文化財研究所 1974 奈良。
- (42) 註(34)と同じ
- (43) 青森県立郷土館のご厚意により、館収蔵の尻八館出土資料を実見することができた。深謝したい。
- (44) 註(3)の文献の浅香年木「14世紀の加賀国大野荘とその周辺」—中世後期の地方港湾とその背後地をめぐる諸問題—
- (45) 寛治三年(1089)10月の国司庁宣案(『醍醐雜事記』卷十三)によれば得藏保の四至は、「東限津屋寺西繩手、南限河、西限浜、北限湊」で、その規模は天仁三年(1110)の在庁注文案(『醍醐雜事記』卷一)によると「百町本 田五十丁 不作田五十丁」であることが知られる。
- (46) 註16以外にも吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『月刊文化財』215号 第一法規 1981 東京。同 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古』第18号 庄内考古学研究会 1982 鶴岡。
- (47) 註(16)で吉岡康暢氏は、珠洲陶器の流通特に船舶による輸送に関して、船舶の規模と航法から「遠隔地海運」と「地廻り海運」の二重構造で流通を捉えている。
- (48) 註(9)と註(43)の文献にて具体的に論考されているので、参考にされたい。

参考文献

- 浅香年木『古代手工業史の研究』 法政大学出版局 1971 東京。
- 浅香年木「中世の技術と手工業者の組織」『新岩波講座日本歴史』No.6 岩波書店 1975 東京。
- 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山 猛先生古稀記念・古文化論攷』 同論文集刊行会 1980 福岡。
- 佐々木達夫「日本海の陶磁貿易」『日本海文化』 No.8 金沢大学文学部日本海文化研究室 1981 金沢。
- 豊田 武・児玉幸多『体系日本史叢書 No.13 流通史I』 山川出版社 1969 東京。

付 記

本報告書の作成に際しては、多くの方々からご教示・ご指導を受けた。亀井明德・上田秀夫両氏には、中国製陶磁器の分類と年代観、井上喜久男氏には、瀬戸系陶器の器種と年代観についてご教示いただいた。そして、平田天秋係長には、遺物整理に始まり本報告書作成の全過程でご指導いただいた。以上、各氏に心よりお礼を申し上げ感謝したい。

なお、本遺跡出土遺物の中で、本報告書に収録しなかった鳥獣骨や魚骨等の動物遺体は、渡辺 誠氏(名古屋大学文学部助教授)が同定と報告をご快諾下さり後日発表の予定である。

ご多忙のなかご理解・ご快諾下された氏に心より感謝したい。

種類 層位	中国製品			国産製品		
	青磁	白磁	天目	瀬戸	土師質土器	珠洲
上層面						
中層面						
地山面						
地山面						

第46図 層位別出土主要陶磁器一覽

(番号は挿図番号—遺物番号 灰・灰釉、鉄・鉄釉)



遺跡周辺の航空写真(昭和22年撮影)



調査区俯瞰(東上空から)



遺跡近景(調査前、北東から)



調査区近景(北から)



調査区近景(東から)



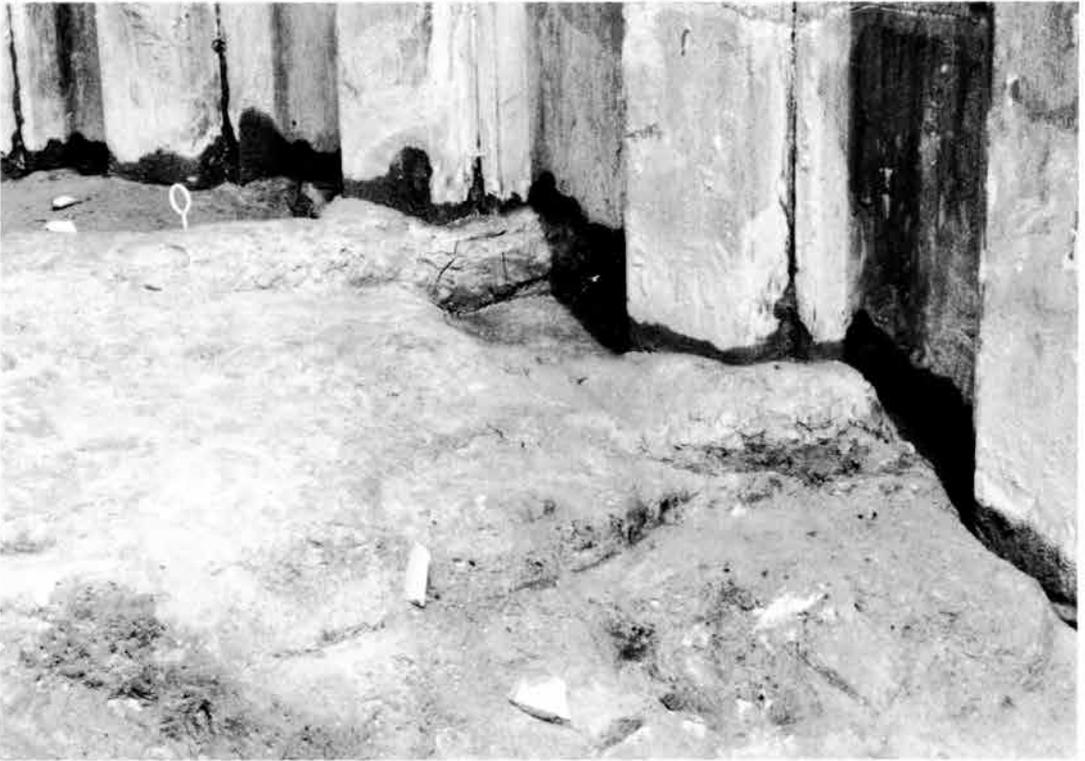
上・中層面検出状況(北から)



上・中層面検出状況(西から)



鍛冶場検出状況



段状遺構検出状況



第2号土坑検出状況



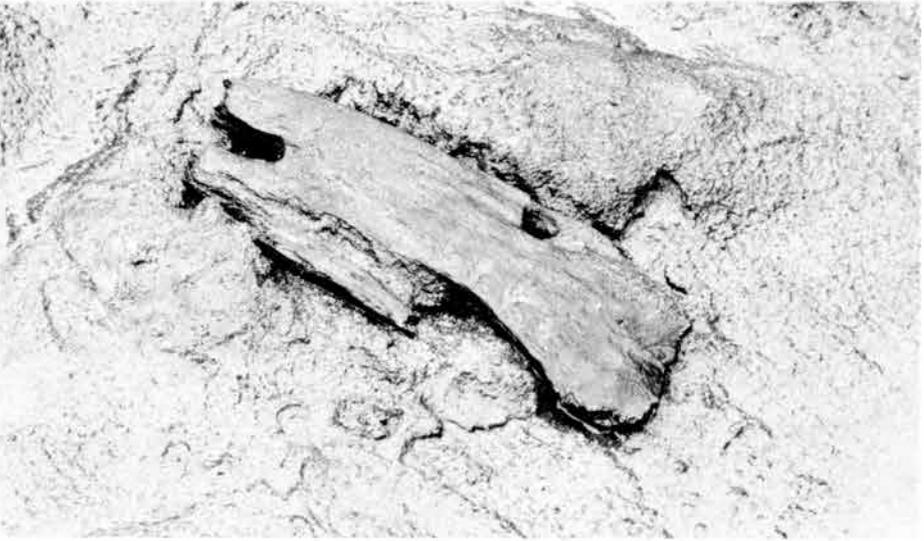
鉄滓群検出状況



鍛冶台・溝状遺構検出状況



第3号溝遺物出土状況



遺物出土状況(上—青磁碗、中—下駄、下—漆器碗)



遺物出土状況(上一漆器皿、中一瀬戸平碗、下一植木鉢)



上・中層面検出状況(東から)



地山面検出状況(東から)



地山面検出状況(北から)



地山面検出状況(西から)



地山面ピット群近景(西から)



地山面土坑・ピット群近景(南から)



地山面土坑・ピット群近景(北西から)



地山面ピット群近景(北西から)



第3号土坑検出状況



第6号土坑検出状況



第7号土坑検出状況



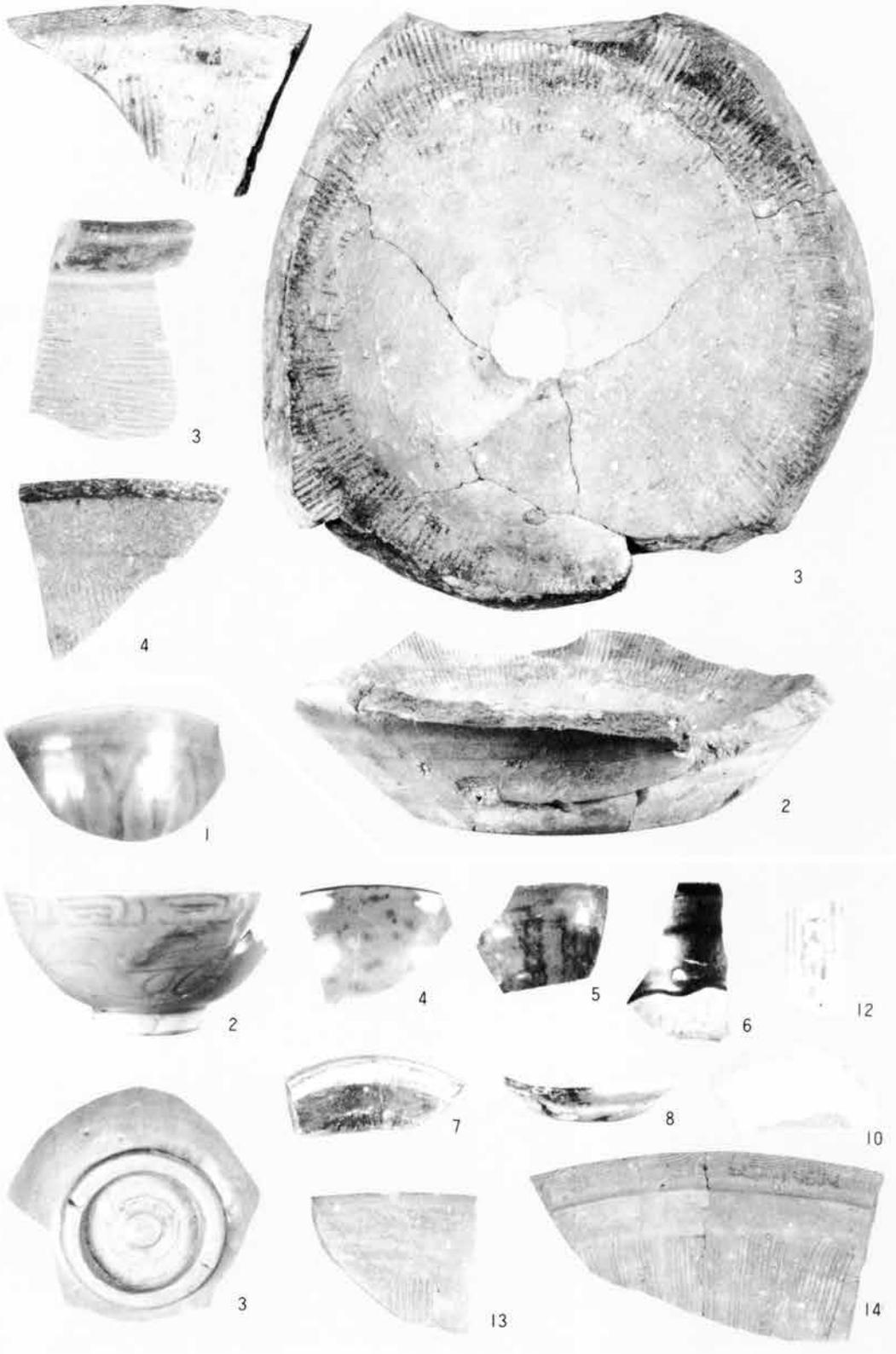
地山面発掘調査風景



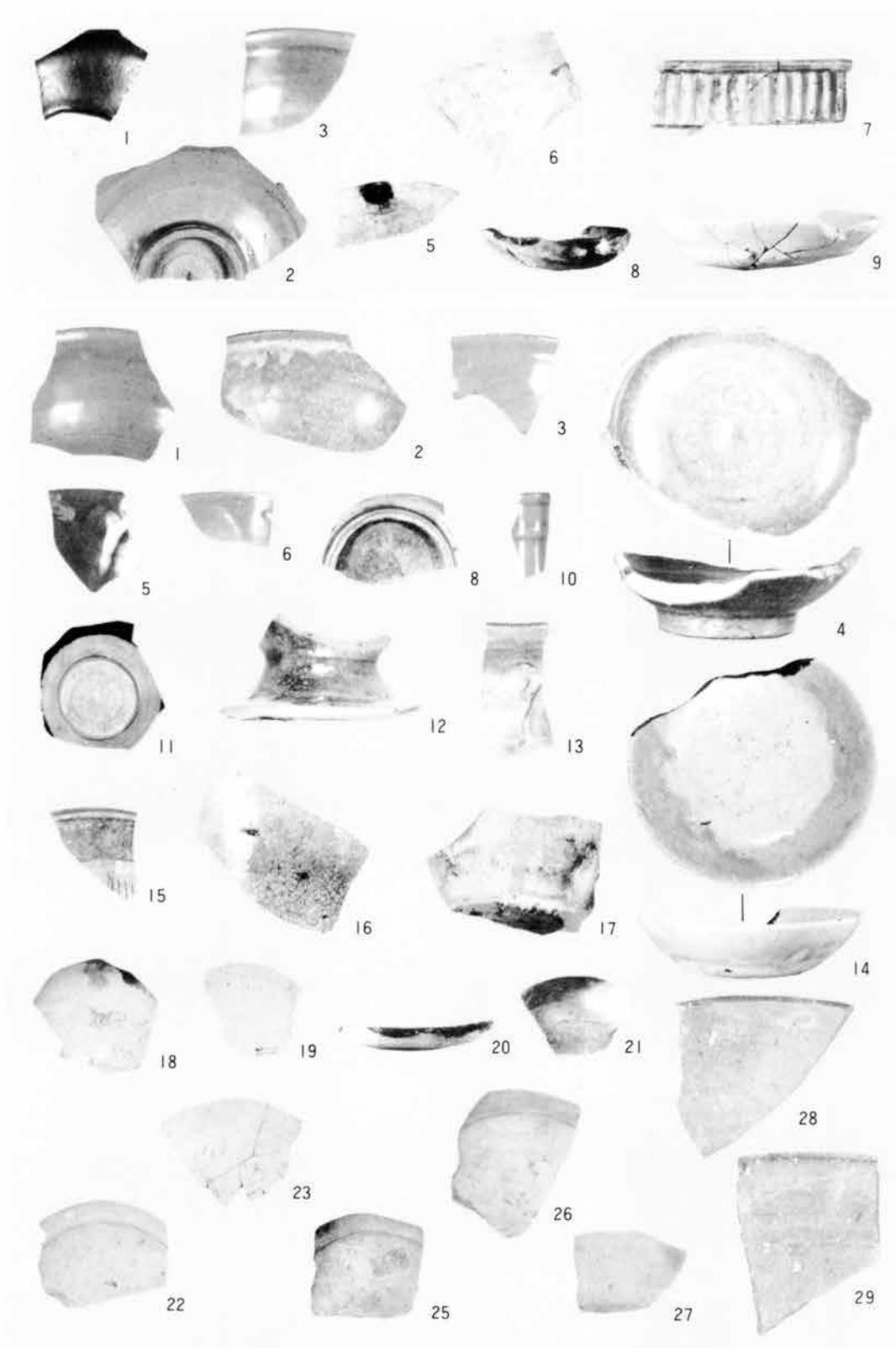
南壁断面



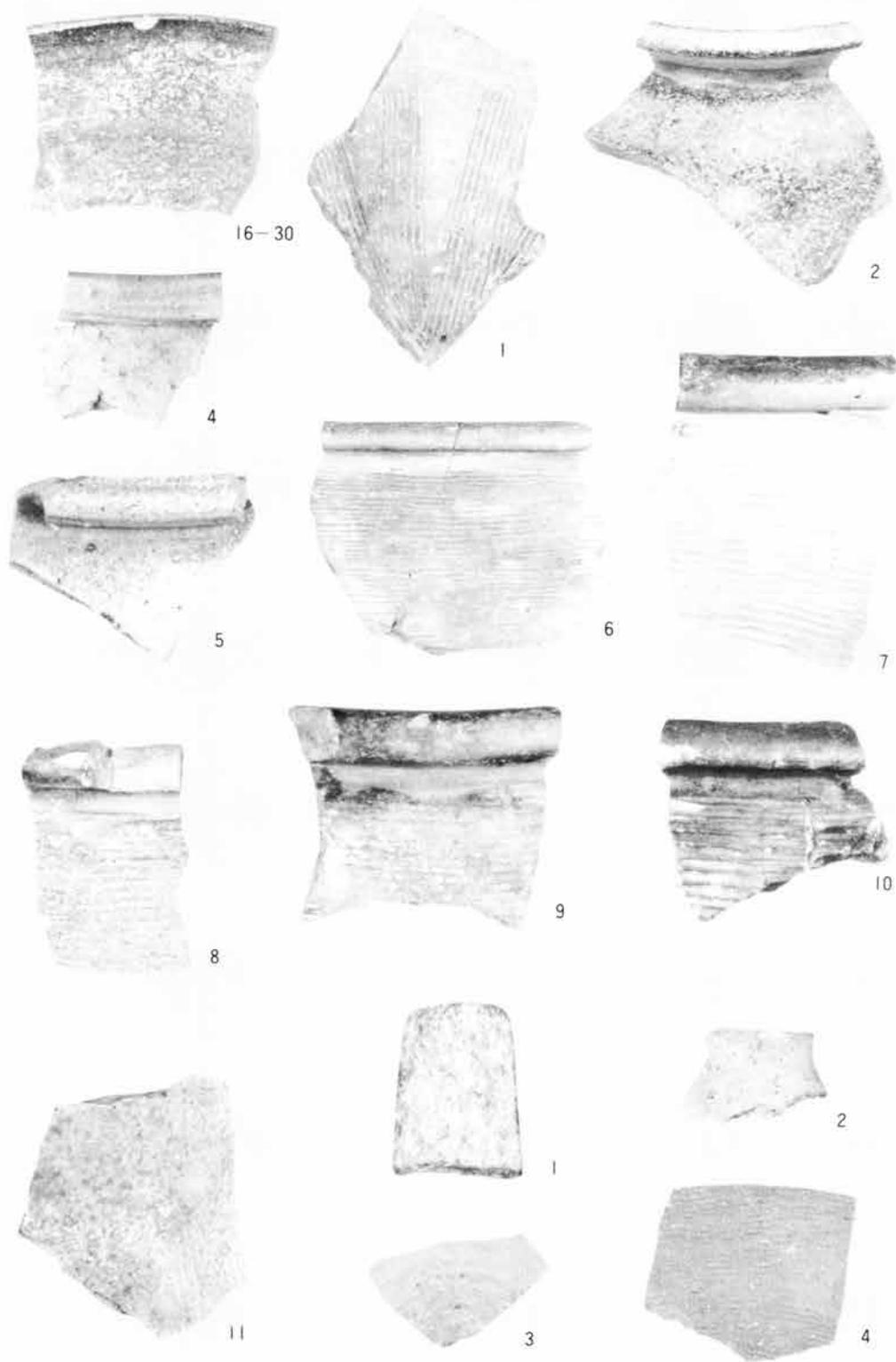
同 上(旧河道部分)



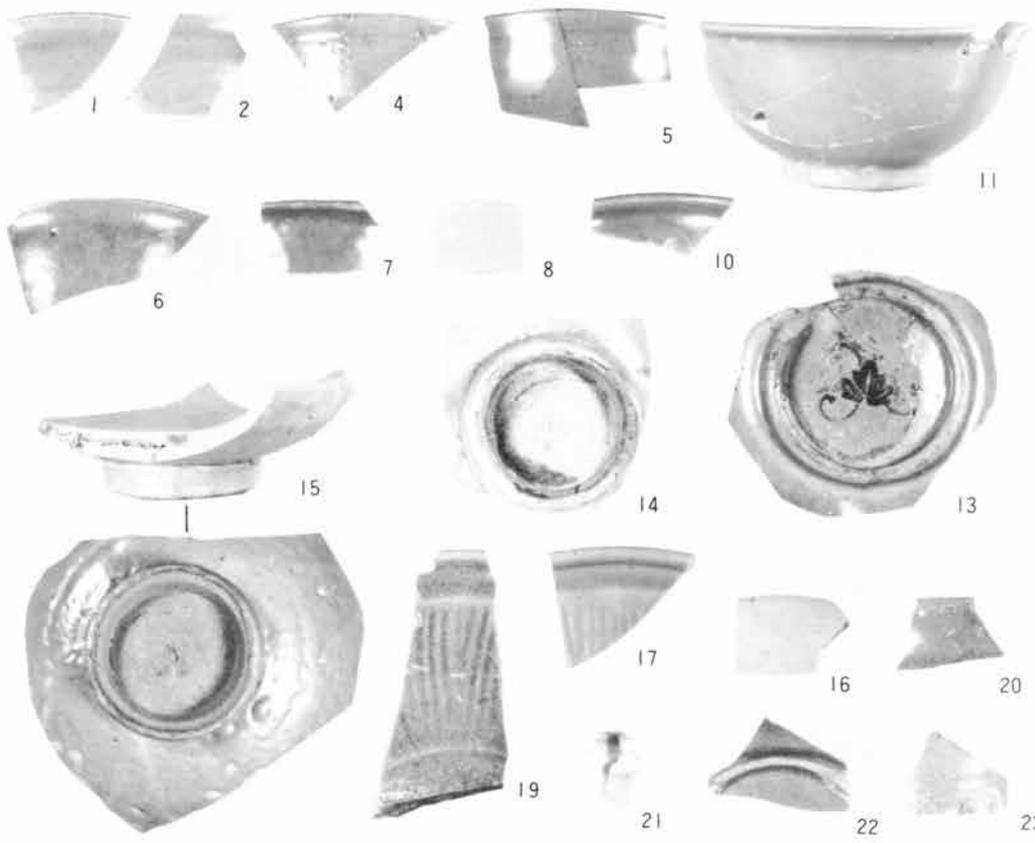
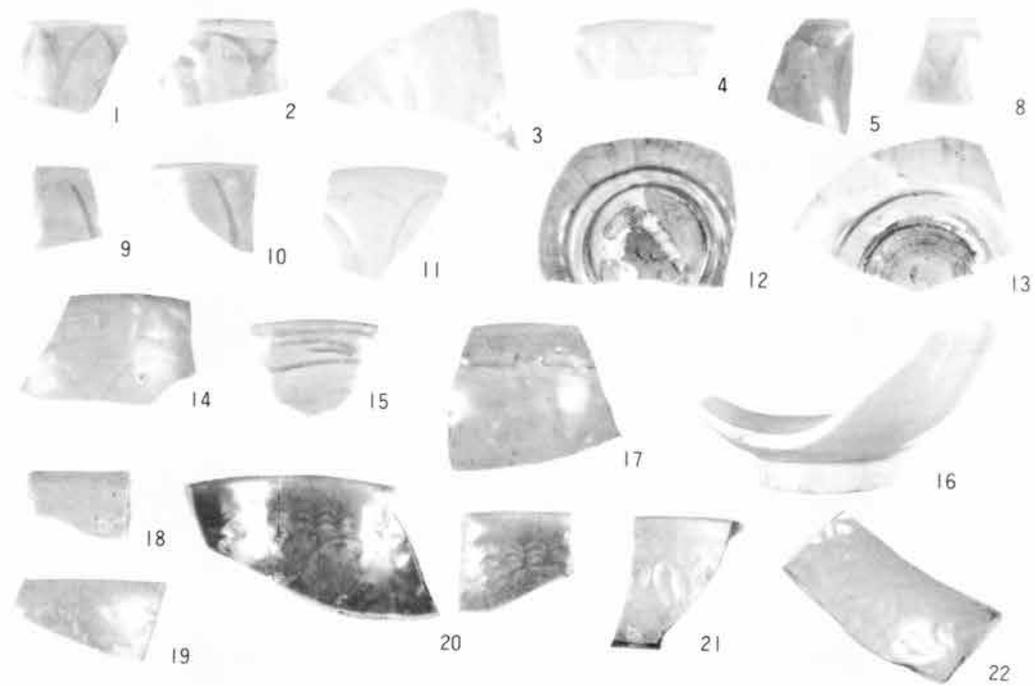
上・中層面出土土器(上一第11図)、第3号溝出土土器(下一第13図)(1/3)



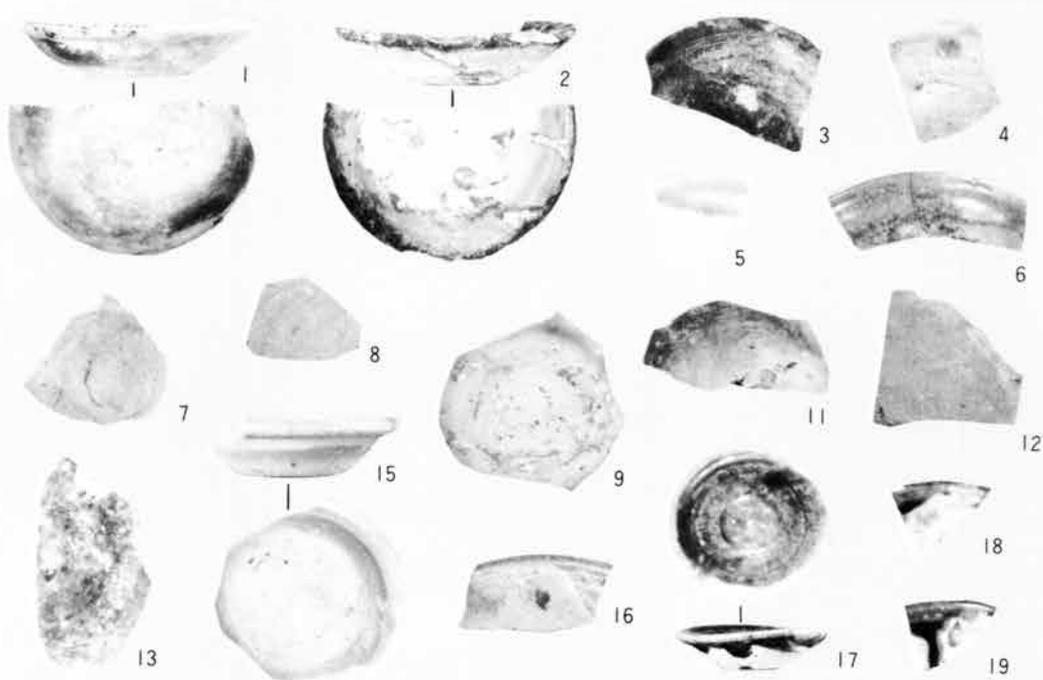
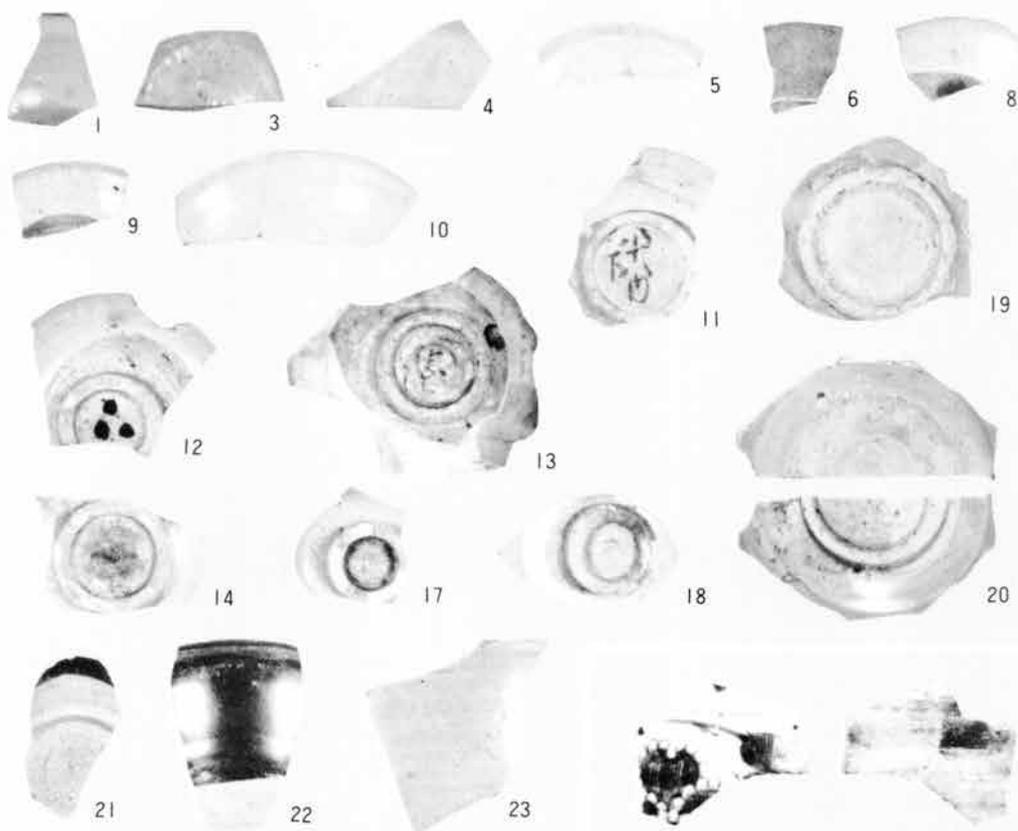
粘土面下出土土器(上一第14図)、地山面検出遺構出土土器(下一第16図)(1/3)



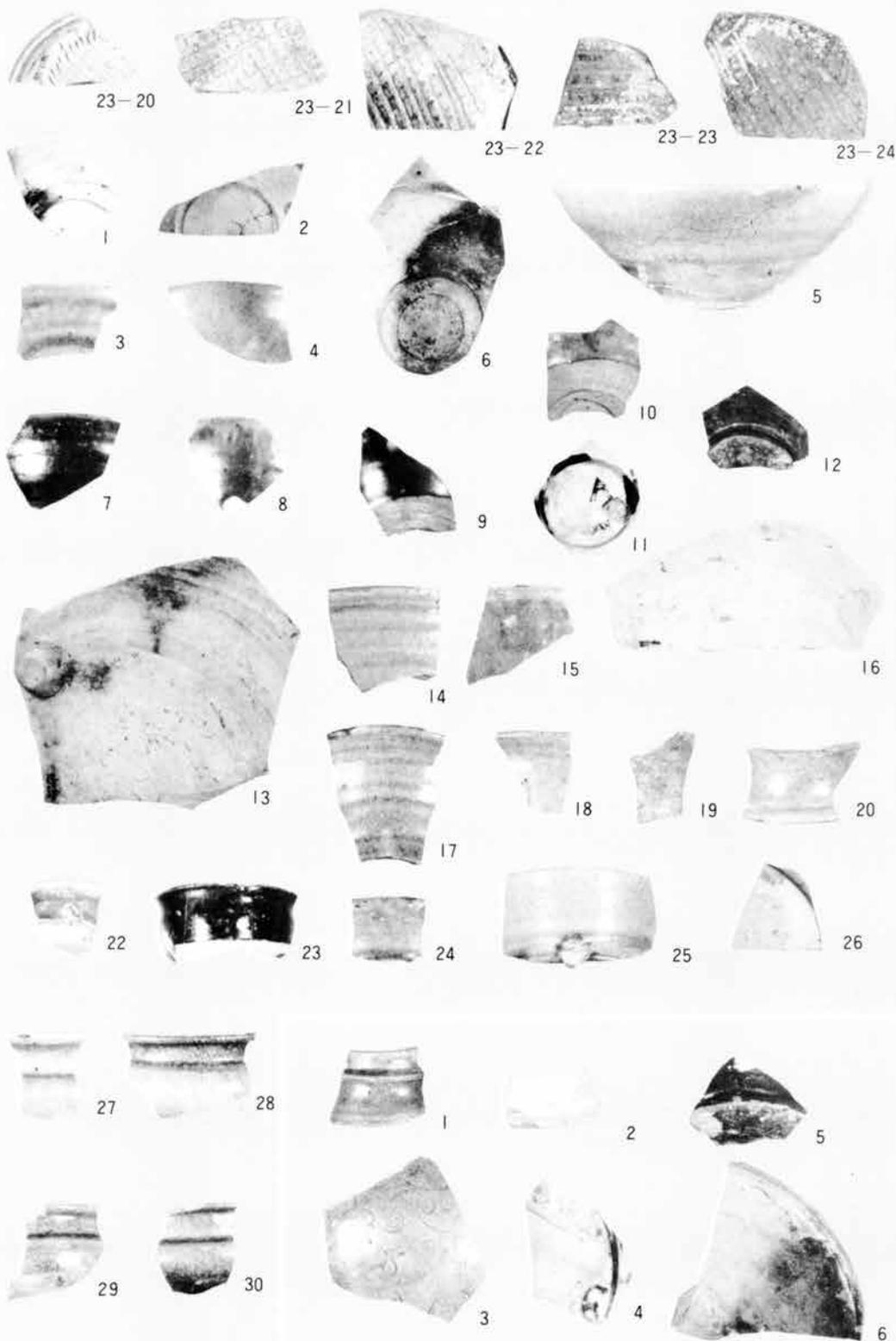
地山面検出遺構出土土器(上一第16・17図)、原始・古代の遺物(右下一第18図)(1/3)



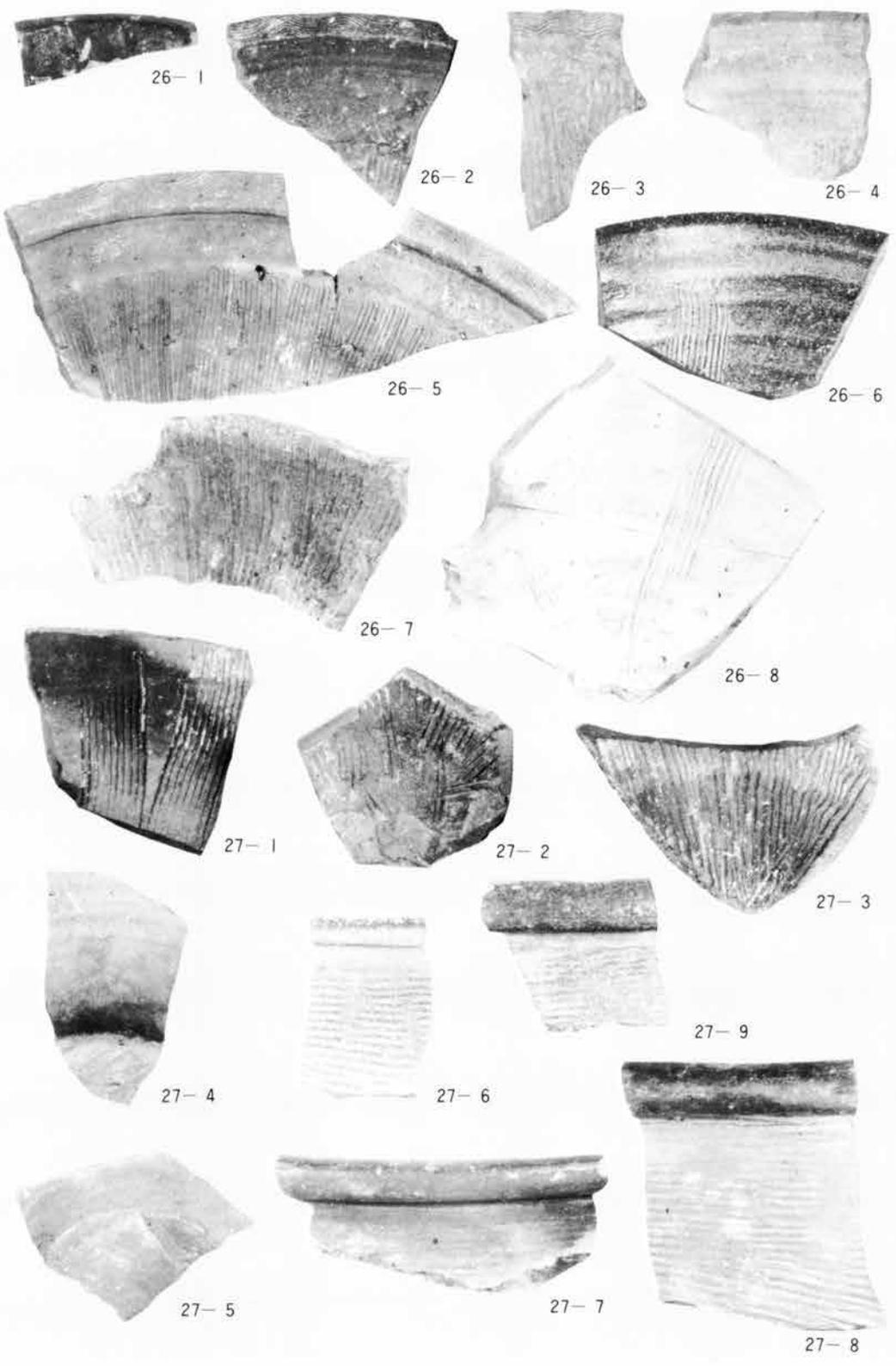
青磁(上—第19图、下—第20图)(1/3)



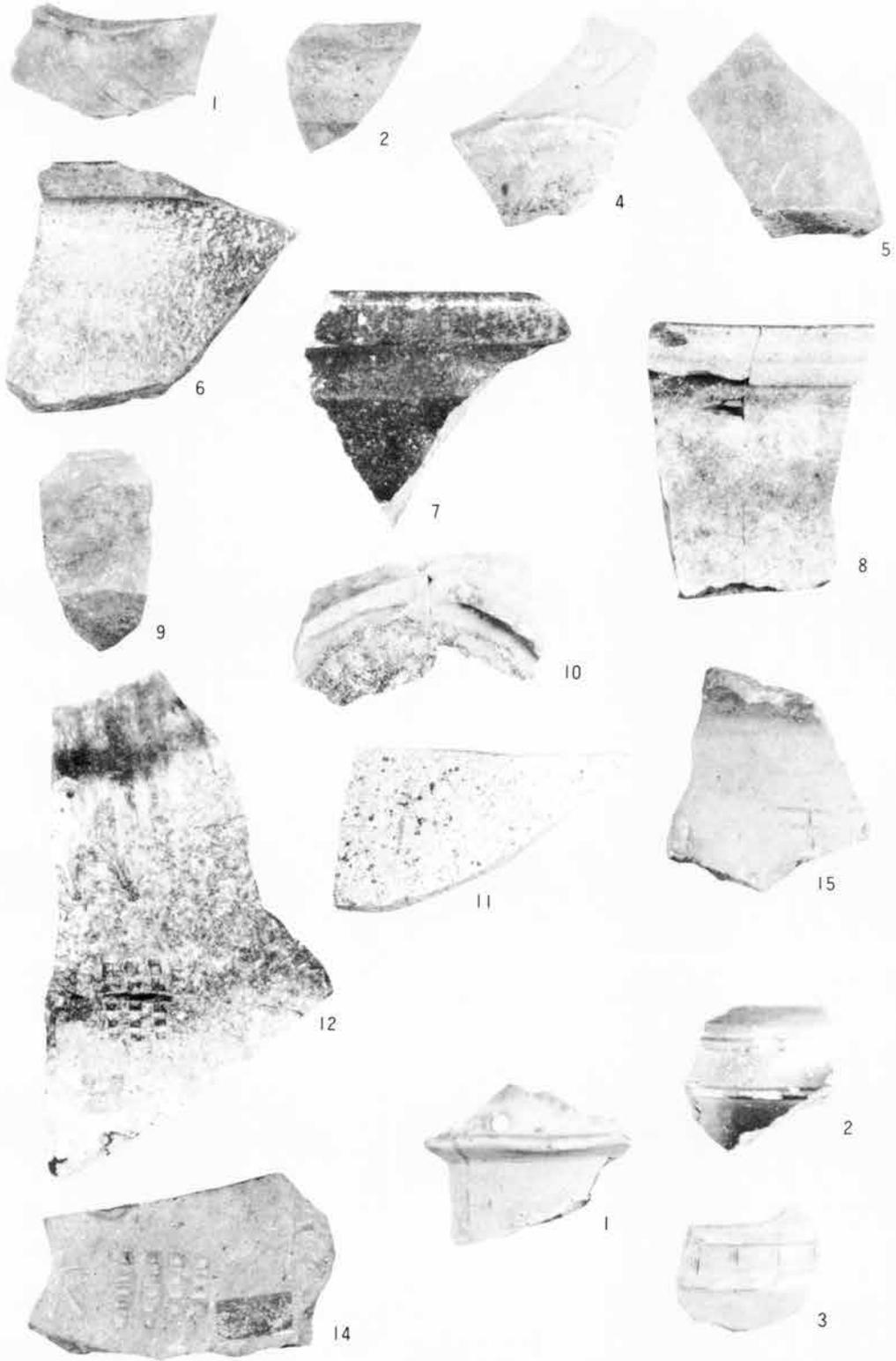
白磁・天目(上—第21図)、青花磁(中—第22図)、瀬戸系陶器(下—第23図)(1/3)



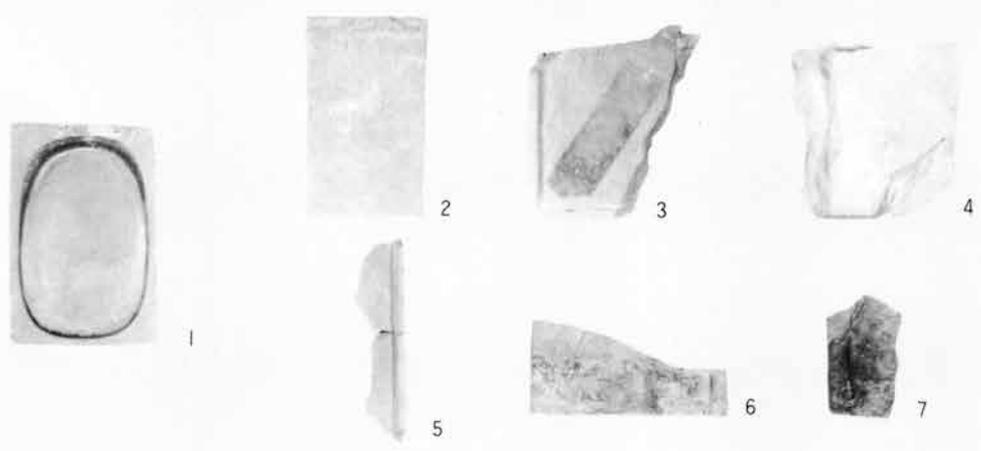
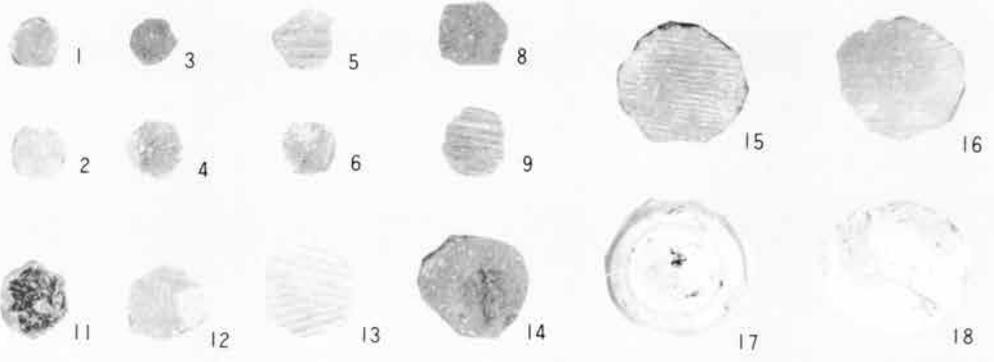
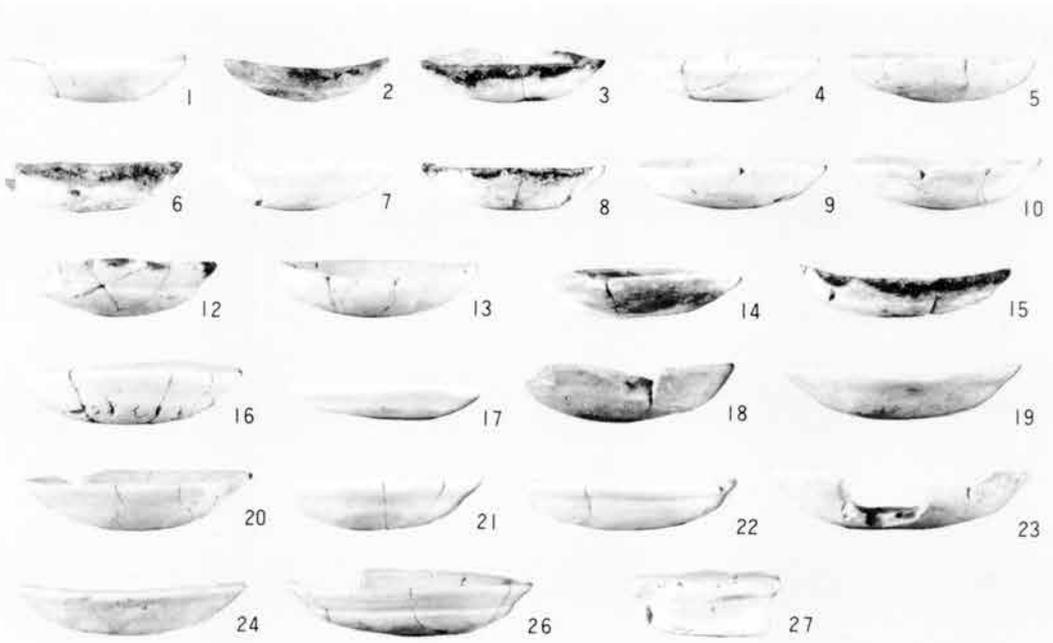
瀬戸系陶器(上一第23・24図、右下一第25図)(1/3)



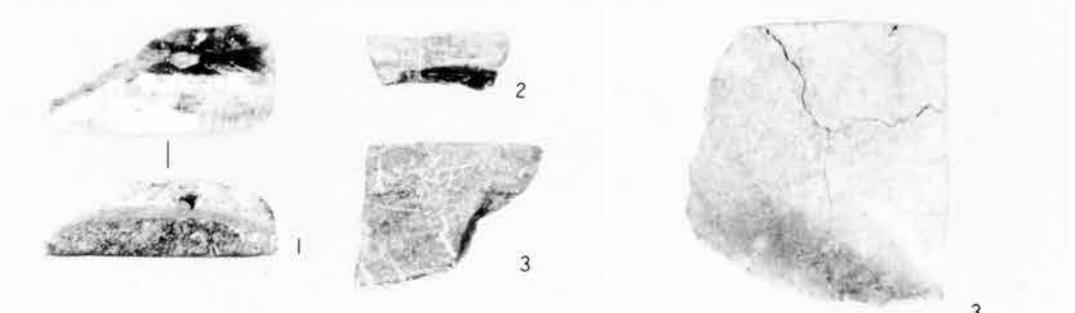
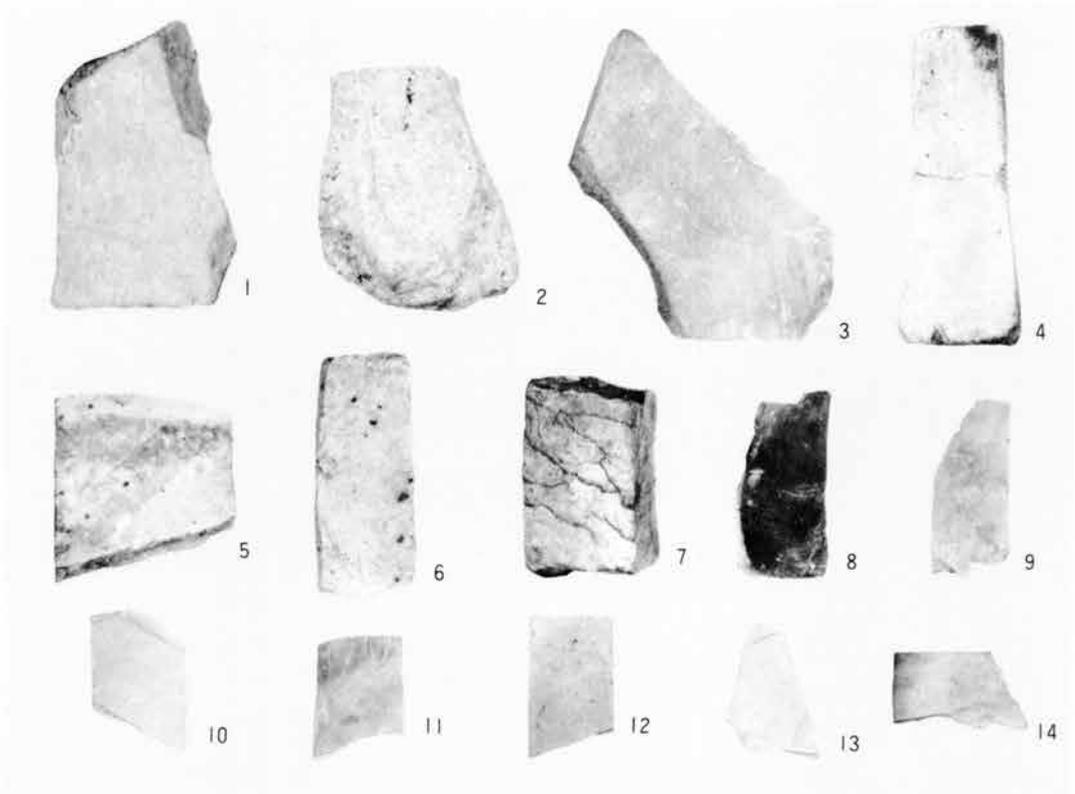
珠洲焼(第26・27図)(1/3)



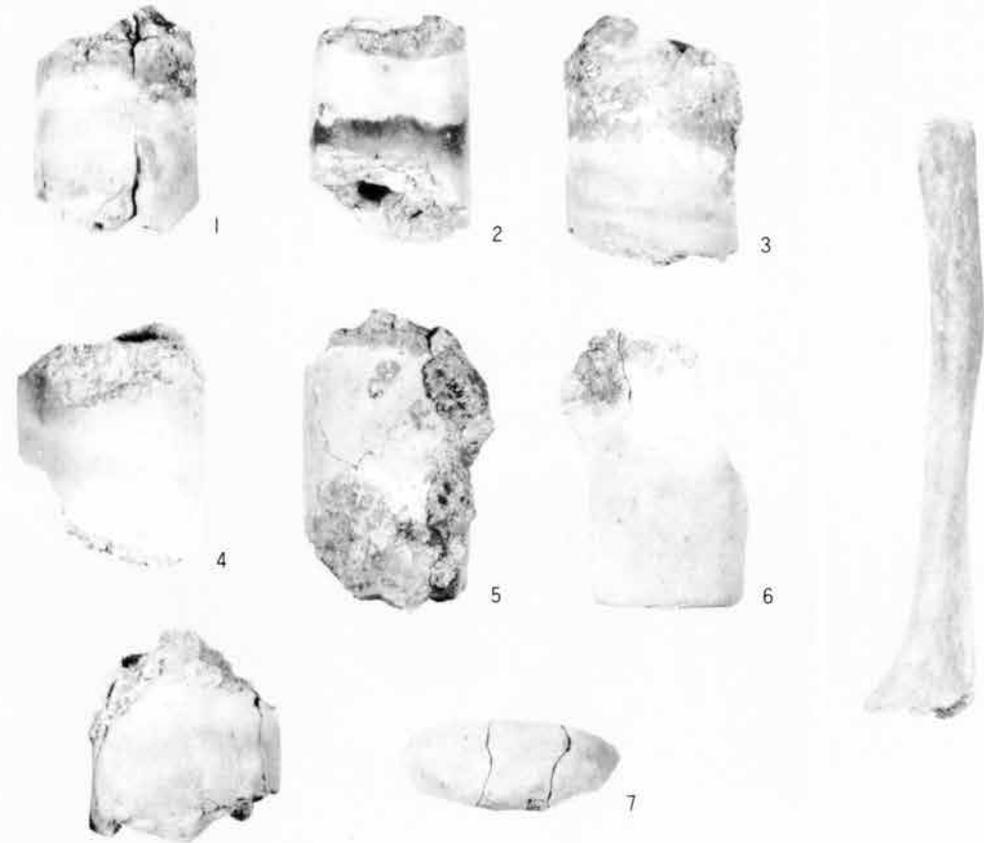
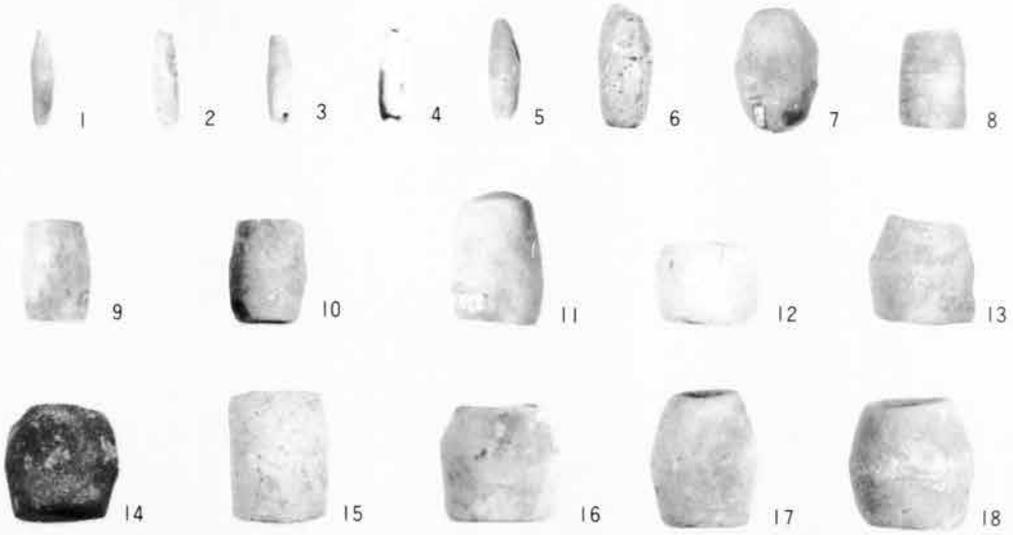
越前・加賀焼(上一第28図)、瓦質土器(右下—第30図)(1/3)



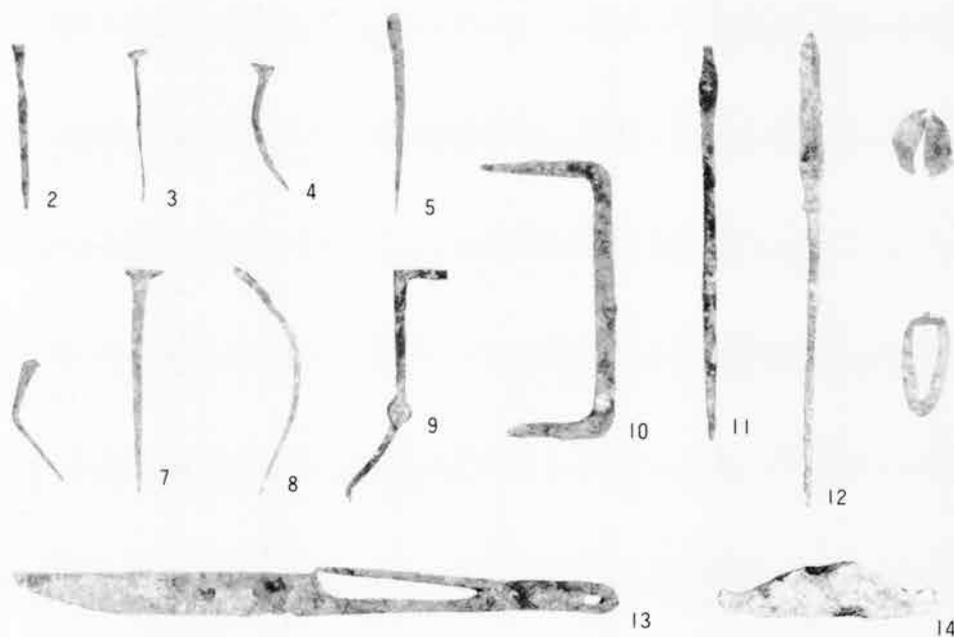
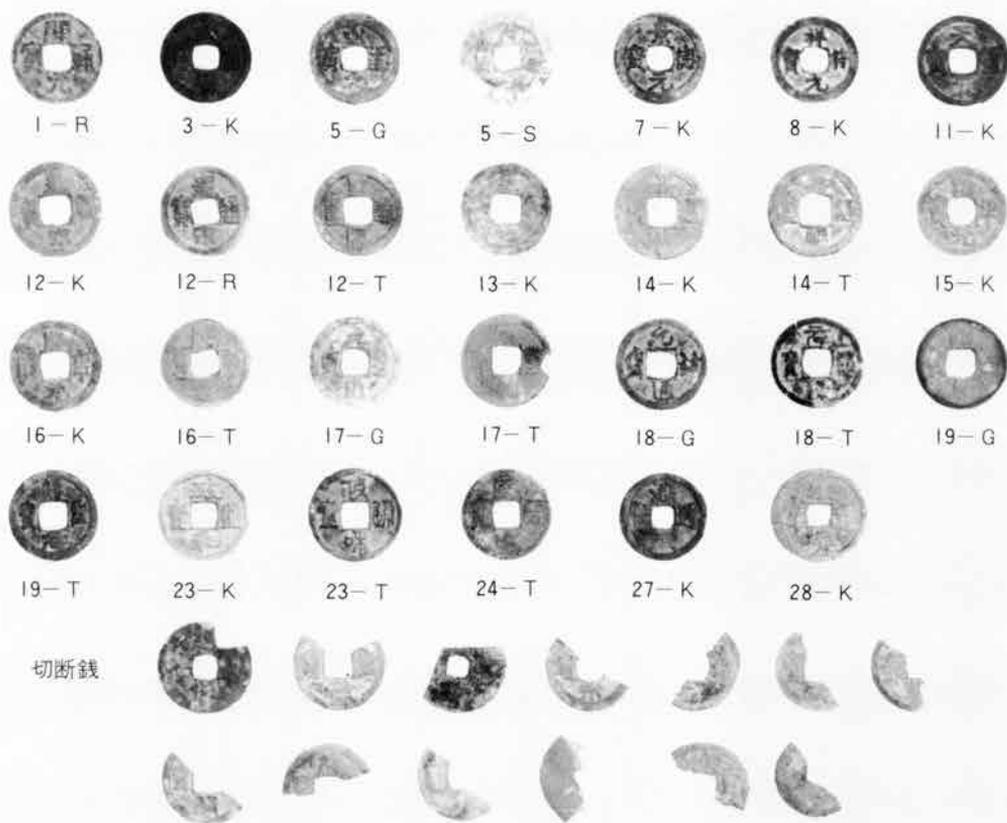
土師質土器(上一第29図)、円板状陶製品(中一第31図)、硯(下一第32図)(1/3)



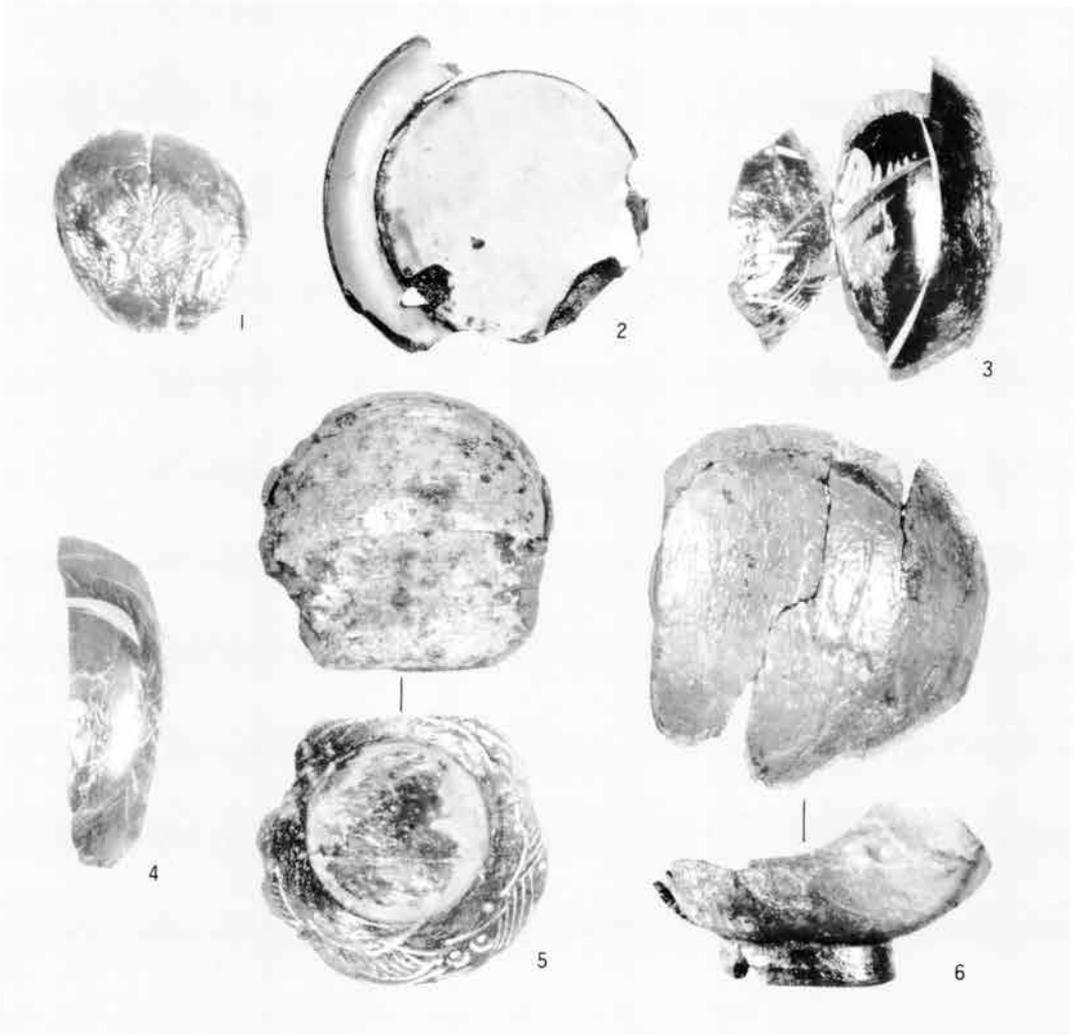
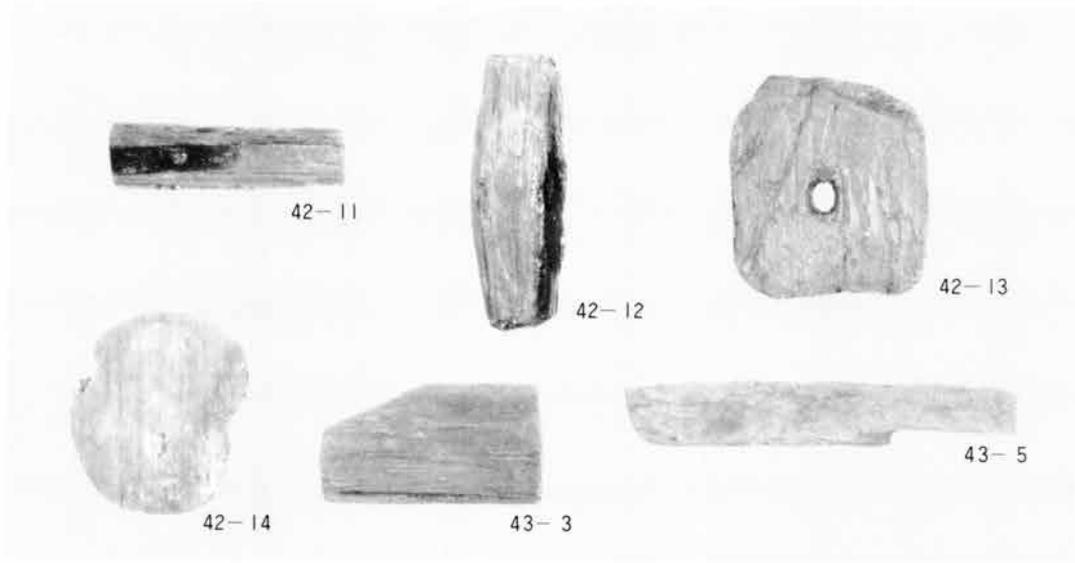
砥石(上一第33図)滑石製品(中一第34図)、行火・火打石(下一第35図)(1/3)



土錘(上一第36図)、鞆の羽口・るつぼ(左下一第40図)、人骨(右下一左上腕骨)(1/3)



銅銭(上一第3表・第38図)(1/2)、鉄製品(下一第39図)(1/3)



木製品(上一第42・43図)、漆器(下一第44図)(1/3)



柿經(上一第4表)、骨角製品(右下一第41図)(1/2)

普正寺遺跡

昭和59年3月20日印刷

昭和59年3月31日発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地

〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印刷 北国書籍印刷株式会社

石川県野々市町太平寺3丁目185番地

©石川県立埋蔵文化財センター 1984

